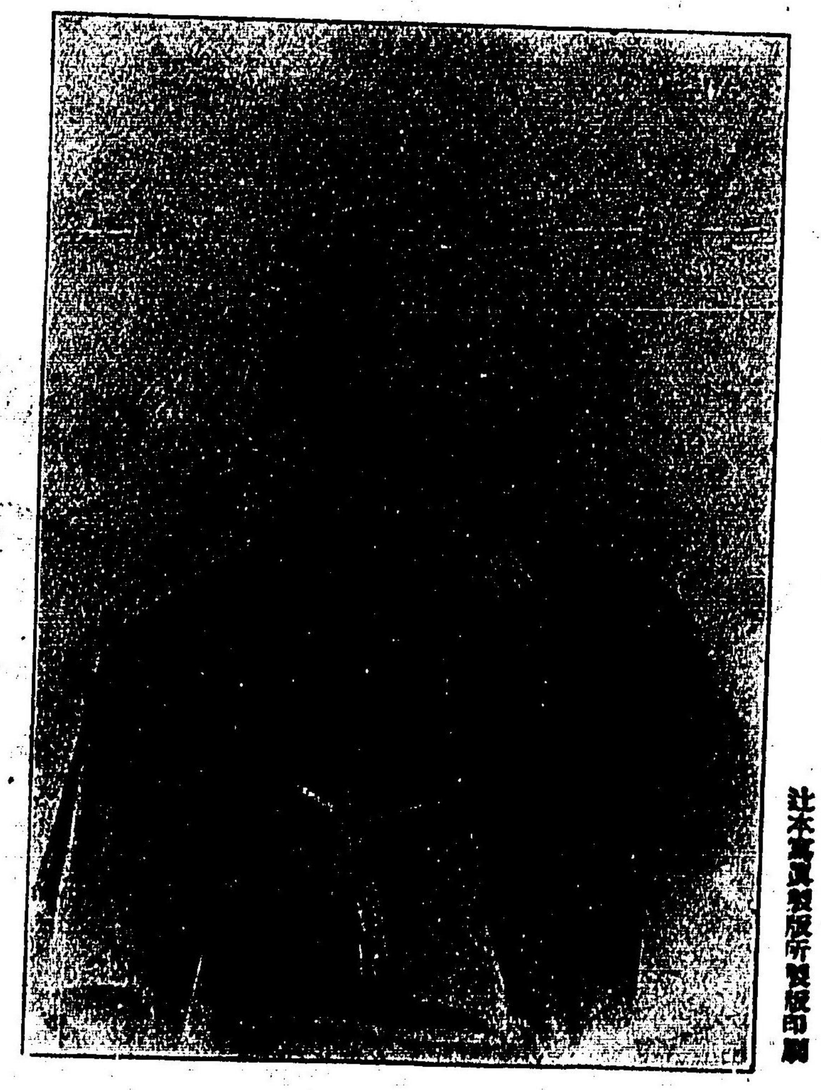
2-149

世五十流影心貞
齋藤明信先生之像

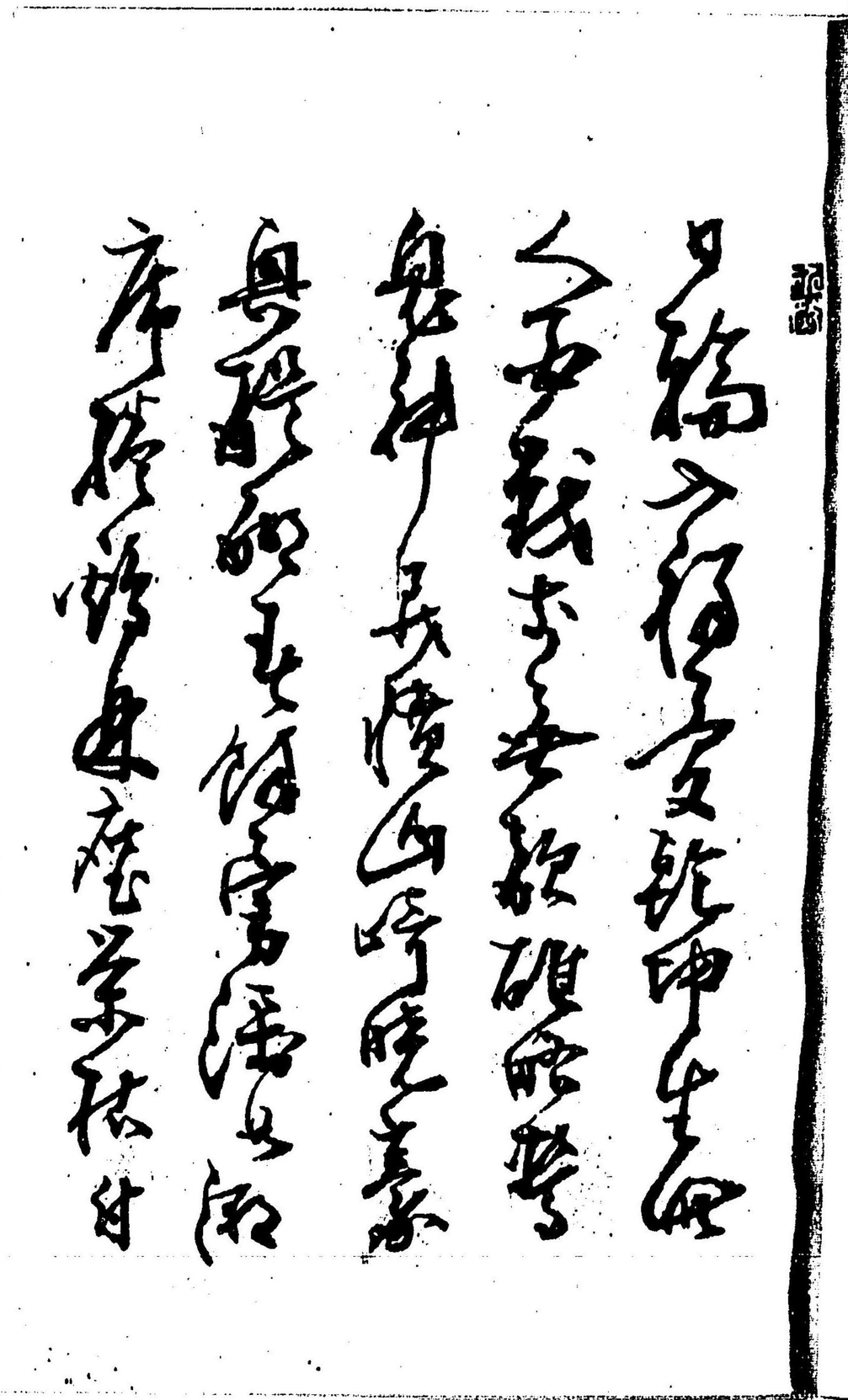


社本寫眞製版所製版印刷

藏書

身而先

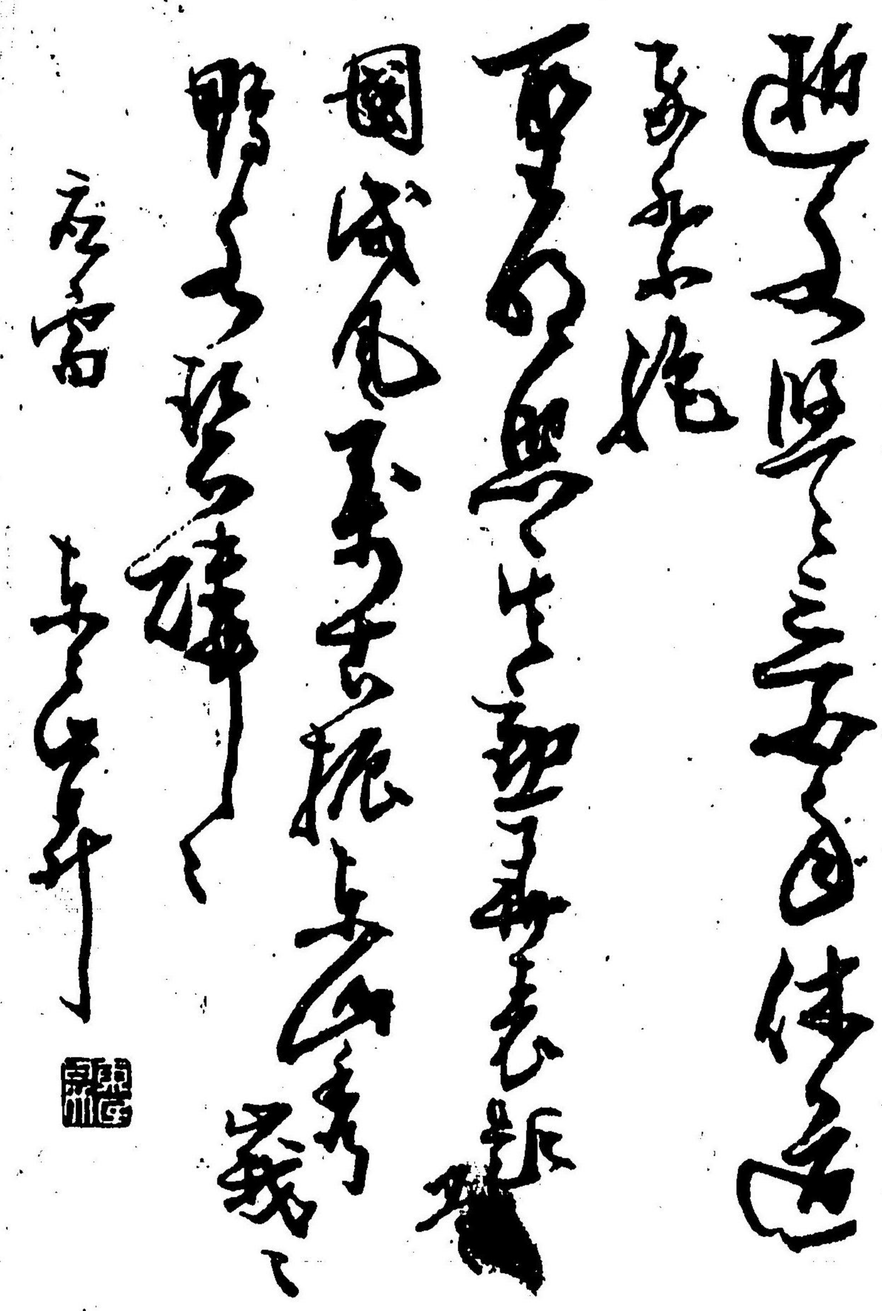
王仁隆聚書



88-145

序

我が國劔道に於ける往古より盛んなりと雖も中古杉本紀政元先生の神陰流なるものを創始せしより大に劔道の面目を一新し爾來其統を續き世に偏起せし名人達士其數を知らざ後世其師に依り屢々流名を變換せしも流祖杉本先生の傳ふ所と其術其奥儀に至りては其撰一なり予を以て之を視るに杉本流と稱して敢て不可なからん而して其傳統を繼くもの輩出するに從がひ其術に於けるも亦隨て進歩し皇國無比の流儀となるに至る豈に尊崇せざる可んや後世他に流派を案出し何々流何々派と稱するもの相踵て世に出づる



も皆當流の糟粕を嘗るものに外ならざるされば劍法を學ばんと欲するものは此神流を學ばざんばある可からざ今其傳統を繼きし諸先師の小傳を讀むに當り益々斯道の世に盛んなる所以を知る便ち一言を卷端に題し其隆盛を贊すと爾云

于時明治三四の初夏

半溪老漁撰

緒言

我が大日本帝國武道の起るや恐くも神代に創まりしものにて天御中主の尊天孫を豐葦原の中津國に降し玉はんとするに臨み經津主の神健雷の神をして蠻夷の皇化を順はさる逆徒を討伐せしめられし之れ軍を出すの起原とす夫れ軍を出し國と人とを征し玉ふは素より神慮にあらすと雖も命に背き法を犯し無辜の人民を妨害するものを平らけ百民をして其土に安んせしめんとの神慮より出つる所なり其基つく所を言はゝ人天調和し神人一致し智仁勇の秀氣を發表し天下國家をして長久太平ならしめんとするにあり、故に

後世に傳はる武道なるものも茲に起因するものにして武藝に於けるも亦然りとす神代にありては武器備はらざりしも追々國の開くるに從ひ鋭利輕便の武器を製出するに至る此武器を製出するや其使用法を知らざる可からず茲に於てか弓馬槍劍柔の術を案出し漸々工夫を凝らし益々其妙技を極むるに至れり

抑日本人民は四千年來の薫陶を受け發育せしものなれは人として謂ゆる大和魂なるものを享有せざるはなく又此大和魂を享有するを以て武道の尊きことを知らざるものなく源平以後德川氏の代に至るまて士たるものは四民の上に立ち武道を以て其職として一

朝事ある時は身命を抛ちて敵を征し賊を討したるを以て天下泰山の安きか如く苟も金甌の輕重を測るものあることなし此大和魂なるもの獨り武士に限るにあらす忠臣孝子烈女貞婦の我か日本帝國に多く産するは此大和魂の致す所なり斯の如く萬國無比の靈魂を以て大和男子を薫陶し武術を研究せしめしを以て敢て敵する者あることなく偶ま外寇の來り侵すあるも一舉して討滅し再ひ干戈を弄するの意なからしむ實に光榮ある國といふへし此人天調和より生する武道たる歐米各國といへとも絶てなしとはいひ難けれとも其起る久しからす其民を薫陶するも亦淺きか故

に其武其勇我が帝國に匹儔すへきものあらす中古王綱頽廢し兵馬の權下に移り武士の稱呼人民の專有する所とおりしかとも王政復古兵權も亦朝廷に歸し大元帥の大詔煥發する所に因り人民其向背を知り斯道再ひ隆盛に至り日清の役一戰にして其功を奏せしを以て武道の再興せしを證すへし爾來武術を研究するは天下國家の爲め一日も寛ふすへからさるの理を了知し上下とおく斯道を學ふもの日一日より多し茲に於て予は十數代相傳せる劒道の極意をして世人に知らしめんと欲するや久し恰も好し井口氏斯道熱心の徒にして資を投して其形を摸寫し一に大意を副書し

一見容易に了解し坐おからにして斯道の修業を爲さしめんかため印刷に附し廣く江湖の篤志家に頒たんと欲し予に其示授を乞ふ予も亦素志の遂るを喜ひ蘊奥を發露して其求めに應す今刻成るに及ひ其大要を卷首に辯す

明治三十四年孟夏

齋藤明信述

凡例

日本往時ノ武術漸々復古スルニ及ヒ劒術ヲ講習スルモノ竹片ヲ四割シ合テ以テ刀ニ充テ甲冑ニ充ルニ面甲手胴等竹革ヲ以テ之レヲ製シ之レヲ使用スルノ慣習トナレリ此慣習ヤ敢テ惡シト云フニアラサレヒ劒術ヲ學フニ只打合ノミヲ以テセハ大ニ不可ナル所アリ譬ヘハ書ヲ學ハントスルモノ草書ノミヲ學ヒ楷書ヲ學ハサルニ同シ豈ニ其根元タル楷書ノ筆法ヲ知ラズシテ能書ニ至ルノ理アランヤ予曾テ茲ニ感スル所アリ故ニ今直心影流劒道ノ楷書トモ云フヘキ其形ヲ世ニ知ラシメント欲シ當流ノ始祖數年鍛練ノ上編成

セラレタル素面素甲手大小ノ木刀及袋籠刀眞劍亦引
等ニ適用スル形ヲ當十五世ノ師家齋藤明信先生ニ乞
ヒ印刷シ斯道篤志ノ人ニ分タントス然レドモ予其形
ヲ摸寫セントスルモ拙ニシテ意ノ如クナラス依テ畫
博士安達吟光先生ニ依托シ屢々齋藤先生ノ教場ニ至
リ苦心勉勵シテ一々其形ヲ摸寫シ淨書ノ餘猶先生ノ
閲覽ヲ經聊モ謬リアレハ之レヲ訂正シ純然直心影流
ノ好摸形ヲ編成スルコトヲ得タリ凡ソ劍道熱心ノ徒
此書ヲ繙トキ讀了セハ先生ニ親炙シテ學フト同フシ
テ遂ニ其蘊奥ヲ極ムルニ至ルコト疑ヒヲ容レサル所
ナリ然ルニ現今ノ惡弊トシテ何藝ニ依ラス其書ヲ編

成スルヤ孟浪杜撰ノモノニ附スルニ何々捷徑何々獨
案内或ハ獨得自在等ノ標題ヲ掲クルニ依リ知ラサル
モノハ其標題ニ誑ムカレ之レヲ購讀スルニ一モ初心
ノ輩ヲ益スルモノナク概ヲ覆醬ニ屬スヘキノ書ナリ
故ニ世人之レニ懲リ其標題ヲ視ルヤ之レ亦孟浪杜撰
ノ書ナラントナシ措テ顧ミルモノナキニ至ル實ニ慨
歎スヘキナリ之レ畢竟奸商ノ徒只利己主義ヲ之レ事
トシ更ニ世人ヲ益スルノ氣象ニ乏キノ致ス所ナリ予
ヤ久ク書肆ニ身ヲ委スルモ傍ハラ武道ヲ嗜ミ柔術ハ
尤モ長スル所ニシテ其他居合擊劍ヲモ學ヒ聊カ其道
ヲ知レリ斯道ノ我カ國ニ於ケル一日モ廢ス可カラサ

ルモノナリ然ルニ如何セン縱ヒ武道篤志ノ人ト雖ヒ寒村僻地ニアリテハ其師ニ乏シク又今日多忙ノ營業ナナスモノニ至リテハ日々師ニ就テ學フノ閑ナキモノ世間少シト爲サス依テ此等ノ徒ナシテ居ナカラ武道ナ獨得セシムルニハ良書ニ依ルニアラサレハ他ニ依ルヘキノ道ナシ是ナ以テ此徒ナ益セント欲シ利益ノ有無ナ問ハス此書ナ印刷シ遍ク世ニ頒布スルニ至レリ故ニ其文體ノ如キハ聊カ修飾ナ加ヘス言文一致ノ體ナ用ヒ何人ト雖モ一見解シ易カラシメントスルニアリ讀者諸君其用意ノ周到ナルナ諒シ玉ヘ

發行者　魁眞樓主人敬白

自錄

法定之部

一八相殺破　壹本目　五十二頁
一一刀両斷　貳本目　八十頁
一右轉左轉　三本目　九十四頁
一長短一味　四本目　百十二頁

韜之形部

一龍尾左右　壹貳本目　百三十四頁
一面影左右　三四本目　百五十八頁
一鐵破退　五本目六本目七本目八本目　百七十四頁
一松風左右　九十本目　二百二頁
一早船左右　十一十二本目　二百二十頁
一曲尺　十三本目　二百三十三頁

一圓　連（刀連・體連）　十四本目　二百四十三頁

以上　拾四本也

小鞆之形部

一風勢　一本目　二百五十七頁

一水勢　二本目　二百六十八頁

一切先返シ　三本目　二百七十四頁

一鍔取　四本目　二百七十九頁

一突非押非　五本目　二百八十五頁

一圓快　六本目　二百九十六頁

以上　六本也

双挽之形部

此形は四本なれども法定の裏の手の形なるが故に名所は法定に同じ二本目三本目とつゞけて打つ故に他見する時は三本の形の樣に見へるものなり

第一元祖抑鹿島神流は杉本備前守紀政元を以て祖とす政元旦暮鹿島宮を祈念す其信心の奇特にや或夜夢の告げありて一巻の書を授け賜ふ是則神傳靈級の妙術なり是より法定の太刀筋生じたる也此一巻の書や源九郎義經公鹿島宮へ納められたるものにて六韜三略の秘傳なり此書を授りてより劔術の奥儀を極め名人の位を得られたりき全く神より授りたる秘傳なる故を以て神の御陰にて此術を得たりといふ所より之を稱して神陰流といふ杉本氏は常州鹿島郡に住し　桓武天皇の後胤にして一代に戰場に出て槍を合すること幾度なるを知らすといへとも拔群の高名を顯はせしは廿三度也といふ大永の頃高天か原の戰にて四尺三寸の薙刀を以て大敵の中に向ひ敵八人を薙伏せし時脇槍の爲に胸板の外れを突れ年五拾八才にして討死せら

れたり實に惜しむへき事なり

第二上泉伊勢守藤原秀綱は杉本氏の門下の正統にして兵法の達人なり此秀綱の代に至り流名に神の字を用ふるは恐れありとなし改めて新陰流と稱す

上泉氏は上州の人なり上杉寧政の家臣常陸國三輪城主長野信濃守の臣にて武功最も衆に抽んす信濃守永祿六年武田晴信の軍に討死し長野家沒落の後武田信玄秀綱を麾下に列せんとす秀綱二君に仕ふるを恥ち涙人し武道修行のため諸國を遍歷するの時門人神後伊豆守疋田文五郎を從へ大和の柳生に至るに二人の内一人を留まれ疋田を止め置き神後一人を從へ他國をめぐり又柳生に至る諸國に門人次第に增加し既に三千人餘に及ひ新陰の流名日本全國に高し其一二を爭ふは東國に奥山孫次郎細野内匠西國に

丸女藏人肥後藩士に鈴木兵庫柳生又右衛門等なり此又右衛門は後に但馬守と稱し天晴の名人と成りし人なり

第三奥山孫次郎平公重後に休賀齋と號す

奥山氏は奥平出羽守の七男なり上泉の兵法の正統を繼て三州奥山に住居し多年奥山產神を信心し百日參籠し兵法の妙理を明にし兵法の棟梁とならん事を祈りしに或夜夢に神託を蒙り妙理を明にし自つから奥儀を極めしは是全く神の御陰なればとて新陰の文字を改て神影流と稱す爾後劔を選ふこと舞を舞ふに身の影の我が形に隨ふが如く誠に自由自在にして門人を敎授し威勢を東海道に震ふ既に慶長十八年家康公三州岡崎城へ召させられ兵法の奥儀を請させられしといふ

第四小笠原金左衛門尉源長治後源信齋と號す

小笠原氏は三州高天神の城主小笠原與八郎君の弟にて今川家の臣たり今川家沒落の後德川家の臣となる然るに朝倉義景の事に關し疑を受け流涙せしが兵法熟練して入唐し多くの子弟を取り劔術を敎授す此子弟の中に張良の子孫有りて此者より八寸の延鐵といふ傳を開き又張良戟の傳を得て歸朝し彼是の術を折衷し終に十四本の箱の形を殘されたり此先生の代に至り神影流を改め眞新陰流と稱す

第五神谷文左衛門尉平眞光後に傳心齋と號す

神谷氏は水野出羽守殿の臣なり天性英邁にして劔道に遠す猶熟練の上發明するに此術元より神傳なれば無理なる業は毛頭あるべからず則ち天然自然の理に隨ひ赤子の心の如く無我無念にして人生固有の直なる處を以て本意と爲すべしとて眞新陰を改め新陰直心流といふ常に門人に

傳へて云ふ神は正直なるものにて則人の心も同じことなり歌に

こゝろたに誠のみちに叶ひなは
祈らすとても神や守らむ

との心也と新に直の字を指さし此直なる心は則眞にて神傳の本意なりと敎へて流儀の名とせられたりといふ

第六高橋彈正左衛門尉源重治後直翁齋と號す

高橋氏は永井大學頭殿の臣なり隱居して寛永年間より元祿に至り門人を奬勵し諸國を歷遊して劔術を敎授す此先生また流名を直心正統流と改められ法定に非の手を入られたり辭世の歌に

極樂とおもふこゝろのはかなさに
つひに生佛とけぬものなり

第七山田平左衛門尉藤原光德隱居して一風齋と號す

山田氏も永井大學頭殿の臣なり光德劔道に志篤く遂に熟練して正統の術を得たり故に師の重治手づから直心正統傳の免狀を光德に授く斯の如く師より極意秘密の處まて不殘傳を受け猶前を思後を顧み以て流名を改め直心影流と云ふ

第八長沼四郎左衛門尉藤原國鄕武州江府西久保に住する山田平左衛門の三男也正德年中より明和四年に至る迄門人を勸奬し諸國を巡ること年久し此に於て其名世に愈々高し當時劔術の稽古といふは皆形斗りなりしを國鄕先生の工夫にて仕合と云事の始めたり是迄は箱の形の十四本を顯りに鍛練せしこ此先生は年八才の時より上達して妙を得たり正德元年より明和四年迄五十七年也此間年號享保

元文寛保延享寛延寶曆を經也

第九長沼正兵衛尉藤原綱鄕後號活然齋

活然齋は國鄕の內弟子にて師と共に門人を奬勵し諸家へ代稽古に行くはどの熟練なりしかば師の代りに土岐伊豫守殿へ召出され道場を愛岩下田村小路へ移す

第十藤川彌司郎右衛門藤原近義は國鄕先生の門下の正統也夙齡より劔術を善くするを以て東都に名を著はし諸大名及ひ諸家老を始め諸士其外四方の劔客此近義の門に來り先生として尊ばざる者無し寶曆年中新に住居を下谷長者町に移し講場を經營するに來りて學ふもの彌盛に連綿として絕ず

第十一藤川次郎四郎藤原近德父の業を繼き劔術に熟練して更に筭裘を壓さす藝名高きしが惜かな病の爲め纔かに年

三十有八才にして卒す

第十二藤川彌八郎藤原近常は歳十一才の時父を喪し勝業を繼續する能はす故に門人桑嶋し近義先生の高弟赤石郡司兵衛孚祐を後見と定めて近常を敎導す近常壯年に至り齒術も大に熟練せしを以て後見孚祐より我術奥儀を傳ふ茲に於て近常又師家に復したり

第十三藤川彌次郎右衛門藤原貞先生は兄近德先生病むに當り其統を繼れたり此人非凡にして片眼に眼晴二ッづゝ有りて両眼に四ッの眼晴有り黑目の回りに金色の獨輪を帶びたり

此先生の代に至り當流元祖よりの傳書等に若し不明なる處有れば精はしく是を調べ法定及び種々の形の手氣相等を悉く究理し是を試合に懸けて活用さすることを敎へ子

弟を集めて說明し只管戰場實地の利害をおしへられたり加之嘉永五年浦賀沖へ米國船始て渡來せしより世に久く衰微したる武術俄に流行し諸藩主より其藩士へ劔術敎授の依賴有りて日々に午前は藤堂家午後は柳澤家と彼方此方へ往來するに其當時は乘る物といふは駕か馬引りにて人力車自轉車杯いふ物のなき時代なれば途中に手間どれ稽古時間の少なきを歎き千々に心を碎かれしが風と思ひ當りて同藩士の馬役を賴み馬喰を呼寄せて云ける樣我は日々に諸侯方へ劔術指南として出向に何分老年に及び步行遲き故馬に乘んと思へども是迄馬を飼はす加之我は小祿にて高金の馬は中々求め難し依て其方に賴度は難馬にても惡馬にても苦しからされば五六両位の馬を一疋世話致し呉間敷く哉と頼みければ馬喰は大口を開きて打笑ひ

私方には五六両の馬はなけれ共十軒店へ御越し有らば今少し下直にても御求め相成るべしと云ければ先生は大に悦ばれ其方家業の事なれば喰へ其方の馬に無之とも十軒店迄我と同道致し先方へ掛合て我に買はせくれよ其世話料は何程成共望に任すべしと申されければ馬喰は大に困り全く只今申上たるは坐興なりと申ければ先生は坐興も其場合にこそ寄れ我今内情を明して相頼し也有らば有る無きは無きと申さば夫にて事は済べきこゝ然るを右様の事を申せしは全く我を嘲弄せしこゝ左様の言葉は以來急度慥むべしと申されければ馬喰も眞に恐縮し難馬にて宜敷ば此御詫として金五両にて急度馬一疋御世話仕るべし去ながら此馬は難馬故頭へ近附かば喰附き乘らんとすれば抱く尻へ近附かば蹴る等の癖あり是は前以て御斷り申し置也と

云ければ先生の申されける樣夫は皆馬の持前なれば聊か苦からす明日引連れ參れよと約束して馬喰を歸されたり馬喰は年來飼殺しに成し置たる非常の難馬を引連れ行き道場のはめ板を蹴放し垣根を蹴破り或は人を蹴倒し喰付踏殺し種々荒れ廻はりしなばいかに劔術の大先生なれば とて必定持て餘すべし其時に至らは充分の手數料を貪らんと己が懐勘定をなしつゝ翌日に至り彼の難馬の口には網をかぶせ胴繩を掛け眼をかくし兩口を附て引來り其由を申込たれば先生は大に悦ばれ直に馬を庭内へ引込呉よと申されければ馬喰の云ける樣此馬は中〳〵左樣の事には出來難く昨日も申上置たりと云ければいや其儀は苦しからす家屋を蹴破るとも我か家屋也又人を喰ひ或は蹴殺すとも我の殺さるゝ也決して其方へ迷惑は相掛けまじと

申されければ馬喰はにたりと微笑みしながら馬を庭の切り戸口へ引來り轡も胴綱も外し眞の裸馬にして庭内へ追込たり然るに先生は餅を燒て盆にのせたるを持來り椽側に座して其馬を見分し誠に名馬也一向喰附もせず蹴もせず昨日聞しとは大に相違せり左らば其方に云聞する事あり總して生有る者は人を始め鳥獸に至る迄此世に在らん限り夫々己が役目あり譬ば馬に生れ來れば上は天主を始め宮家方の乘馬と成りて其役目を動るが上等の馬也大名旗本陪臣等の乘馬と成るは中等の馬也又荷物を乘せ或は農業に使はれ杯するは下等の馬也此役目を充分に動て此世を去らば其功に依りて後の世には人にも生れ替るべし然らばそちも乘馬となりて充分に馬の役目を盡すべし今より我そちの身を買受け飼置て日々我乘て諸家へ參り劔

術の指南を爲す也去る替りそちには我より外は誰も決して乘せず若乘者有らば其時こそ蹴とも喰附ともそちが儘になすべしと人に物いふ如く申されければ馬はもの申さねども如何にも合點せし風情にて眞に頭を低れて聞居たれば扨は我申たる事の能く聞分けたり左らば主從の約束したりと先生盆の燒餅を馬の側へ持來是を喰せなから扨々我か身に取りては是か誠の名馬なりとて頭を撫で脊を撫なぶして寵愛し直に其旁へ馬喰を呼寄せ如此この馬は我に馴染たり依て約定通り金五両にて買受たりと申されければ馬喰も眞に驚き顏色を變じ暫は物もいはざりしが頁あつて地上に屈み土に両手をつきて昨日より先生を蔑にいたしたる段眞平御用捨下されたし實は此難馬を引來りて先生を困らせ手數料を申受べく考へにて御庭へ追込

今や垣根を蹴倒し雨戸障子を踏破り或は人に喰付べし左すればいかに劔術の大先生にても手に及ぶまじと御道場の片すみに心おかしく思ひながら待居たるに何の音さたも無き故不思儀に思ひ居たる處へ庭へ參れとの事ゆへに直に是へ參りて此馬を見れは目いろも氣合も外の馬かと思ふ斗也私も年久し此家業を致せども加樣の事に出逢しは始て也實に大先生の御氣象と云へ御德と云へ恐ながら凡人とは決して思はれず私の不調法を御免し下し賜はらは冥加の爲めに此馬を献上仕度しと申ければそは以の外の事なり其方は馬の寶買するが家業也決して左樣の事は無用也我は約束通の金五両にて買求れば充分也譬ば我を蔑にするにもせよ此馬を引連與れたればこそ事足るなら め左すれは我もそちも申分無しとて先馬を假に中間部屋

へ入置馬喰を居間へ呼寄せ酒を呑せながら四方山の物語りなぞせられ馬の代金を拂て馬喰を歸し夫よりは日々此馬に打乘り諸家へ出稽古をせられ益道場繁昌し年七十有二才にして文久二年八月卒す

第十四 藤川太郎藤原憲先生は父の業を繼て箕裘を墜さず益々繁昌す加之其當時世に炮術大に流行したりしに憲先生は固より荻野流の炮術の達人なれば本業の傍ら炮術の指南をも始められ右両道とも繁り昌へて在りけるか明治六年のころ廢刀布告有りて一度廢業せられたれとも又諸君の進めに寄り更に明治十六年中神田淡路町へ劔術の道場を開きしに追々舊門人共是を聞及ひ四方より來りて教授を受るも有り或は其子を連れ來て門に入るゝも有り旁舊高弟等大に悦び盡力して有りけるに惜哉翌十七年病の爲

に六十四才にして卒す

直心影流十五代傳記

履歴

舊遠州相良藩主
田沼玄蕃頭藤原意尊之舊臣
(當時)東京府下南葛飾郡隅田村
千三百四拾壹番地住
東京府士族

齋藤々原明信

天保十三年三月生

一嘉永二年正月四日舊藩ニ於テ弓術射初式ノ節ヨリ藩主意尊ノ門ニ入リ道雪派ノ弓術ヲ學ブ

一同年同月同日馬術稽古初メノ節ヨリ大坪流馬術指南役時岡藏太ノ門ニ入リ馬術ヲ學ブ

一同年同月十一日具足開キノ式終テ槍術稽古始メヨリ指南役小河半吾ノ門ニ入リ神道流ノ槍術ヲ學フ

一同年同月同日劍術稽古始メヨリ土岐山城守殿御家臣藤川貞師ノ門ニ入リ直心影流ノ劍術ヲ學フ

一嘉永四年正月十一日舊藩主玄蕃頭ノ小間使役ヲ命セラル此時甫メテ十歳ナリ藩主常ニ武術ヲ好ミ弓術ハ道雪派木村次郎太郎師ノ門ニ入リ其薀奥ヲ極メ劍術ハ藤川彌次郎右衛貞師ノ門弟ニシテ免許皆傳ヲ受ケ後藤川家ニ於テハ一代三名ノ外許可セサル命劍神秘傳ヲモ受クル妙術ニ達ス且ツ已レカ欲スル所人ニ施スノ意ナルヘシ其臣下ニ武術ヲ教諭奬勵スル頗ル親切丁寧ナリ吾幸ヒニ幼ヨリ君側ニ仕ヘ毎朝伺候スレハ直ニ卷藁ヲ射ヨトノ命アルヲ以テ直チニ射場ニ出テ卷藁三十本ヲ射ル然ノ四ツ時頃(今ノ午

前十時頃ニ)至レハ竹刀ヲ持シ君前ニテ切リ返シ千本ヲ打振レトノ命アリ則チ君前ニテ切リ返シ千本ヲ打振リ終レハ其賞トシテ菓子等ヲ賜ハル夫ヨリ午後ニ至レハ君公側役ノ者ヲ從カヒ稽古場ヘ行キ槍劍ノ試合ヲ敎ヘ或ハ馬場ヘ行キ弓術馬術等ヲ諸士ニ敎授セラル其都度我ハ主人ノ刀ヲ持チ終始其側ニ侍シ其場ニ臨ミ其業ヲ修ムル事日々怠ラズ學ンテ嘉永六年十二月ニ至ル

一安政元年三月君公大阪御城番ノ命ヲ蒙リ錦城玉造口御門内ノ官邸ニ駐劄ス予モ亦追隨シテ此處ニ勤仕セリ

一安政元年五月ヨリ君命ニ依リ毎朝卷藁三十本ヲ試射シ又劍術ノ法定五本及ヒ韜ノ形三本ヲ修メ終テ君公ノ朝飯ニ給仕シ予モ辨當ヲ喫シ四時ノ時計ノ鳴ルヲ待テ道場ヘ行キ槍ノ素扱キ二百本ヲナス又午後ニ至レハ槍劍ノ試合射

的馬術等ノ稽古ヲ爲スヲ以テ日々ノ勤トセシ也

一右同年同月同日大阪玉造組與力小林新之亟ノ門ニ入リ狄野流ノ炮術ヲ學フ

一同年同月十日ヨリ玄番頭ノ教ヘヲ受ケ山鹿流ノ軍學ヲ習フ是ヨリ一六ノ日ニ當テ調練ノ足ナヨ備立採配ノ振リ方等ヲ學フ此日雨天ナレハ手裏劍唐半弓ノ術ヲ習フ

一同年八月十五日夫人ノ修ムル薙刀ノ打太刀ヲ命セラル是ヨリ日々薙刀ノ打太刀ヲ勤ム

一安政三年九月ヨリ保科彈正忠ノ臣森要藏師ノ門ニ入リ越後流ノ軍學ヲ習ヒ又同家ノ臣加地貞藏師ノ門ニ入リ陣貝ノ術ヲ習フ

夫レ陣貝ノ術タル容易ノ業ニアラス予之レヲ學フヤ厥精刻苦ヲ極メタレハ其大畧ヲ左ニ記シ後進ノ徒ニ示ス

一抑貝ノ吹方ニ於テ第一ノ效ヘトスルハ初中後ト云コトナリ此初中後ト云ハ貝ヘ息ノ入方ヲ云フナリ初ハ如何ニモ息ヲ細ク和ラカニ入レ中程ニ至リ少シ太クシ終ハアクマデ太ク强ク吹切ルヲ云フ此初中後ノ息合備ハラサレハ如何程達者ニ吹ト雖トモ貝ノ音遠ク遠セサルヿ先ツ其習ヒ初メニハ一聲吹トテ吹込ム息ヲ細ク平ニ長ク保チ息中程ト思フ處ヨリ段々息ヲ太クシ既ニ息ノ絶ヘナントスル時アクマデ息ヲ太ク吹切ルヿ是ヲ度々吹ク時ハ眩暈スルコト度々有リ去ナガラ息ノ强ク成ルコト又不思儀ヿ數日間斯ノ如クスル時ハ自ヅカラ初中後ノ聲音調ヒ平夷ニ至ルモノナリ然メ後息繼ギノ術ヲ習ナリ此息ツギノ術ト云ハ貝ヲ一聲ニ吹出シ其息ノ絶ントスル時又其息ヲ鼻ヨリ吸收シ腹中ニ有ル息ヲ補足シ吹ク時ハ聲音ノ絶ユルコト無

シ此業ヲ悉皆會得センニハ勉強シテ三年間ヲ費スヘシ加之裏稽古ト稱シ裏中廣野ニ行キ凡ソ三時間吹奏ヲ修行シ彌熟シタル者ト師ノ見認ル時ハ三里半乃至四里程ノ深山ヘ行互ニ時間ヲ定メ師ト門人ト符ヲ吹キ合スニ其符相合スレハ茲ニ於テ初メテ免狀ヲ受ルヿナリ

一安政四年正月十一日我十六歳ニシテ前髮ヲ剃リ實名ヲ明信ト稱ス藩主ノ側役トナリ勤仕ノ餘暇弓馬槍劔炮術及貝術柔術等ヲ學ヒ怠ルヿナシ萬延元年藩主若年寄ノ命ヲ蒙リ出府シテ馬場先御門内ノ官邸ニ住セリ當時世上西洋ノ兵式盛ニ流行スルニ及ヒ予モ亦此道ヲ學ハント欲シ江川太郎左衛門師ノ門ニ入リ蘭式ノ練兵ヲ學フ漸クニシテ世上英ノ練兵ノ法開ケ殊ニ其法モ敏捷ニシテ一見予カ意ニ適ス當時神奈川定番ノ役員一班英ノ練兵式ヲ學ヒ其組頭

ニ林百郎ト云ル人有リ尤モ英ノ練兵ニ熟ス隨身シテ英式ノ練兵ヲ學ヒタリ然ルニ慶應二年ニ際シ舊幕府ニ於テ佛國ヨリ(シヤノアン)(マランン)ノ練兵兩教師ヲ雇ヒ佛傳習隊ト稱シ大ニ練兵ノ道ヲ講究セヲル我素ヨリ此道ヲ好ムヲ以テ時々行テ其運動技業體操等ヲ見ルニ活潑勇壯ニシテ大ニ日本男子ノ意ニ適ス故ニ予ノ心又佛ノ兵式ニ傾クト雖モ學フニ路無ク苦心焦思ノ際王政維新ノ御代トナリ隨テ諸藩モ大變革ヲナシ遠州相良藩ハ上總ヘ轉地ヲ命セヲレ小久保藩ト改稱シ舊藩主ハ則チ小久保藩知事ヲ拜命シ予ハ小久保藩權大屬ヲ命セヲレ軍務ヲ擔當ス此時靜岡藩士族武谷惣吉ナルモノ佛直傳ノ練兵ニ熟シ加之英佛學ニ通シタルヲ以テ及ヒ角田渡ト云ヘル兩師ヲ雇聘シ弊藩士阿部庄司鈴木織人嶋田實中桐友衛坂崎新牛込秀政及ヒ予

ノ七名軍務ノ士官トナリ厥精シテ佛ノ練兵ヲ講習シ弊藩中勇壯ノ士若干ヲ撰拔シ一中隊ヲ組織シ日々五時間ッヽノ稽古ヲナサシムルニ凡ソ八ケ月ニメ熟練ノ兵トナル此舉ヲ聞クヤ漸々隣藩ノ士官一見シ此式ヲ傳習ヲ受ンコヲ希カヒ主トシテ佐賀藩士官若堀東城ノ兩氏ヨリ依賴シ來ルニ因リ早速承引シ教師一名及我等ノ内ヨリ二名佐賀ヘ一週間ッヽ出張シテ是ヲ傳習ス其他仮野藩櫻井藩追々傳聞シ右兩藩ヨリ佛式ノ練兵傳習ノ依賴アリ是又承引シ追々傳習セントスルニ至リ突然厥藩ノ命アルニ因リ我輩七名本官ヲ免セラレタルヲ見テ武谷角田ノ兩教師モ我輩布告ヲ守リ佛式ヲ擴張セントスルニ際シ此命アルハ我々定テ遺憾ナルヘシト推測セラレタリ是ヨリ小久保縣大炮小銃彈藥其他武器一式ヲ武庫司ヘ納ム時ニ右掛官内田政義

其武器ヲ檢査シ曰フ此度厥藩ニ付諸藩ヨリ納ムル所ノ武器數多アレ𪜈今其藩ヨリ納ムル武器ノ如ク整ヒタルハ一品モ無之其藩武備ノ整ヒタル實ニ賞讃ニ堪ヘストナリ夫ヨリ軍務官ノ御用ヲ了シ歸縣セシニ徒然ニシテ身體ノ措置ニ苦シミシニ恰モ好シ東京區内邏卒ヲ置クト聞練熟ノ兵士三十名ヲ誘引シテ出京シ第六大區ヘ邏卒奉職ヲ出願シ桑原權典事ノ檢査ヲ受ケ市中取締組ヲ命セラレ何區ヘ何人何小區ヘ何人ト區々ニ別レ我ト嶋田ナル者ハ六大區八小區ヘ組込マレタリ然ルニ我始メ市中取締リ組ト云職務ヲ誤解シ必ス相當ノ役ナラントト思ヒニ其職タル意外ノ輕役ニメ不二山ノ如キ笠ヲカブリ凡三尺余ノ棒ヲ携ヘ銃服ノ袖ニ赤キ筋アリヅボンモ同斷雨雪晝夜ヲ論セス一時コトニ市中ヲ巡羅スルニハ殆ト困難ス然レ𪜈今ニ至リ如

何トモシガタク遮莫アレ一ト勉強セハ幾級カノ昇進ハアルベシト忍耐スルヿ一ケ月余ニメ取締リ小頭トナリ昼夜ノ巡羅ハナサス屯所ニ在リテ賊ノ糺問等ヲ爲スヿトナレリ然ル後

一明治五年八月十五日開拓使十五等出仕函館詰任二等權區長

一同年十一月十五日十三等出仕任一等區長

函館在勤中一大區二大區三大區ノ兼勤ヲ命セラル

一明治九年九月中老母大病ニ付函館ニ於テ職務ヲ辭シ歸京ス

一明治九年十一月三日舊藩主田沼忠千代家令トナル

一明治十年六月十日田沼家ノ家令職ヲ辭シ西南騷擾ノ際ニ徵募巡査ヲ出願シ

一明治十年六月二十日四等巡査心得拜命臨時巡査第六番大隊ニ入ル

一明治十年六月二十一日三等巡査心得拜命

一明治十年六月二十二日二等巡査心得拜命

一明治十年六月二十三日一等巡査心得拜命

一明治十年六月二十四日警部補心得拜命第一課警備掛兼臨時巡査取締練兵演習教導方擔當ニ任セラル六番大隊ノ屯所ハ西丸下舊安藤邸ナリ

一是ヨリ日々櫻田外舊毛利邸ノ跡ニテ練兵ノ教授午前三時間午後ハ屯所ニ銃槍術ヲ教ヘ同五時ヨリ有志者ヘ劍術ノ教授ヲナス

一明治十年七月中習士野ヘ演習ノ爲メ出張被命同所ニ至リ午前ハ二時間午後ハ三時間ノ練兵ヲ教授シ夜ハ士官ヲ集

メテ號令ノ稽古ヲ爲サシメタリ

一三週間目ニ陸軍淺井中佐同所ヘ出張セラレ同氏ノ檢閲ヲ受タルニ我ガ預リシ四中隊ハ第一中隊ト入替ヘラレ我ハ第中隊長被命即日歸京シ直ニ戰地ヘ出張ノ内命ヲ受ケ其夜午前三時ニ出發シ翌午前十一時ニ歸京ス時ニ今朝鹿兒島落城ノ電報警視ニ達シタリト聞キ落膽云フ可カラス實ニ總身綿ノ如クニ成リタリ

一明治十年八月二十八日右六番大隊吹上御庭ニ於テ練兵式天覽有之各大隊共解隊被命我モ左之通リ慰勞金ヲ賜リタリ

警部補心得　千葉縣　齋藤明信

義ニ西南騷擾ノ際ニ方リ能ク報國ノ義務ヲ辨シ速ニ應募出京候段奇特ノ事ニ候依テ慰勞トシテ金二十圓下賜候事

明治十年八月三十日　警視局

右ニテハ滿腔ノ不平禁スルヿ能ハス又々警視ヘ出願シ第一課ノ寺嶋亦野ノ両氏ニ面シ强テ一度鹿兒島地方ヘ出張ノ命アランヿヲ乞フニ両氏云フ現今ノ處警部滿員ニテ其望ニ應シ難シト予云フ決シテ役ヲ望ムニアラス巡査タリトモ宜シト両氏云フ左マテノ望ミトアレハ再度巡査ト成リ出張スヘシト直ニ巡査ヲ拜命シ第一方面四分署詰ト成リ鹿兒島ヘ出張シ日向ノ宮崎詰トナリテ同所ニ九ケ月余在勤シ御用結了後歸京シ四分署ノ巡査ニ練兵並ニ射的ノ教授ヲナシ明治十

二年三月六日辭職シタリ

是ヨリ一身種々ノ不幸ニ罹リ非常ニ落魄シ人力車ヲ借リ新大橋々畔ニアリテ客ヲ待ツニ一人ノ乘客ナシ三日ヲ經テ爲ス能ハサルヲ知リ深川區牡丹町ニ山吉ト云ヘル昆布ノ製造場アリ其雇夫トナリ日々勞力スルニ我カ意ノ如クナラス船ヨリ昆布ヲ荷ヒテ棧橋ヲ渡ラントスレハ棧橋動シテ川ヘ落チ一身昆布ト共ニ浸潤シ言フ可カラサルノ體ニ至ル百事斯ノ如クニシテ用ヲ便セサレハ一ケ月余ニシテ其雇ヲ解カル實ニ茫然トシテ爲ス所ヲ知ラス徒ニ默坐スルニ會マ劍術同門福地光長氏來リ云フ君落魄此極ニ達セハ猶一層憤發シテ我ト共ニ淺草公園内ニアル擊劍會ヘ出席センカ然ル時ハ日々何分カノ財ヲ得ベシト切ニ予ヲ奬勵ス茲ニ於テ予モ其厚意ヲ謝シ其周旋ヲ依賴シ夫ヨリ公園ヘ行キ野見老尊師ヘ面會事

情ヲ述ヘ懇々賴談セシニ予カ心中ヲ諒察アリテ承諾セラル是ヨリ非常ニ勉强シテ朝ハ人ニ先タツテ行キ貝ヲ吹太鼓ヲウチ槍モツカヒ居合ヲ拔キ我カ得タルコトハ少シモ厭ハズ演藝シ勵精ノ致ス所ナルカ追々諸君ノ愛顧ニ預リ淺草寺ヘ被雇嗣テ明治十六年七月中龜岡甚造君ノ雇トナリ老母ト妻トヲ携ヘ同君ノ邸内ヘ引移リ晝夜同邸ヲ守護シ其間ニ我好メル道ナレハ年少ノ子弟ヲ集メテ鹿島神傳ノ法定ヲ始メ諸ノ形ヲ教授スルニ年ヲ追ヒ月ヲ追フテ子弟中免許ノ地位ニ至リシ者五六名アルニ至ル我カ喜ヒ之レヨリ過タルハナシ然ルニ我ハ年十三才ノ春ヨリ鹿島神傳ノ法定數十萬本ヲ俯メタレ共動モスレハ手ノ崩レ安キモノ成レハ何卒後世ノ爲メ法定ヲ始メ諸ノ形ノ手ヲ圖解ニナシ置カント常ニ顧居タルニ何ゾ圖ラン我門人井口松之助氏カ三年前ヨリ大ニ盡力

アリテ今ヤ此書ノ成ルニ際シ且ツ我幼時ヨリノ履歴ヲモ併記セヨトノ依頼ニ應シ大畧ヲ記スルコト斯ノ如シト云フ

一法定木刀ノ圖

法定及び鞘小鞘刃引の形に至るまで打太刀と仕太刀の立向ひ業の起り始めの場合は人の大小にも依るおれども大概二間の距離なり然るに此繪圖を認るに本紙の都合に依り大小場合のつまりたる處もありし故前に是を述置きぬまた業の終に至りても業の起りの始め時の距離に同じと知るべし

一法定一本目のの第一圖には八相發破一本目あれども余は皆八相と畧しあり以下一刀両斷より長短一味迄皆是に同じ

刄挽の形の一本目より二本目三本目に至る處の解

き明しの不足處同三本目ゟ四本目に至る處右同斷

法定の理歌

あられふる鹿しまの神の御をしへは
この法定の四本にうある
法定は神のをしへの道かれば
つとめてはげめ業の源
法定はまかぶ程猶みち遠し
いのちのあらむかぎりつとめよ

鞘の形の理歌

かまかに仕合爲すより鞘の形の
太刀のかつ〳〵操りかへしうて

敵のうつ太刀のちからを我にとり
うけ流しては切りかへし行け

小鞘の形の理歌

小竹刀は手足の業のしけき故
かほこゝろをば丹田におけ

小竹刀突非押非理歌

あせりかば打もとむるも蹴もからぎ
こゝろをすへよ自在かるべし

竹刀の形松風の理歌

いつとかく己かこゝろに透かくは
いかかる敵もまつかぜの聲

刀引の形の理歌

業もやゝとゝのひてうつ双挽かり
つるぎを生かす道をたつねよ
法定のうらは刃ひきの形かれば
をもては氣合うらは手の内

明信

剣術修行の心を

太刀うちのこゝろは武き御雷の
かみのをしへを守れもろ人
玉太刀のさやのかか山ふみわけて
なほおく深き道ろたづぬる

剣術

都牟賀理のたちの光りも益ら雄の
やまとこゝろをみかくこのわさ

心

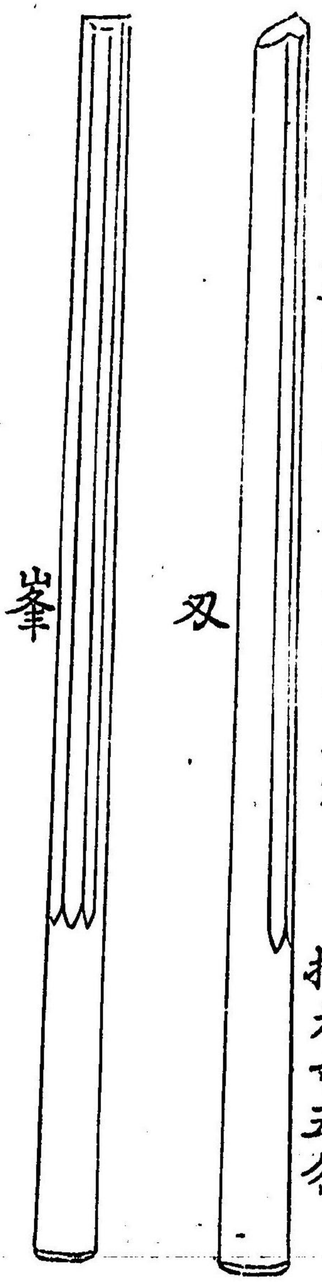
動かしとおもふ心はいつしかに
たゝてうこかぬ心をろしる

明鏡

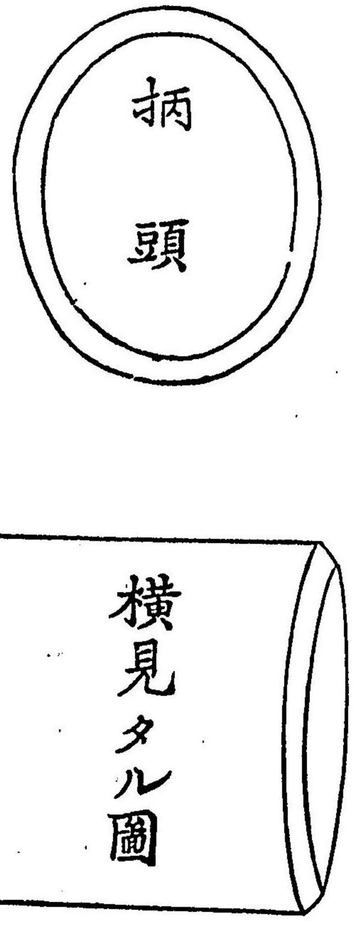
我祈るかしまの神のみかゝみに
直きこゝろの影うつるまて

斯書は徒に學理を喋々するものにもあらず、又理論を述べたるものにもあらず、實地に活用せん爲めに著作せるものなれば、書中不文の個所元より少なからざるべし、希くは讀者其意を諒し、以て其實を拾てられざらん事を乞ふ、

木刀之圖　總丈ケ三尺三寸五才　柄九寸五分



大サ圖ノ如ク



八相發破 一本目

鹿島神傳の法定を始め種々の形を誓古為んとする時は打太刀も仕太刀も圖の如く木刀小向ひ右を向き足を爪立て屈ミ左り沈膝を下ふつき敵を弓手小請て袴の股立を取り互小身支度整て第二圖の如く正面小向ふ也

仕太刀

總て敵を弓手小見るといふハ劍客の可得心事なり譬ば夜行をるふ向ふより来る者と行違ふふ我ゞ右へ除きて則敵を弓手ゟ見るこ此の如く為せバ若其者異心ありて我小組附或ハ刃向ふといへども妻手は自由小理くなり是を

左り除て敵を妻手小取りて行く時小斯の如き異變有らば突然理手を取らも或は理手を打ときおどしてハ大小不覺を取るべし因て太刀打の道の教へ初めふも斯の如く敵を弓手小見る事を習ハしまゝ譬古中面の緒のとけしとり竹刀は道弦ゞあゞるとかいふ時も弥張其由を相手小断り我り位地小至り敵を弓手小見て其用を為す様ゟかゝハ至然此理由ゞ腦髓へ染込て不覺を取らさる様尊師ゞ教へ置きしなり

打太刀

八相　第二圖

仕太刀

木刀の正面ふ向ひ
両足を爪立て圖の如
くの様ふり打太刀木
刀を手ふ取らゞし
て其儘すらゝと立
つ仕太刀同時ふ是ふ
倣ふ姿勢は圖の
如し

打太刀

八相　第三圖

仕太刀

是より打太刀右足を
手元圖の如くして一足
づゝと引詰へ三位太
刀同時か是か習よと
きゝ打太刀左り右と前
か進む仕太刀同時か是か
習へ
但し右左と後と引詰へそ三姿
と左り右と前進とた三姿が打
太刀仕太刀とゞこれ三圖と同し

打太刀

打太刀

仕太刀

八相第四圖

打太刀太刀を仕太刀の左りかたと前へ進みとろうと姿よりの如へ両足を爪先で屈むがごとく圖の如し

八相第五圖

仕太刀

打太刀右手ふて木刀を取りおろら立ち足を八文字ふ踏む仕太刀も同時ふ是ふ習ふ圖の如し

打太刀

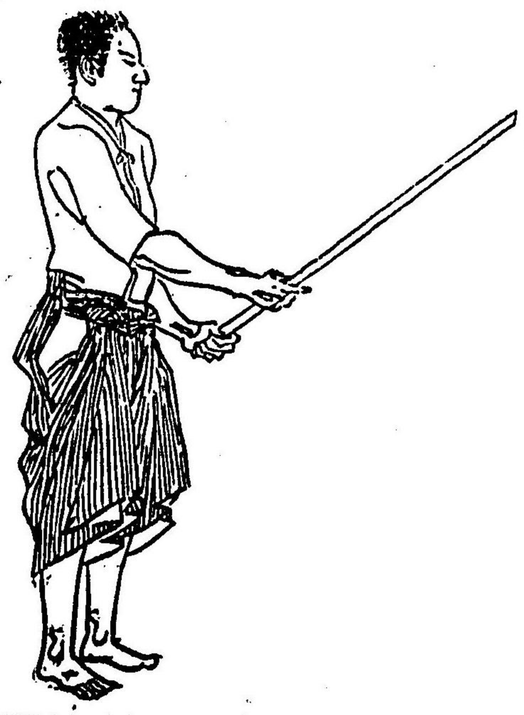
八相　第六圖

仕太刀

打太刀も仕太刀も精眼の構といふて太刀の切先を敵の両眼の間に附

れば圖の如し體勢の構手足の眼のくばり等圖を參照して見るべし

打太刀



八相　第七圖

仕太刀

打太刀精眼ふ付たる太刀ヒ左り手を放し親指と人さし指を伸し跡三指を閉し是を木刀の刄むきとおもふ所へ添へ圖

打太刀

の如く両手を頭上へ高く揚げ夫より左右へ大きく圓く開くおり仕太刀も同時ふ是ふ習ふ

八相第八圖

仕太刀

打太刀は圖の如く右手を頭上へ揚げ少し前へ出し太刀をかざし仕太刀同時ふ是ふ

習ふ此時打太刀も仕太刀も足を左り右と前へに八文字ふ踏ミ出ス

打太刀

八相第九圖

打太刀斜の構といふて圖の如く太刀を己が右わきへ卸す

仕太刀は打太刀が斜ふ構ふると同時ふ大刀を上段ふ取る

八相第十圖

打太刀が斜ふ構たる太刀を上段ふ取直すと

仕太刀は八相の構といふて上段ふ構たる太刀を右肩へ卸せば打太刀仕太刀とも圖の如

（寫生の都合みて横より見たる圖なり）

八相　第十一圖

「掛聲」打太刀は左り此足を引おくら木刀を打出に時
仕太刀ハ右の足を充分に踏込ま
ら木刀を打出に時ヤー
エーイ

打太刀ハ圖の如く上段より左の足を踏出し右の足を左の足の一所ふ踏止え是と踏違ひふ左り足を引まゝら木刀を打出に仕太刀ハ打太刀が左の足を踏出に共ふ左り右と充分ふ踏込おくら打太刀の頭上を目掛け木刀を打出せばかくの如く太刀先合ふ也

仕太刀

此一合の太刀打が八相毀破の名とする處ゝ打太刀が上段より先ふ打込んとする其間ニ髪を入まさせにして仕太刀が後の先ふて八相より發し破して勝を取る敬ま り距離は圖の如くなり

打太刀

八相　第十二圖

打太刀は左の足を引おくら木刀を打出に時
仕太刀ハ右の足を充分に踏込ま
ら木刀を打出に時ヤー
エーイ

打太刀ハ圖の如く上段より左の足を踏出し右の足を左の足の一所ふ踏止え是と踏違ひふ左り足を引まゝら木刀を打出に仕太刀ハ打太刀が左の足を踏出に共ふ左り右と充分ふ踏込おくら打太刀の頭上を目掛け木刀を打出せばかくの如く太刀先合ふ也

仕太刀

此一合の太刀打が八相毀破の名とする處ゝ打太刀が上段より先ふ打込んとする其間ニ髪を入まさせにして仕太刀が後の先ふて八相より發し破して勝を取る敬ま り距離は圖の如くなり

打太刀

八相　第十三圖

打太刀は圖の如く右の足を左の足へ引付おくら左りの半は木刀は鞘を離りたる代の處へ當て右の半は親指を掛一脇の指を

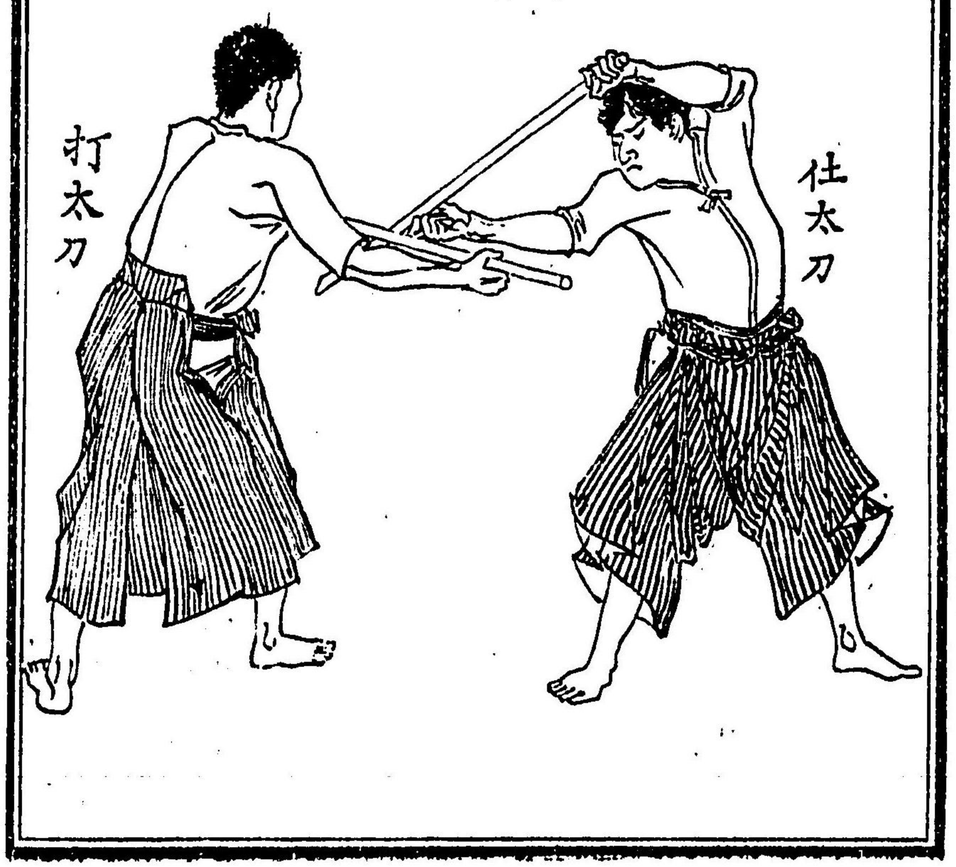
仕太刀

此一合の太刀打が八相毀破の名とする處ゝ打太刀が上段より先ふ打込んとする其間ニ髪を入まさせにして仕太刀が後の先ふて八相より發し破して勝を取る敬ま り距離は圖の如くなり

打太刀

八相 第十三圖

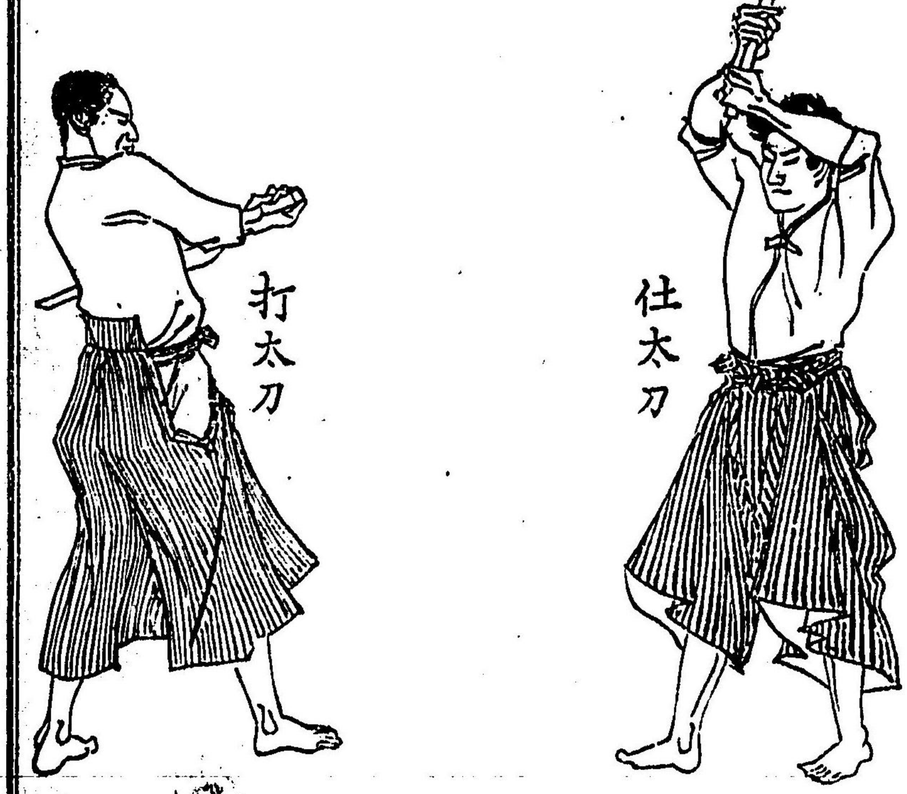
打太刀ハ右の足を踏込みおゞら仕太刀の右の足を横ゝ拂んとするを仕太刀は左り右と足を其侭少一つゝ跡へ引おゞら左りの手を頭上ゝ揚げ右の手を少一〜鞆の方へ滑一て圖の如く是を防く

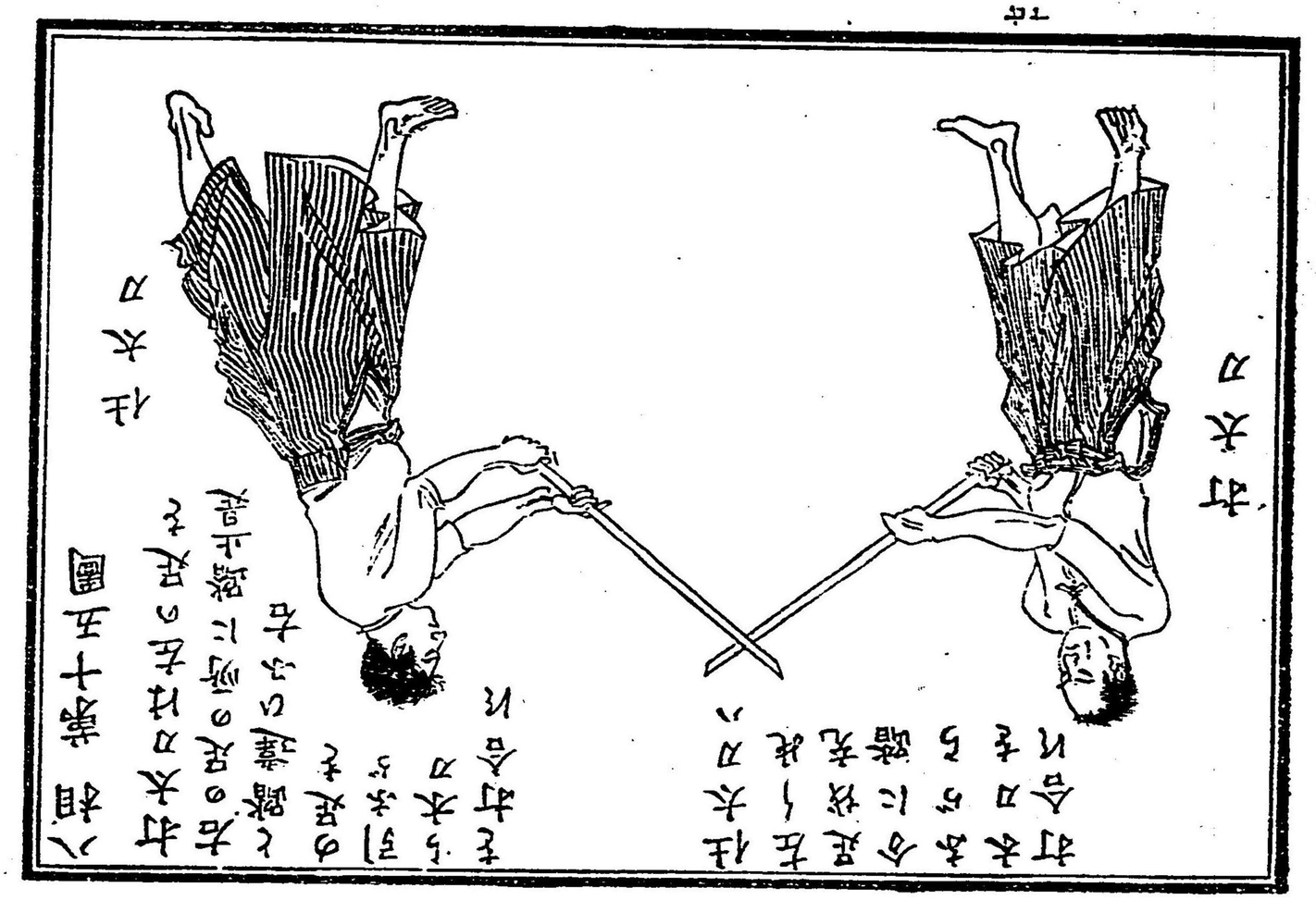


八相 第十四圖

打太刀左の足を後へ開き木刀を圖の如く逆斜ゝ開くおり

仕太刀は右の手を鞆迄滑一おから太刀を上段ゝ取るおり





八相第十五圖

打太刀は往太刀の右足の踵と踵違の所に踏止まり
そ打合に
往太刀は打太刀の左足の踵と踵違の所に踏止まり
そ打合に

八相第十六圖

往太刀

第十五圖の如く足は其
儘にて打合こゝ太刀を五
分上段に取こゝろ

打太刀

八相第十七圖

打太刀八左り足の爪先踏違ひ踏張り仕太刀の足の爪先を引付け木刀を上段に取る

仕太刀

打太刀

八相第十七圖

打太刀八左り足を八文字に左右と廣く踏張り圖の如く両肩を體に附け右の腕の上に木刀を握りたる拳を置き是を臍の高さに構へ一切先を仕太刀の膝の高さに出す

仕太刀八斜に左り一足踏込み是に右足を引付け木刀を上段に取る

打太刀

仕太刀

八相 第十九圖

打太刀ハ仕太刀が姿勢整ひ氣合満ちたるを見ヤエーヒと声掛け太刀を打たせて手内のたゝーあーを試みるなり。此太刀を諸腕を打とゝふ仕太刀は打太刀掛け聲と共ふ己れヤエーヒと掛聲志ふがら右の膝を高く揚げ是を右の腕の臺とゝふ打太刀の木刀の物打の所を充分ふ打さる處圖の如ー

但ー圖の如く諸腕を打とするは手の内の善あーを吟味するゝ因て手北内の不狂様右の足を上げ膝を臺ふーて打とするゝ昔ー尊き人の必錯の役ふどふ撰ま礼是を勤ゝ時首を打とる切先狂ひて其人の膝頸等へ切付ふど仕とる時は此上ル無き不調法故大事の場合ふ至りて六必ゞ斯ゝ為にゝーと教ーなり

八相 第十九圖

打太刀ハ左ノ足を右の足の後ふ引き右ノ手を伸ばし右ノ手の指を開き眼を見張る。

仕太刀ハ右ノ足を左ノ足の後ふ引き左ノ手を伸ばし左ノ手の指を開き眼を見張る。

仕太刀ハ打太刀の着眼を付ゝ後ふ仕ふ太刀を斜ふ打ふ入ゝ打太刀の着眼を付ゝ後ふ仕ふ太刀を斜ふ打ふ入ゝ

仕太刀ハ右ノ手を伸ばし左ノ足を右の足の後ふ引き左ノ手を伸ばし左ノ足を右の足の後ふ引き

打太刀ハ右ノ手を伸ばし左ノ足を右の足の後ふ引き左ノ手を伸ばし左ノ足を右の足の後ふ引き

仕太刀ハ右ノ手を伸ばし左ノ足を右の足の後ふ引き左ノ手を伸ばし左ノ足を右の足の後ふ引き

八相　第廿一圖

打太刀も仕太刀も互ひ
相精眼の太刀を圖の如
く下ひ卸し左右へ丸く
開く是ひて全く一圓相
の形をふにをり

七圖如く左り手を放
し木刀の刃ざきと思
ふ處へ添て頭上ひ高く
上げくる處ハ陽氣ひし
て盛んひ清めらるのふる
輕き物ハ昇りて天とふ
り濁りて重き物ハ下りて
地とふる處是則大極開
け始て陰陽両儀を生ず
たる處夫とり木刀を真
向へかぶるハ日出たる形
ち

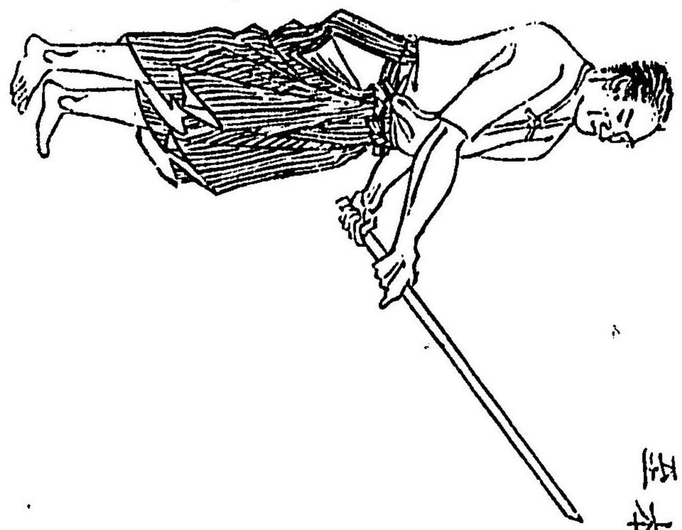
九尺余

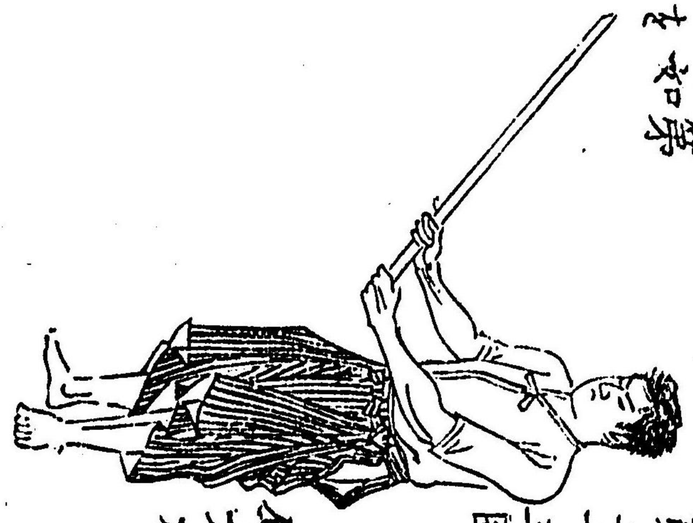
八相　第廿二圖

仕太刀

打太刀も仕太刀も左右へ開きたる手を下へ卸し打太刀八仕太刀を元の位地迫押し返し已も元の位地ゟ直る手八圖の如し

打太刀





八相　第廿三圖

六相圖方ハ構を初め第四圖第廿一構を本とす

仕太刀

三本目
一刀両断第一圖

打太刀精眼ふ付こる
太刀の左り手を放
し親指と人さしゆび
を伸し跡三指を開
ど是を木刀のまぐき

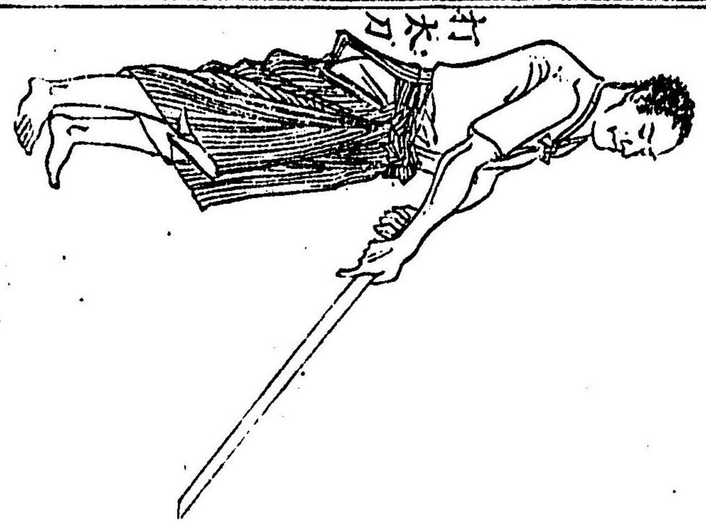
とおるふ所へ添へ圖
の如く両手を頭上へ
高く揚げ左右へ大き
く丸く開く也仕太刀
ふ同時ふ是ふ習ふ
双方圖の如し

一刀 第二圖

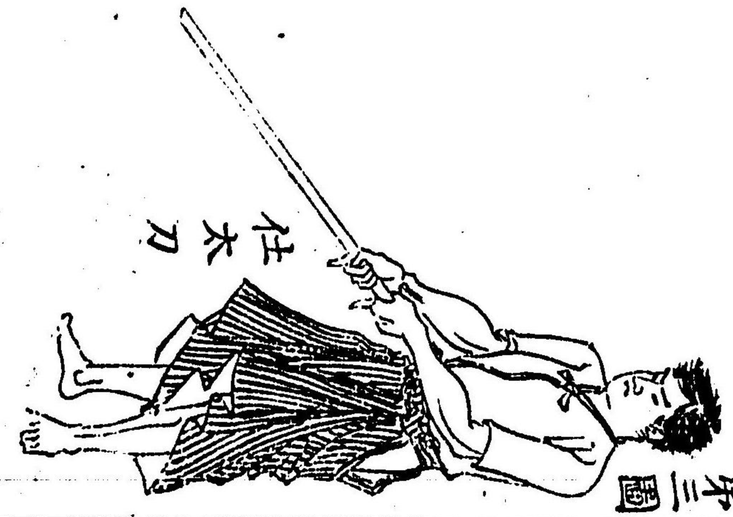
打太刀丸く開きたる太刀を上段ふ取る仕太刀ゝ是ふ習ふ

打太刀足を左ゝ右と踏出ー揃へる仕太刀ゝ是ふ習ふ

距離九九尺



打太刀足ふ下ノ方上段ふ打ち切り仕太刀の如くふ



一刀 第三圖

一刀 第四圖

打太刀も仕太刀も打卸したる太刀を又上段小取るやいなや仕太刀より先々の先といふて足を左り右と踏込ゝ揃へて木刀を打出ゝ此時打太刀ハ左りの一足を踏出一直是を右の足へ引付ちがら木刀を第五圖の如く打合ゝ也

一刀 第五圖

此一合ハ第三本目の太刀

右ハ此外ハ教ゆる所の唯一刀の業也

一刀 第六図

打太刀が左の足を引かんとする刀を圖の如く右の上段に取かぶりて左の方に引き込みたる刀を踏込み左の足を踏出し打込まんとする刀を圖の如く右の足を踏込みかぶり霞みとる刀を返して（ヤエーイ）と声掛け打太刀の面へ打込めば圖の如くに至る

打太刀

仕太刀

一刀 第七図

打太刀は仕太刀が霞みとる面の明きを打たんと右の足を左りの足の所迄踏出し是と踏違ひ左の足を引かんとする刀を（ヤエーイ）と声掛け太刀を打合れ仕太刀は打太刀が右の足を踏出し打込まんとする刀を返して面を後の先ゐて右の足を踏込みかぶり霞みとる太刀を返して（ヤエーイ）と声掛け打太刀の面へ

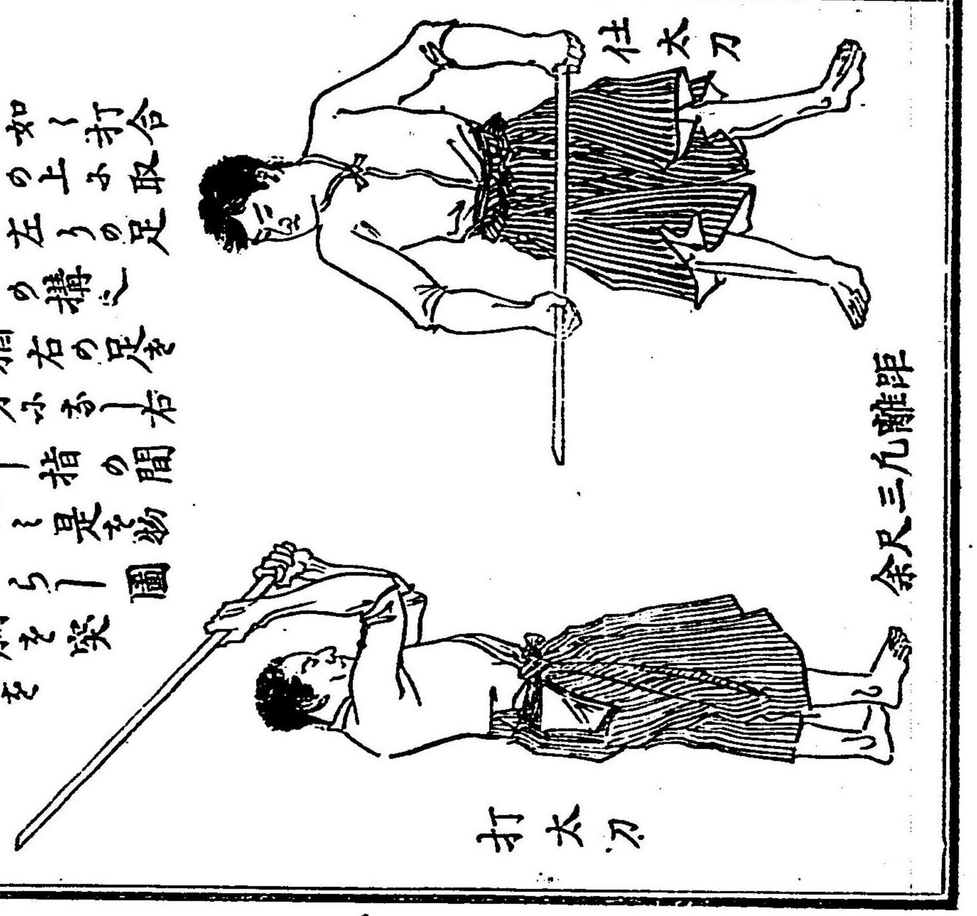
打太刀

仕太刀

距離凡四尺余

一刀第八圖

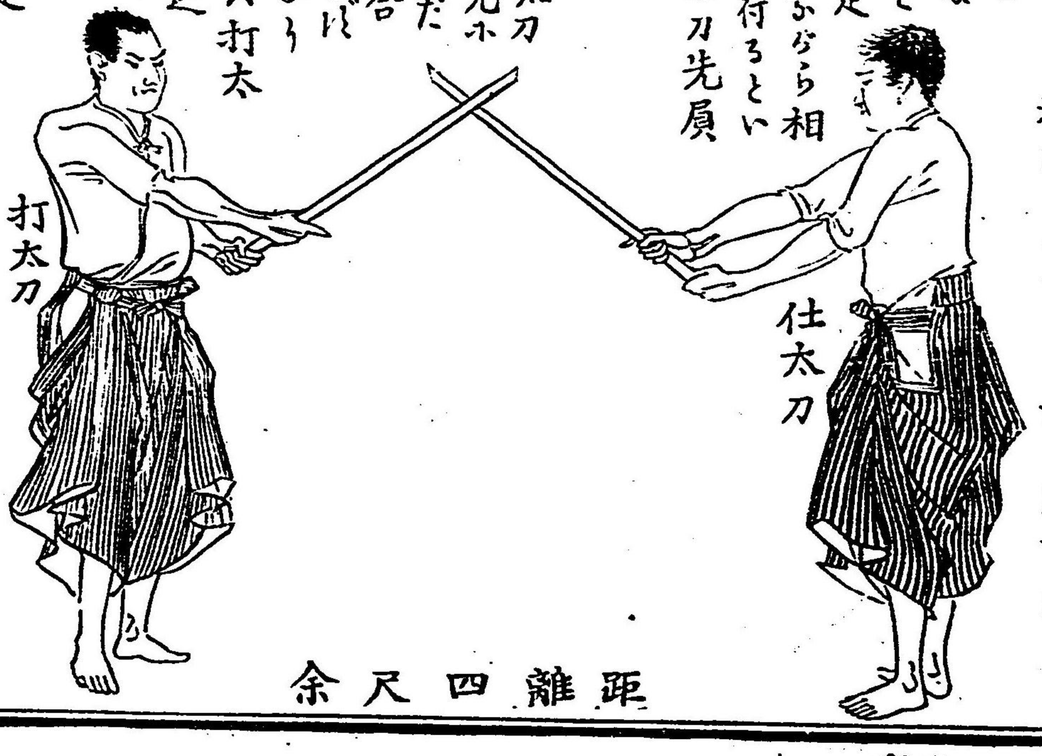
打太刀は七圖の如く打合たる木刀を右肩の上ゟ取おろし右の足を左りの足より引付る則八相の構ニ仕太刀は同時ゟ猶右の足を踏込ミ體を半身ゟ右手の親指と人さ一指の間ゟ木刀の峯を挾ミ是を物打あたり迄おろし一圖の如く打太刀の胴を突りんとせる姿勢をなれ也



一刀第九圖　打太刀八相ゟ取りたる木刀を仕太刀の精眼ゟ付おゞら右の足を少一踏込む

仕太刀は右の足を左りへ足ゟ引付おゞら相精眼ゟ付るといへども太刀先屓る也

此時打太刀ゞ太刀先ゟ勝を得たきゞ氣合をちづさゞ押入るおり仕太刀ハ打太刀ゟ付込まるゝゟ従ひ右左り右と三足引ふゞら氣合を取り直一太刀先を真の精眼ゟ取り直す也



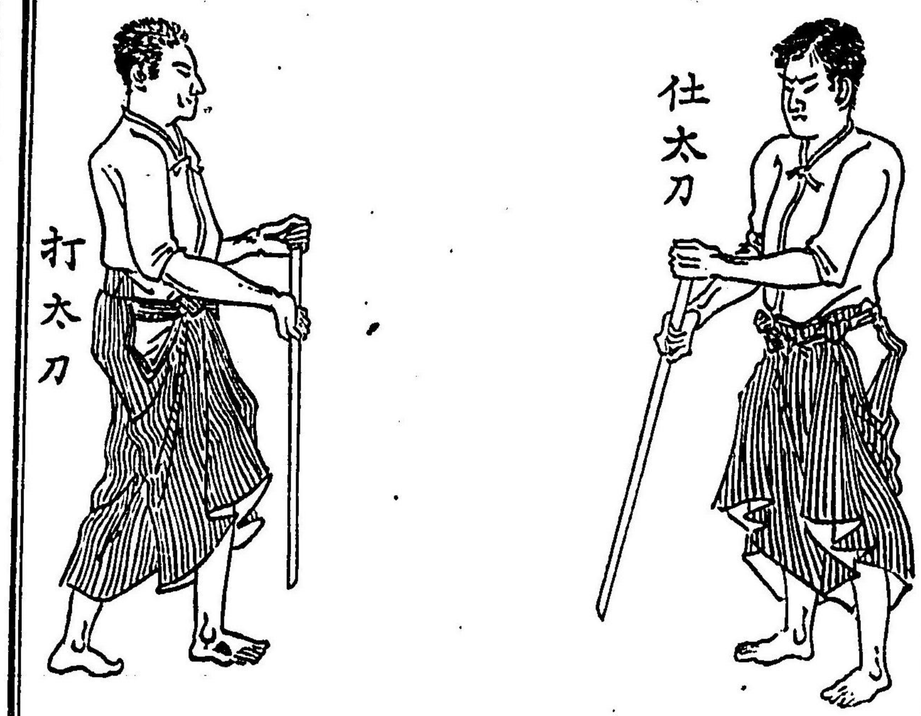
一刀 第十圖

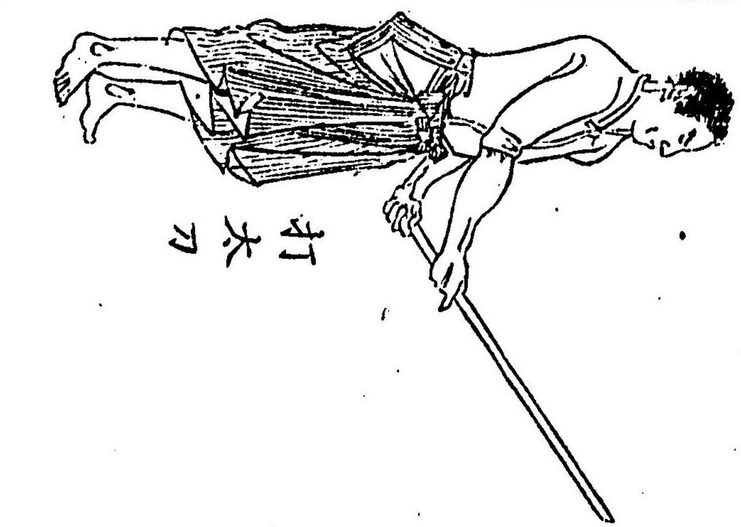
打太刀も仕太刀も
互ひ相精眼の太刀
を下へ卸し圖の如く

左右へ丸く開く是ひて全く一圓相の形をあらはす也
圖の如くあり

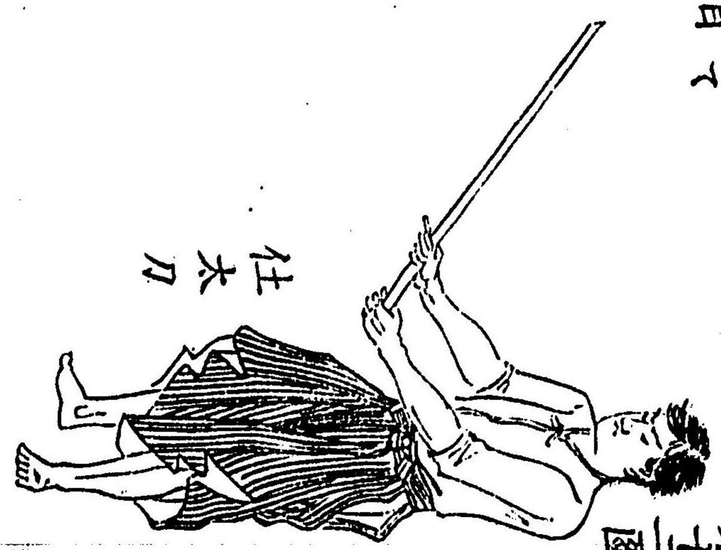
一刀 第十一圖

打太刀も仕太刀も左右へ開きとる手を圖の如く下へ卸し打太刀は仕太刀を元の位地迫押し返し己も又元の位地ゑ直る圖の如くの姿ゑゑり





3目第三終形ゑ本ゑる
足ゑ本ゑ目て



一刀第十二圖

三本目
右轉左轉第一圖

打太刀精眼ニ付たる
太刀の左り手を放し
親指と人さしゆひを
伸し跡三指を閉ど
是を木刀の双ぎと

なぎふ所へ添へ圖の如
く両手を頭上へ高
く揚げ左右へ大
きく丸く開く也
仕太刀も同時ふ
是ふ習ふ

右轉第三圖
仕太刀
打太刀
打太刀ハ頭上ヲ拂ひ少し前へ出し太刀ヲ横上ヲ水平に仕太刀の同時ニ是ヲ後ニ此時打太刀ハ仕太刀の足ヲ左より右と前へ文字ヲ踏出し
仕太刀ハかざしたる太刀を己が右股へ卸す是を斜の構とす
打太刀

右轉 第四圖

仕太刀精眼の
太刀を斜ふ直す

打太刀斜の太刀を
上段ゑ取る

右轉 第五圖

仕太刀

右轉第六圖

五圖の如く（ヤエー）と聲掛けふうら太刀を打合ひと同時ふ打太刀も仕太刀も左の手を後へ引ふのうら右手の親指と人さ一指の間ふ木刀の峯を挾〻是を物打の處迫滑一猶右の足を少一〻踏込〻（ヤー）と聲掛け體を半身ふ構へ互ふ體當りをふさんとする姿勢ふ至る

右轉第七圖

六圖の姿勢ふうり打太刀も仕太刀も右の足を左の足の後へ引ふうら木刀を上段ふ取るふり

右轉第八圖

仕太刀ハ打太刀ニ打ヒ上段ヲ打出ス所ヲ右ノ足ヲ踏込ミ打太刀ノ面上ヲ掛ケ上段ヲ打出ス也

打太刀ハ足ヲ左ノ足ノ踏止ル足ヲ左ノ足ノ後ヘ引ヒテ上段ヲ打出ス

右轉第九圖

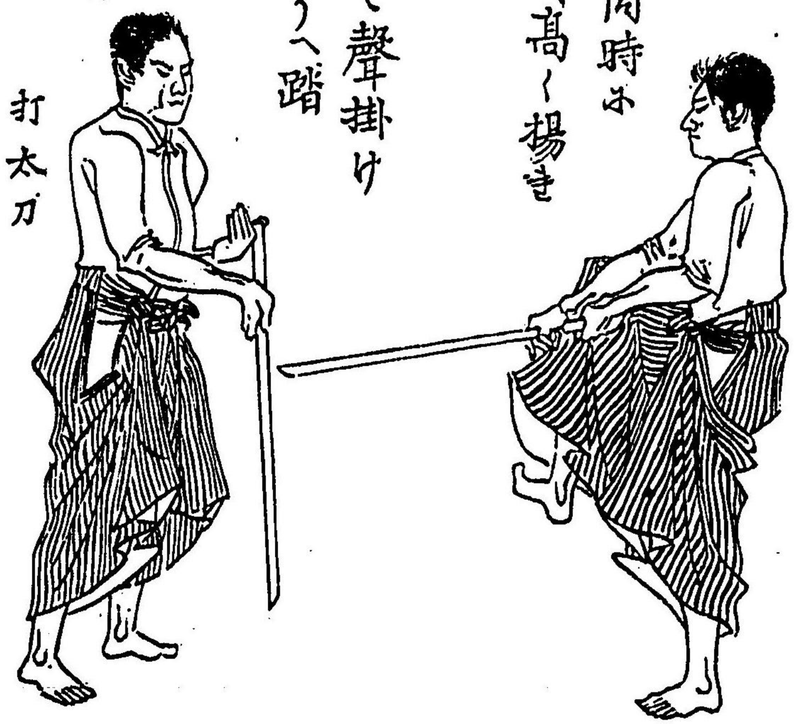
仕太刀ハ斜ヲ左ヘ一足踏込ミ是ヲ右足ヲ引付ケ木刀ヲ上段ヲ取る

打太刀ハ左ヘ足ヲハ文字ヲ左ヘ右ヘ廣く踏張リ圖の如くヲ木刀を取る

右轉第十圖

仕太刀ハ（ヤエーヒ）と聲掛け上段より諸腕を打おろし右足を斜ゐ左りへ踏込むと同時ゐ（ヤツ）と聲掛け木刀を左りへ高く揚きば第十圖の姿勢ゐ至る

打太刀ハ諸腕を（ヤエーヒ）と聲掛け打せおぐら右足を斜ゐ左りへ踏込むと同時ゐ（ヤツ）と聲掛け木刀を左りへ寄せて高く揚きバ第十圖の姿勢ゐ至る



右轉第十一圖

仕太刀ハ打太刀ゐ打出さんとする所を後の先ゐ左りの足を踏込み打太刀の面上を目掛け（ヤエーヒと聲掛け木刀を打出せは第十二圖の姿勢ゐ至る

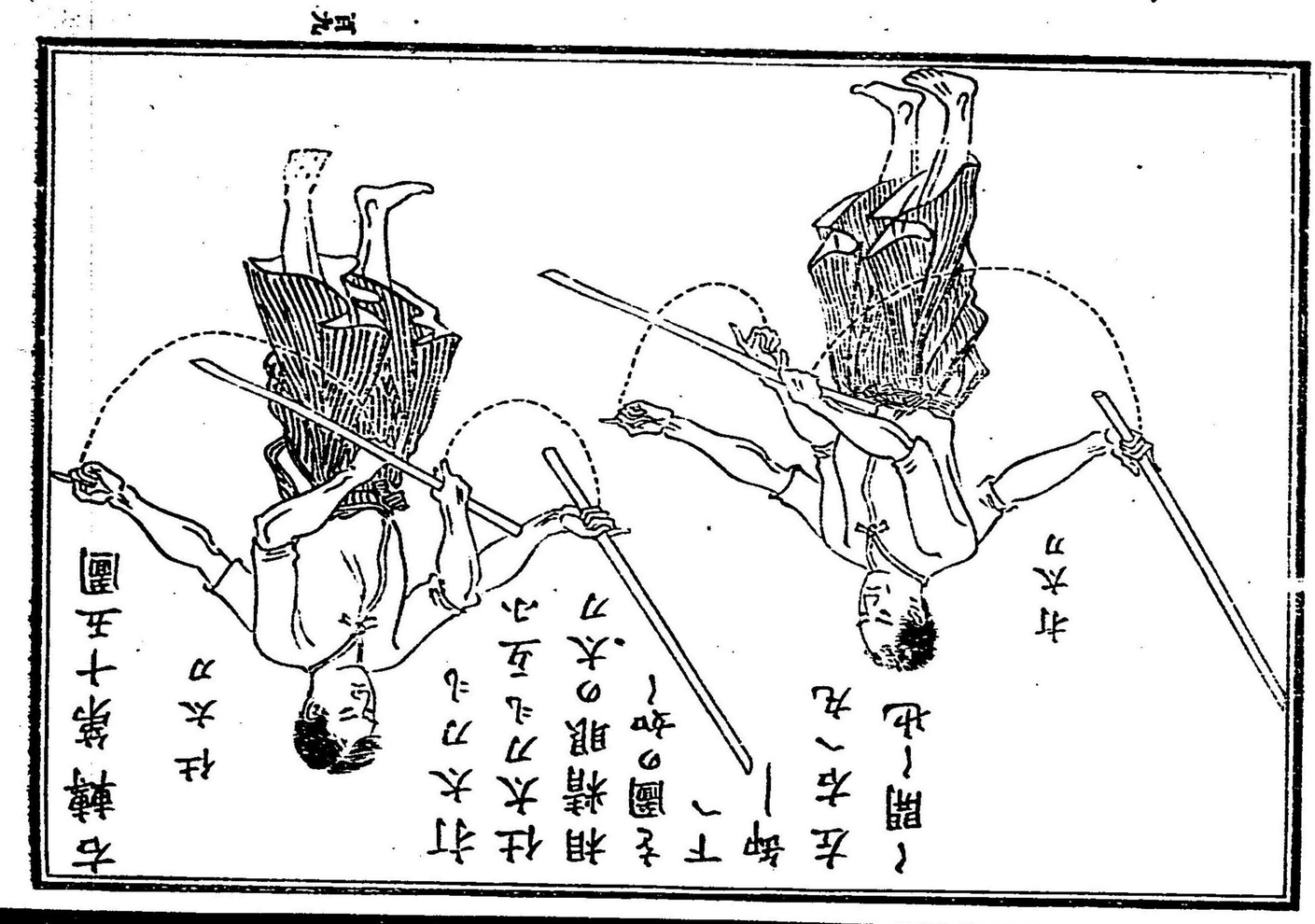
打太刀ハ左の足を右の足の所ゐ踏込ゑ仕太刀の面上を打んとするを仕太刀ハ後の先ゐて打込み来る故右の足を後へ引左の足を是ゐ引付おぐら（ヤエーヒ）と聲掛け木刀を打合せる

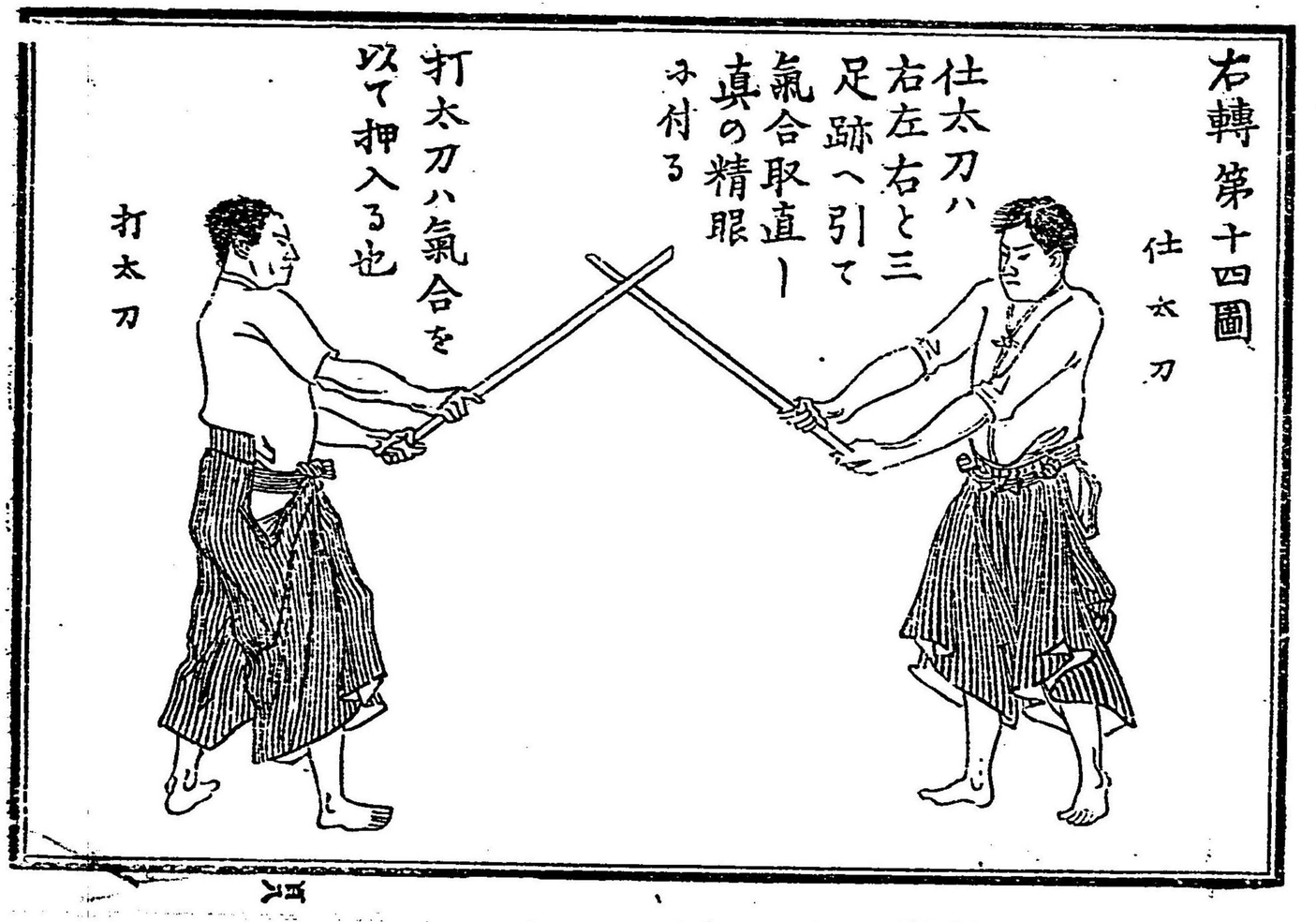
右轉第十三圖

仕太刀ハ打太刀の木刀を打出さんとする処を後の先ふ右の足を踏込ゝ打太刀が面上を目掛けて（ヤエーヒ）聲掛け木刀を打出を也

打太刀ハ右の足を左りの足の處ふ踏止ゝ左の足を後へ引是ふ右の足を引付ふゝゝ（ヤエーヒ）と聲掛け木刀を打出さゝ

圖十三第轉右


打太刀
仕太刀
左右へ丸
開く地
左轉第十五圖
仕太刀
打太刀
相精眼の如く
仕太刀ハ互ニ
下ヘ圖の如く

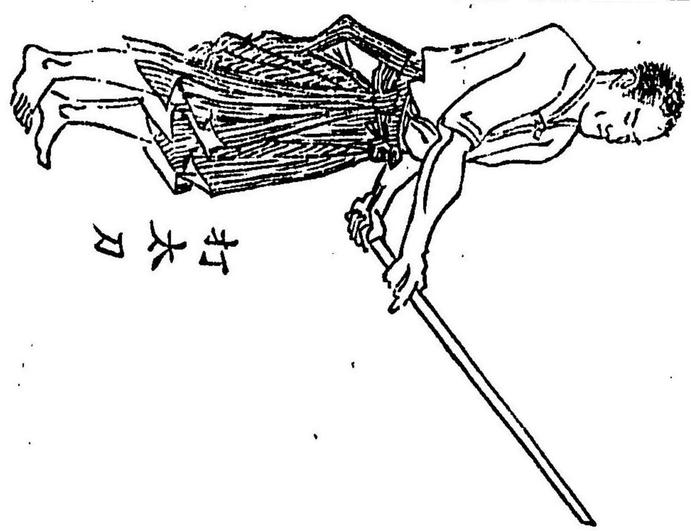

右轉第十四圖
仕太刀
仕太刀ハ
右左右と三
足跡へ引て
氣合取直し
真の精眼
ヲ付る
打太刀ハ氣合を
以て押入る也
打太刀

右轉第十六圖

仕太刀

打太刀

打太刀も仕太刀も左右へ開きたる手を圖の如く下へ卸し打太刀は仕太刀を元の位地迫押し返し已も元の位地ゝ直る



是日本三日本殺日本殺也

右轉第十六圖

四本目
長矩一味第一圖

打太刀精眼ハ付
だる木刀の左り手
を放し親指と人差
指を伸し跡三指を

仕太刀

合場

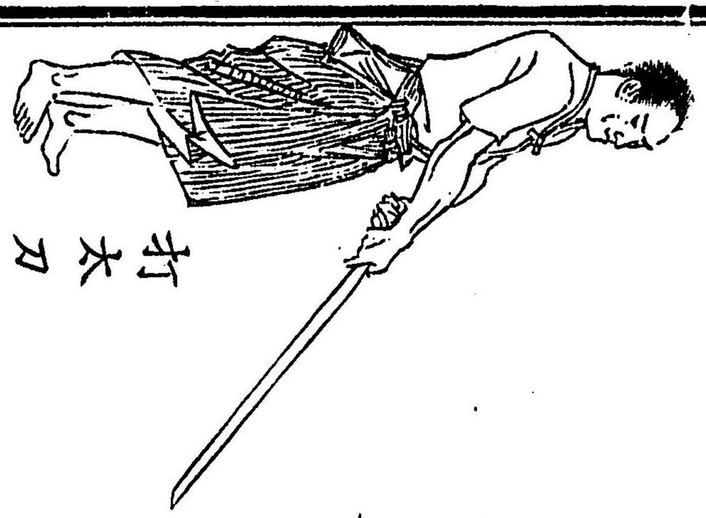
閉じ是を木刀の刃
ぢきしおもふ処へ
添へ圖の如し両手を
頭上へ高く揚げ開
くなり仕太刀も同時
ハ是ハ習ふ

打太刀

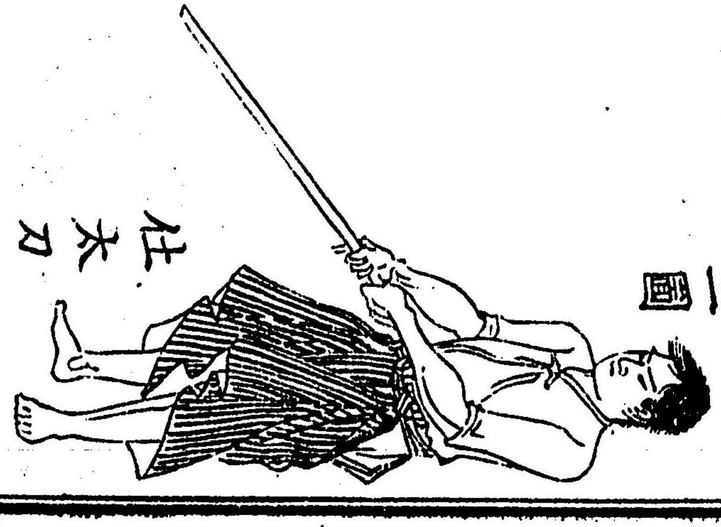
二間

長矩第二圖

打太刀も仕太刀も左右へ九く開きたるまゝ刀を上段ゝ取りおつゝ足を前へ左り右り踏出し一撃る也

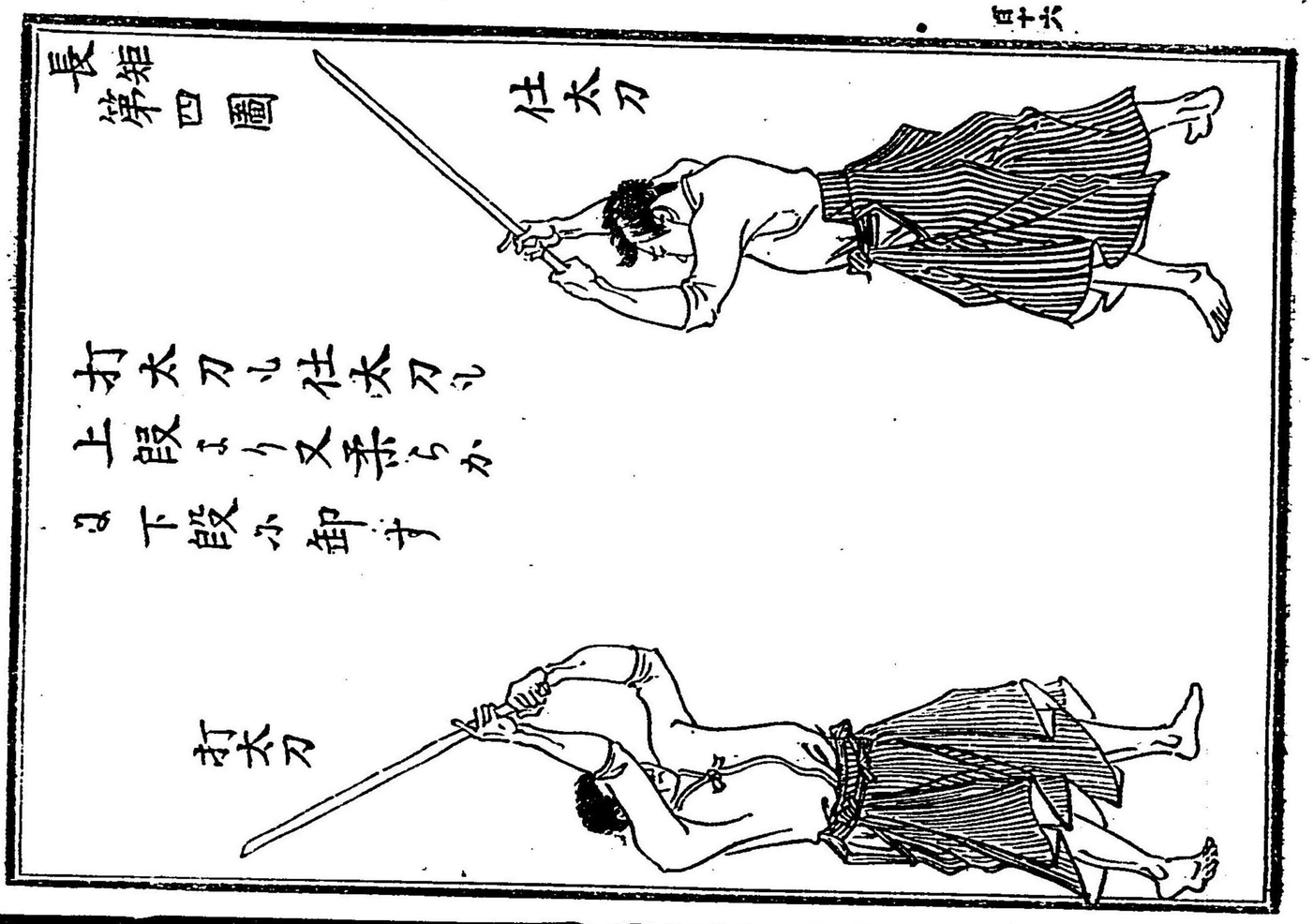


打太刀は仕太刀の下段ゝ切掛るを一度手元ゝ上段ゝ取る也



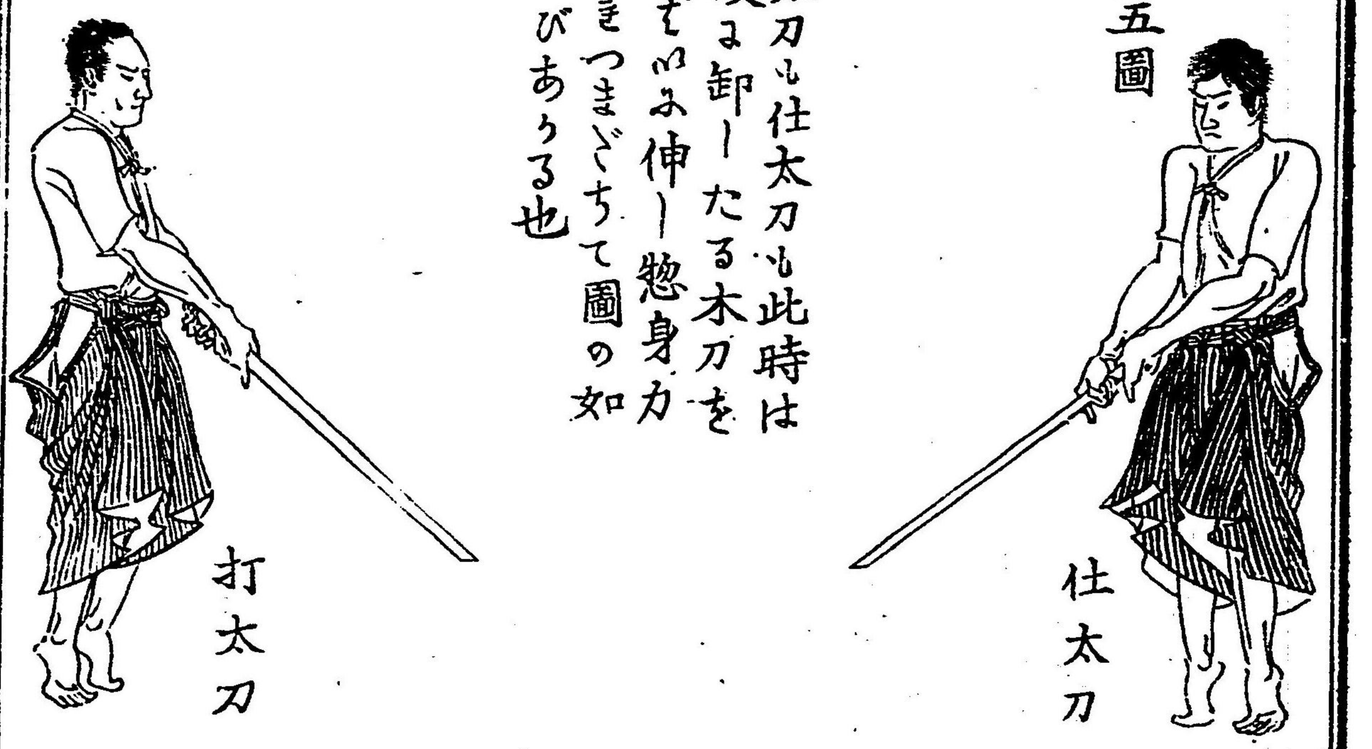
長矩第三圖

長矩第四圖



打太刀も仕太刀も上段より又来らか
ゴ下段ゴ卸す

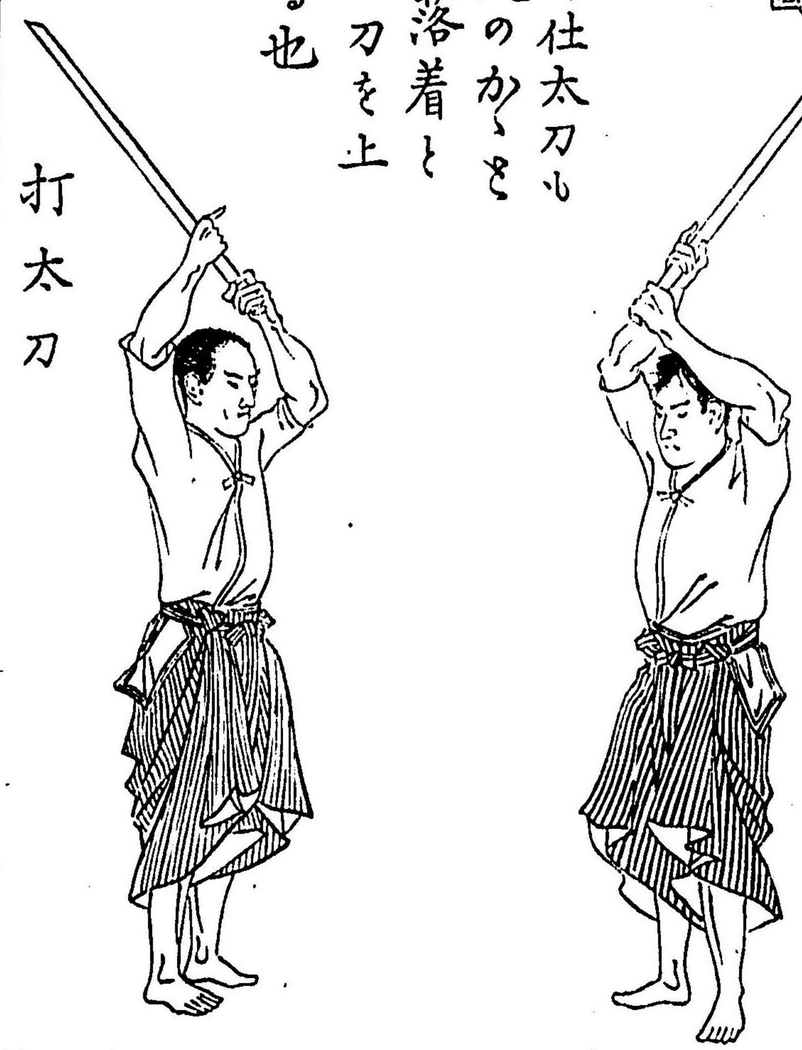
長矩第五圖



打太刀も仕太刀も此時は
下段ゴ卸ーたる木刀を
ゴつぴゴゴ伸ー惣身力
を入きつまぎちて圖の如
く伸びあうる也

長矩
第六圖

打太刀も仕太刀も
つま立足のかゝと
地ゝ落着と
同時ゝ木刀を上
段ゝ取る也



長矩第七圖

仕太刀ハ上段ゝ
一足左ゝ
右ゝ出
一ゝ
踏ゝ
右の
木刀
を目の
前ゝ
出す也

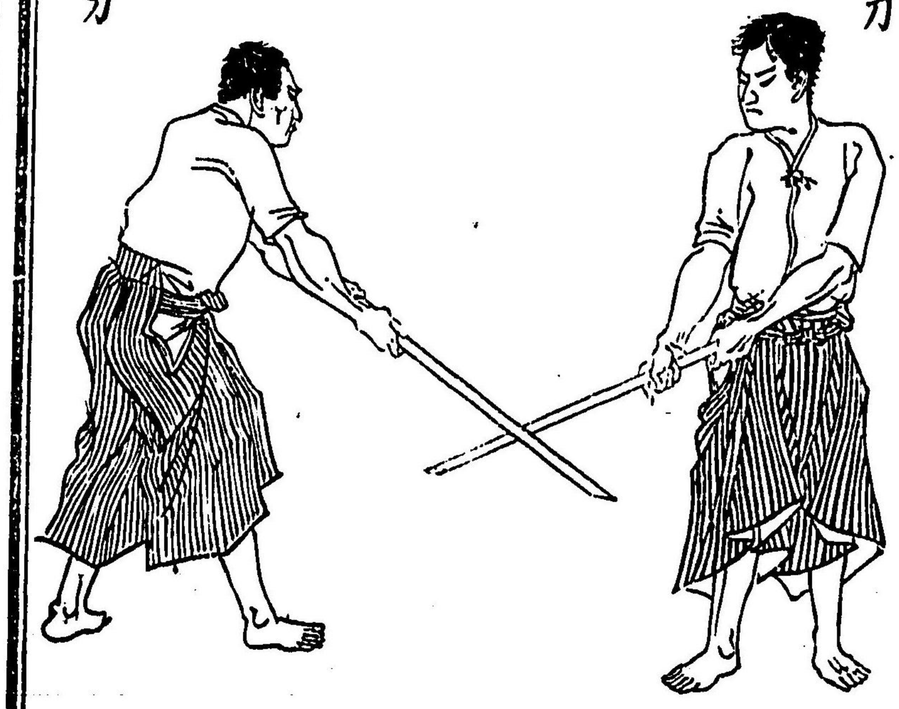
長矩第八圖

仕太刀は左り足を引半身ふなり木刀を圖の如く下げて是を止る

打太刀ハ右の足を踏込ミ仕太刀の左りの足を切る

仕太刀

打太刀



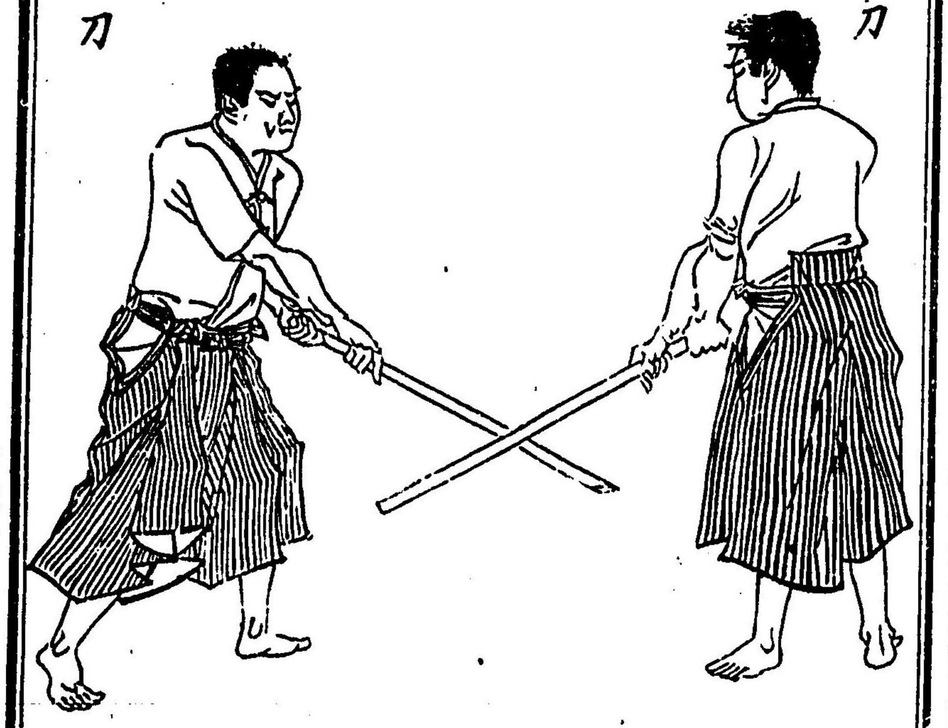
長矩第九圖

仕太刀は右の足を引ふこら木刀を少さく返し半身ふなりて是を止る

打太刀は木刀を大きく返し左の足を踏込ミて仕太刀の右の足を切る

仕太刀

打太刀



仕太刀

打太刀

打太刀ハ左の足を後へ引付太刀ハ是ハ左りの足の爪先を圖の如く構ふる也

仕太刀

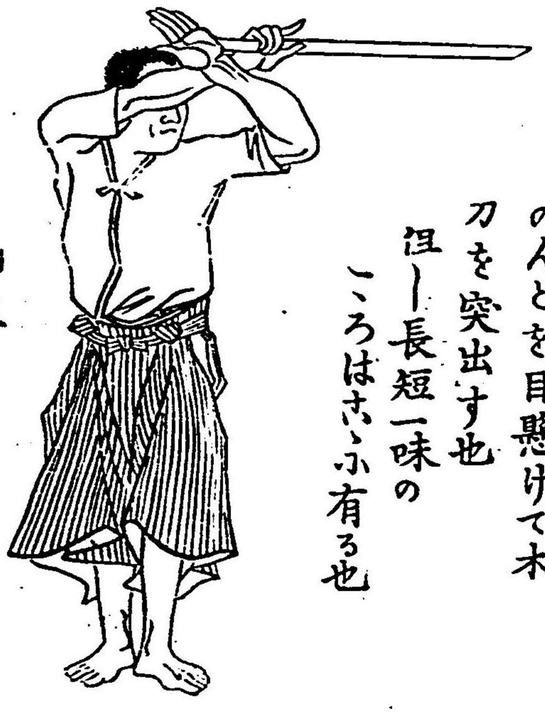
打太刀も仕太刀

小習ふ

仕太刀

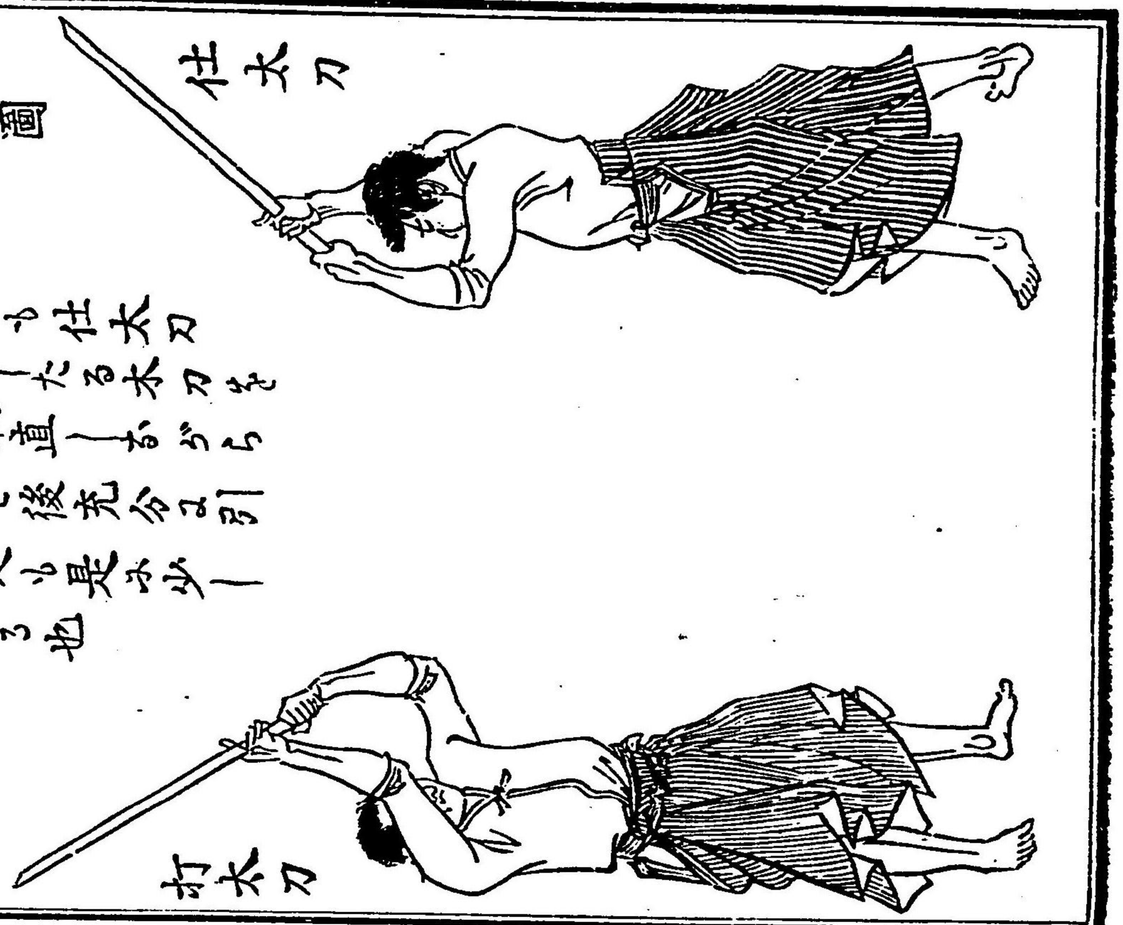
打太刀も此上身の儘左りの足を前へ充分ふ踏込み右の足り是ハ引付（ヤエヒ）と肩先より のんどを目懸けて木刀を突出す也

但し長短一味の こゝろはさふ有る也



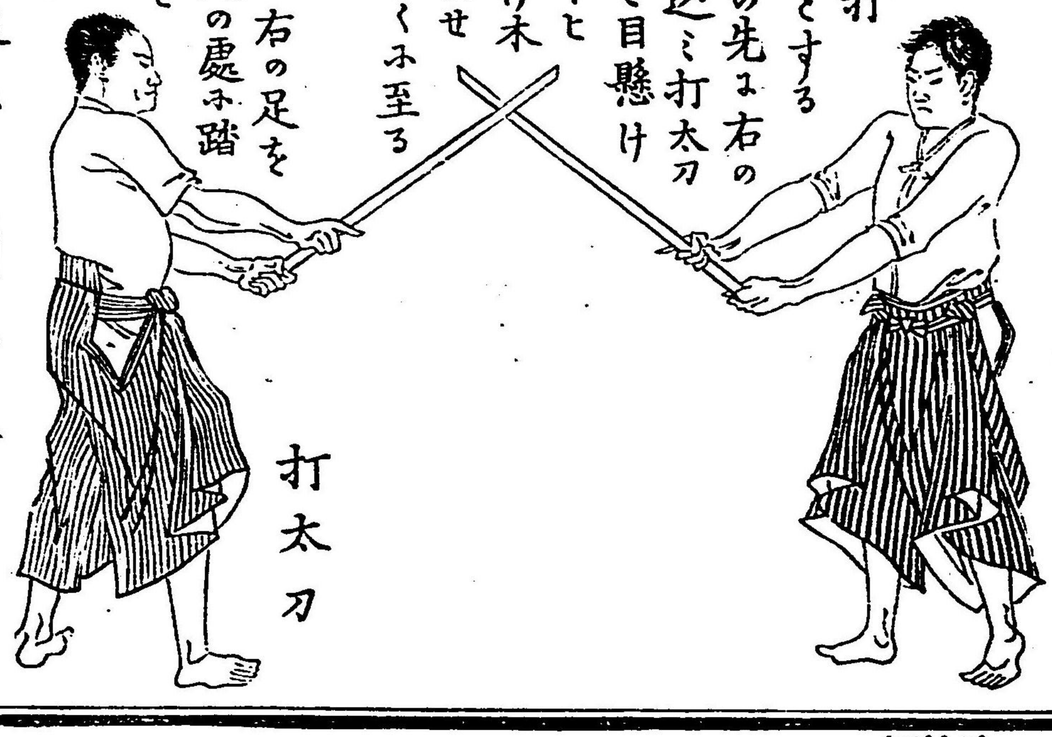
打太刀

長矩第十三圖



打太刀ハ仕太刀ハ
突出したる木刀を
上段に取直しながら
右の足を後充分に引
く左りの足も是に少し
引附る也

長矩第十三図



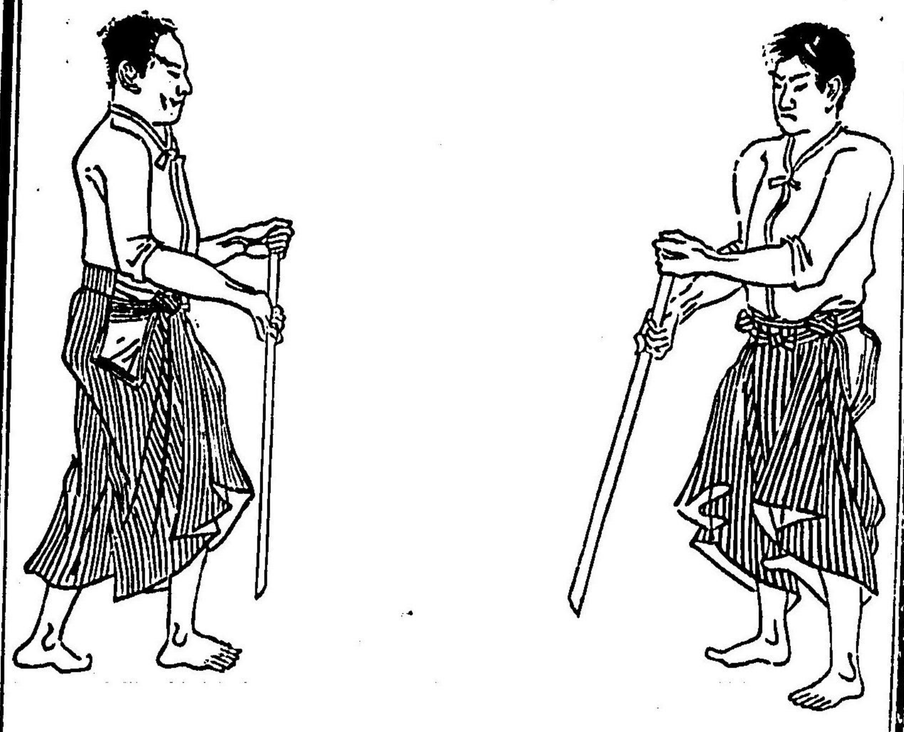
仕太刀ハ
打太刀
木刀を打
出さんとする
處を後の先に右の
足を踏込み打太刀
の面上を目懸け
てヤエエーヒ
と聲掛け木
刀を打出せ
は圖の如くに至る

打太刀ハ右の足を
左りの足の處に踏
止め是と
踏違ひに
左の足を
後へ引右の足も少〻〻引なぐら（ヤエーエヒ）
と聲掛け木刀を打出すなり

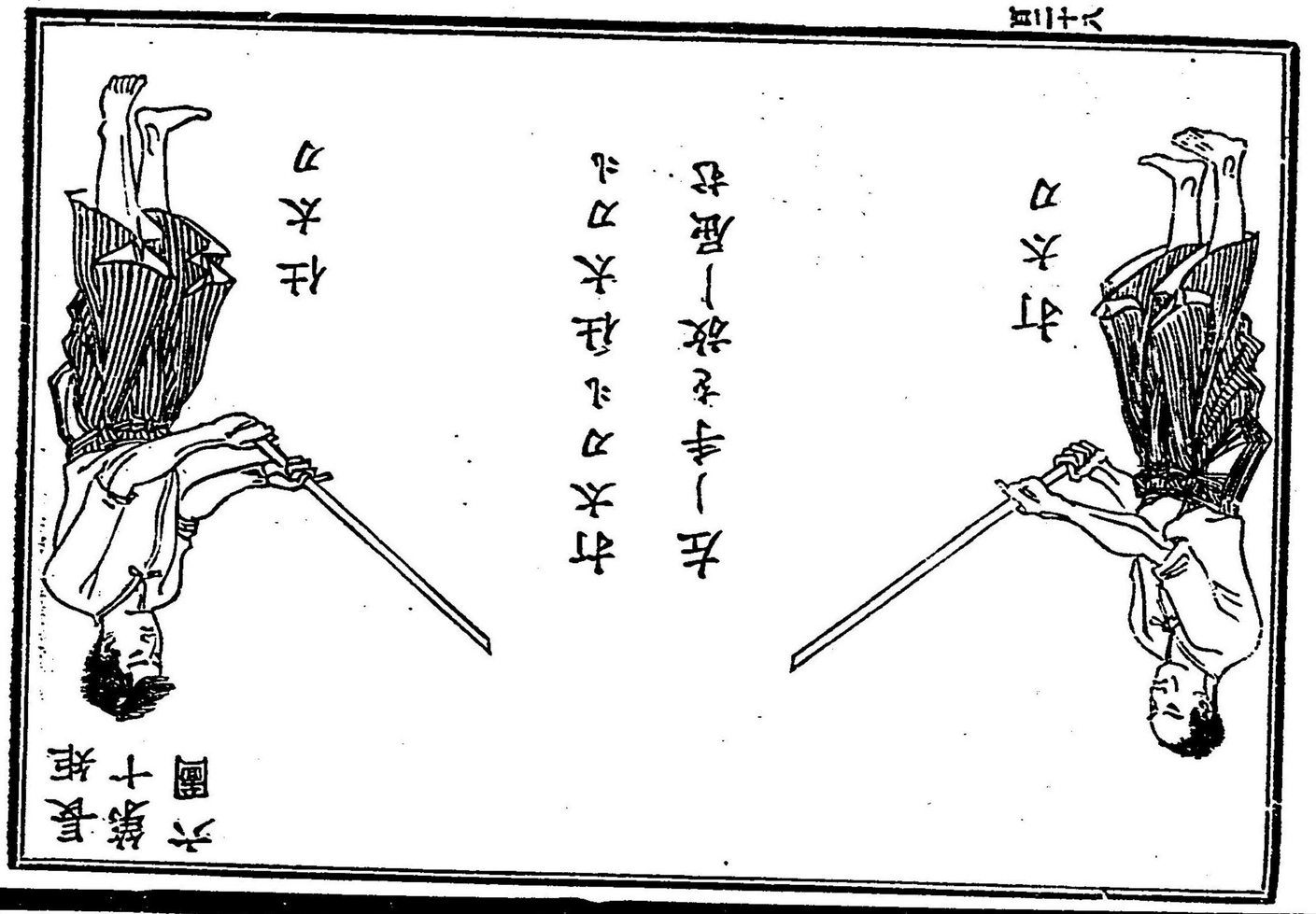
長矩第十四圖

仕太刀ハ互ニ相精
打太刀ハ其ノ太刀を
左右ノ丸ク
開ク也
眼の如ク下ノ卸ー

長矩第十五圖

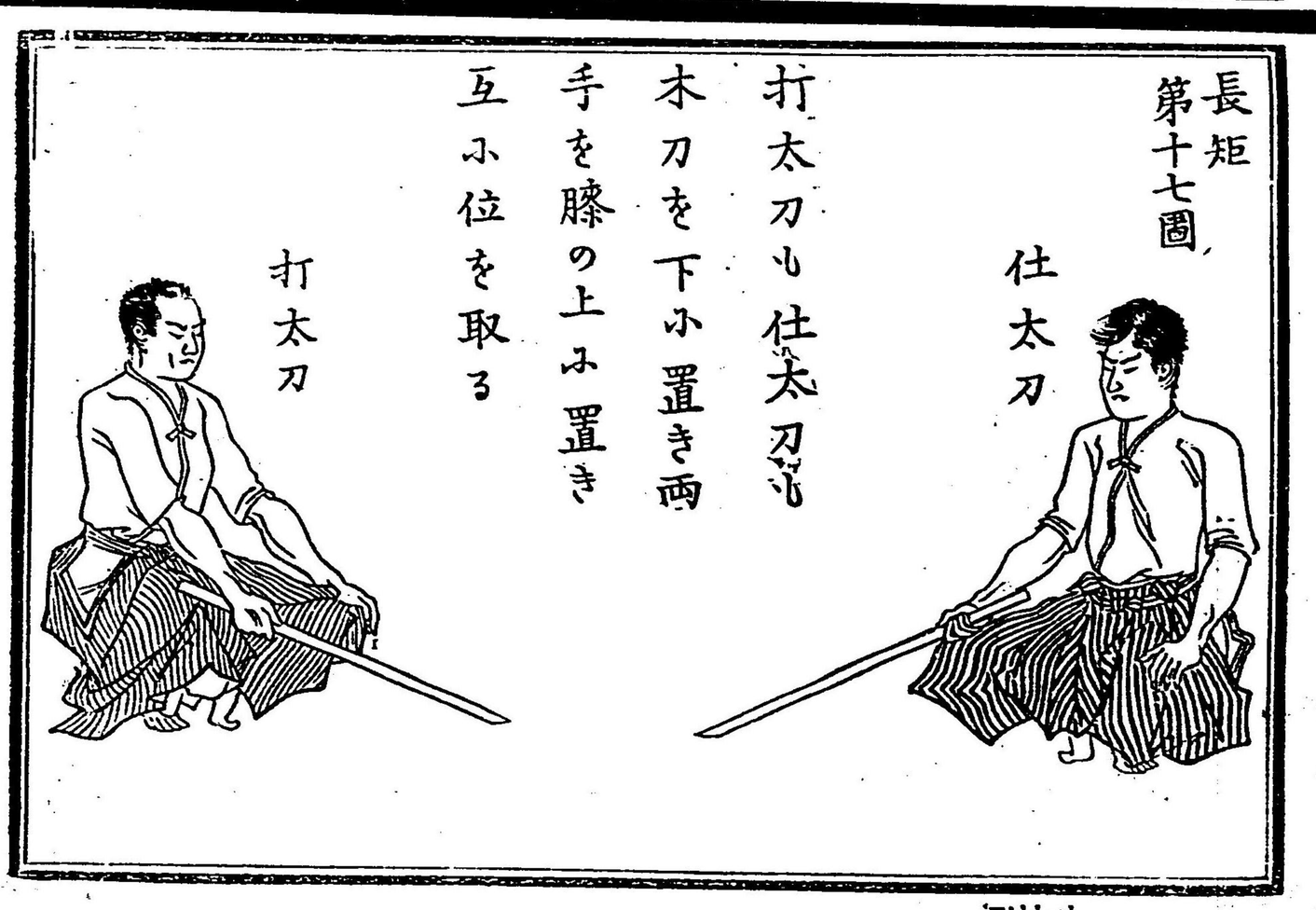


打太刀も仕太刀も
左右へ開きたる手を
圖の如く下へ卸し打太
刀ハ仕太刀を元の位地
迫押し返し己も元の
位地ゝ直る



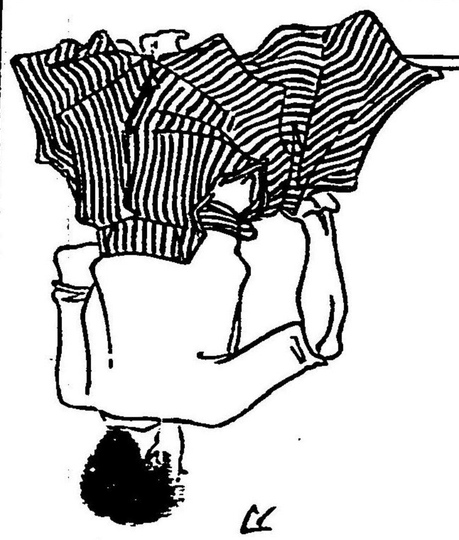
打太刀に仕太刀に
左一手を放し一足さ

長矩第十圖



打太刀も仕太刀も
木刀を下ふ置き両
手を膝の上ふ置き
互ふ位を取る

長矩
第十九圖

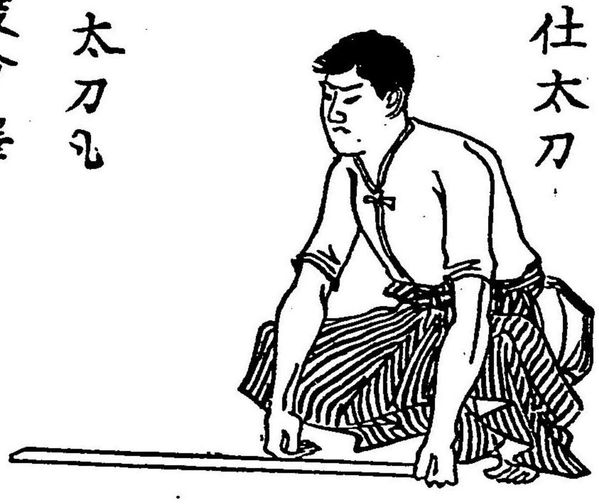


仕太刀

打太刀ハ仕太刀ハ圖の如く鳥渡會釋をなして第十九圖ぶ至る

打太刀

長矩
第十八圖



仕太刀

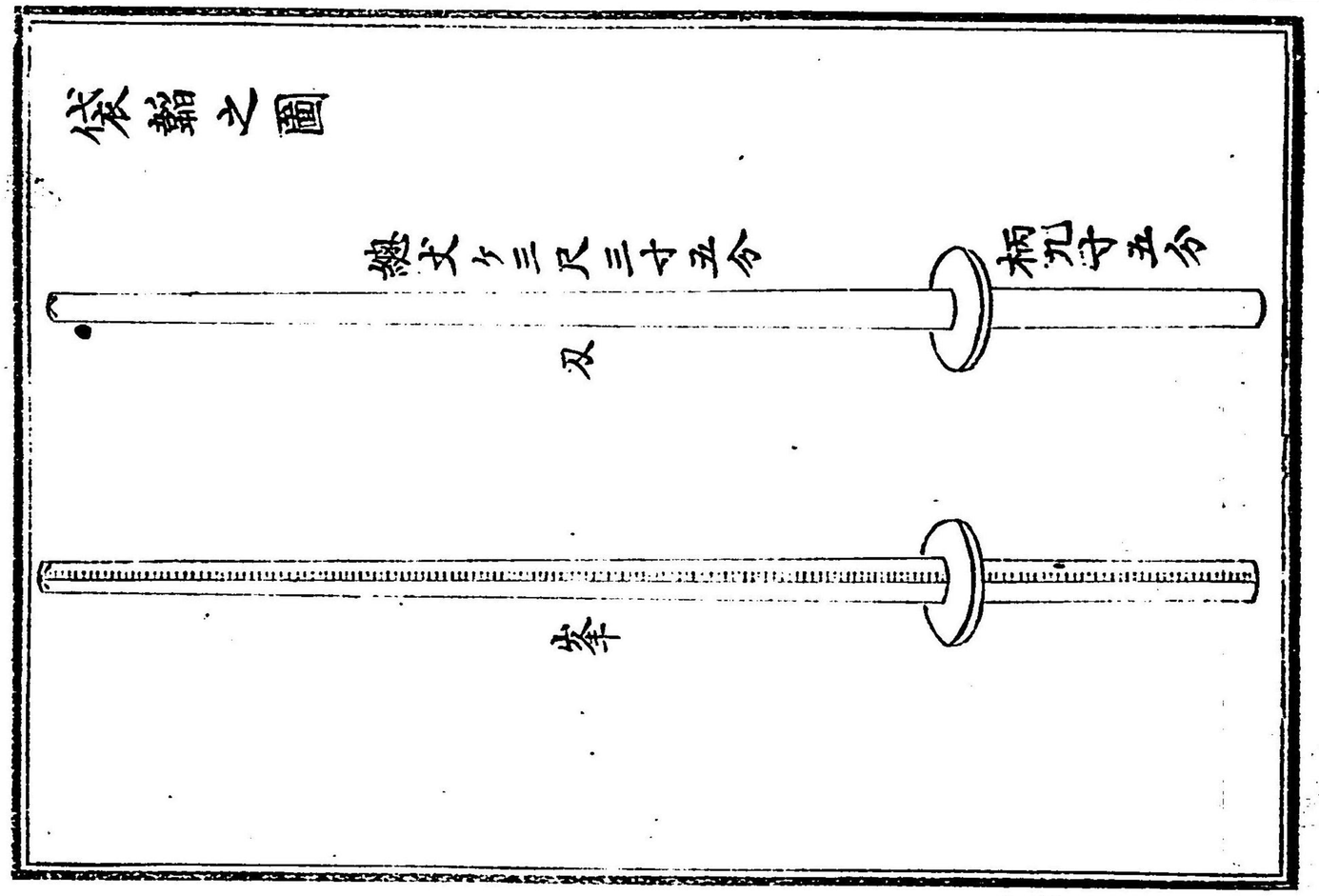
打太刀ハ圖の如く小柱太刀ハ右の方に向ひて取の方を取

小太刀

長巻

第二十圖

打太刀仕太刀
圖の如く左へ一禮を
爲して幾ら
も
屈み體を
かゞめ
ます



龍尾　仕太刀
左右
左ノ一本
第一圖

打太刀も仕太刀も鼬ふ向ひ右を

龍尾　仕太刀
左ノ一本
第二圖

打太刀も仕太刀も圖

向きて屈ミ袴の
もゝだちを取り
て第二圖ふ至る

打太刀

の如く屈ミて下ミ腹を
張りて位を取る也

打太刀

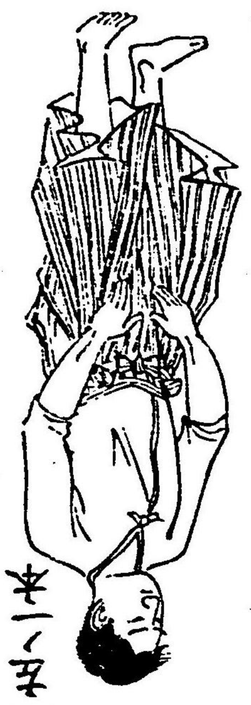
刀太打

仕太刀の同時ハ是ハ習ふ

打太刀の足と右左ハ後ヘ引揃ゆる

仕太刀の同時ハ是ハ習ふ

打太刀の圖の如ク、そらハと立ノ



仕太刀

圖三第　龍尾左ノ一本

龍尾・左ノ一本

第四圖

仕太刀

打太刀も仕太刀も左の足を

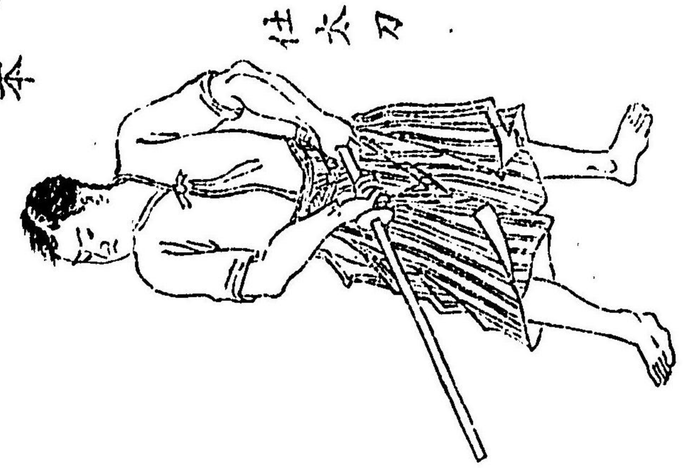
韜の柄頭の處へ踏込ミ左の足

を韜の横へ踏込ミ互ふ眼中

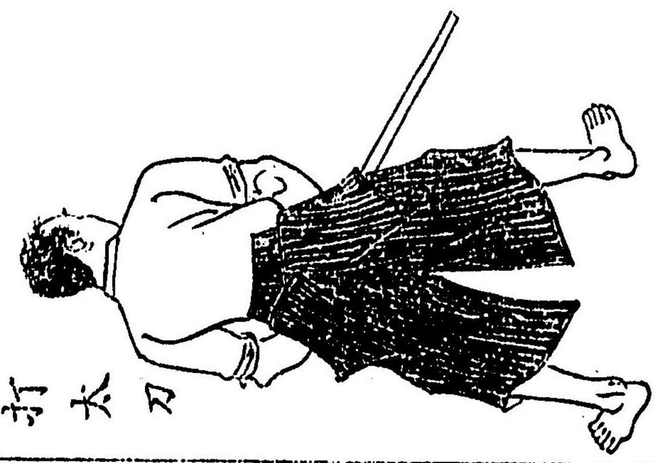
白眼ミ合ふ也

打太刀

龍尾左ノ一本第五圖

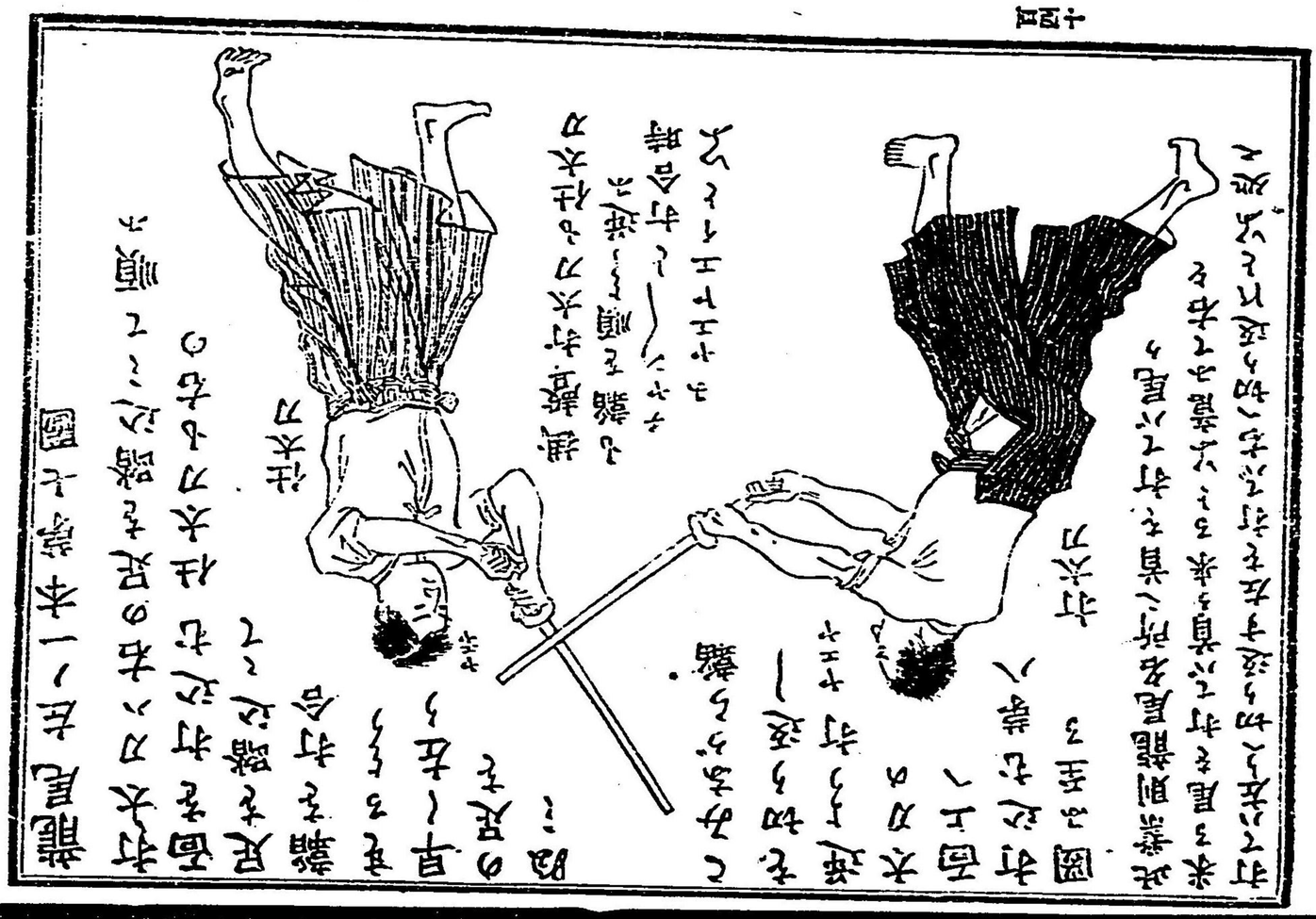


打太刀ハ仕太刀ハ右手ヲ袖ヲ取あげ圖の如く構へて居る也



龍尾左ノ一本第六圖

打太刀ハ仕太刀ハ左りの足を踏込ミ上段ヲ取る

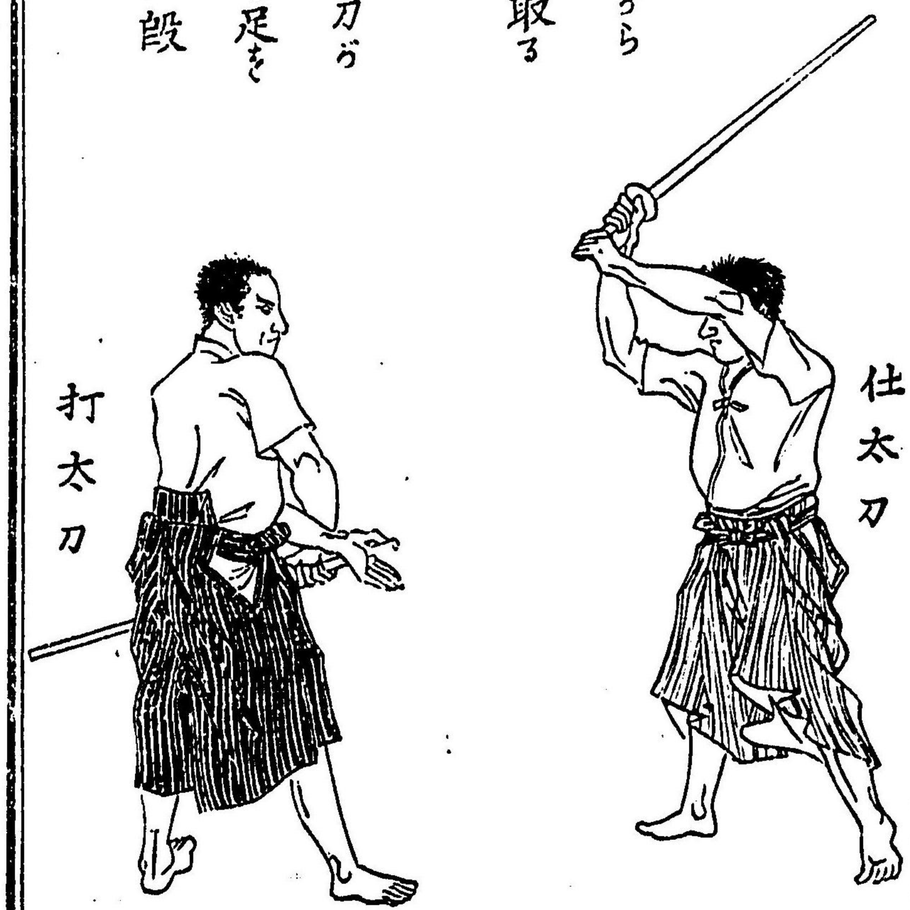

龍尾左ノ一本第七圖
打太刀ハ仕太刀の小太の足を踏込て面を打ち足を踏込て
鍔を打合
仕太刀
早く左り
の足を
脇に
こゝかゝり鍔
を切り返し
来るを右
の足を引ふぐ
ら是ハ
エイ
鍔を打ち
合す
仕太刀
鍔越打ちも仕太刀
ケヤツ〳〵と鍔こ
ち合時
ヨイトヤ
仕太刀

龍尾左ノ一本第八圖
打太刀ハ仕太刀の左りの足を踏込
ふぐら鍔を切り返し
仕太刀
来るを右
の足を引ふぐ
ら是ハ
エイ
エイ
鍔を打ち
合す
仕太刀
打太刀
刀ハ此一打ふて
後の先の勝を得る也

龍尾左ノ一本
第九圖

打太刀ハ左りの足を引ふぐら鞠を逆斜ふ取る也

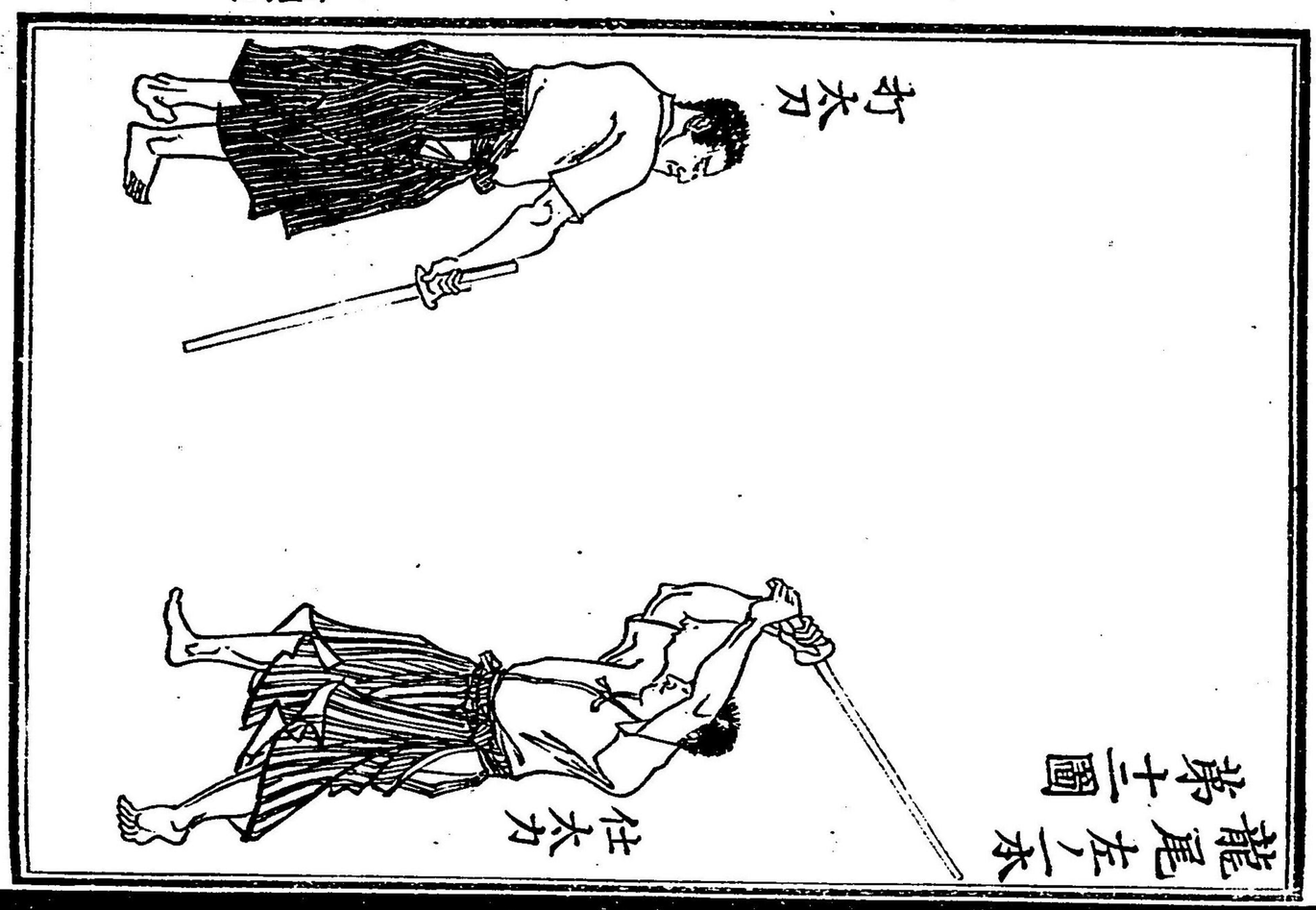
仕太刀ハ打太刀ゞ引ふ附込ミ右の足を踏込ミ鞠を上段ふ取る也



龍尾左ノ一本
第十圖

打太刀ハ左りの足を踏込ミふぐら仕太刀の右の足を拂ふ

仕太刀ハ打太刀ゞ拂ふ右の足を引ハ文字ふ蹈張る



龍尾左ノ一本 第十一圖

打太刀ハ仕太刀ガ左ノ甲手ヲ一下ヒ切リ上ゲル

仕太刀

仕太刀ハ打太刀ガ左ノ甲手ヲ切リ上ゲルヲ上段ヨリ切リ落シ左ノ足ヲ引ガラ又上段ヲ取リ第十二圖ノ姿勢ニ至ル

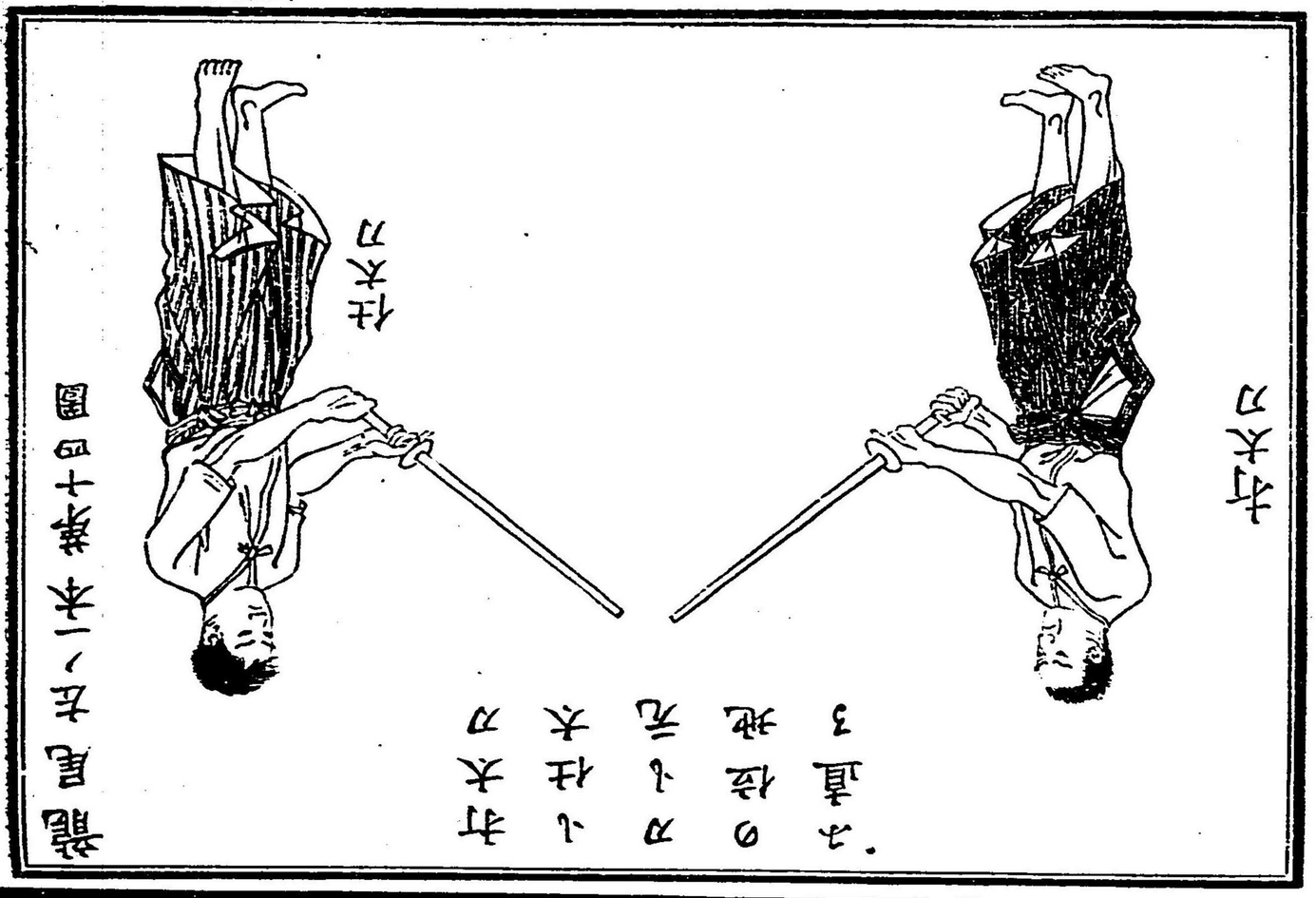
掛聲

打太刀ハ下ヒ甲手ヲ切ル時仕太刀ハ上段ヨリ切落ス時（ヤエイ）トフ

ヤエイ

ヤエイ

打太刀



龍尾左ノ一本第十四圖

打太刀ハ直に地元を打ちの仕太刀ハ

龍尾左ノ一本第十三圖

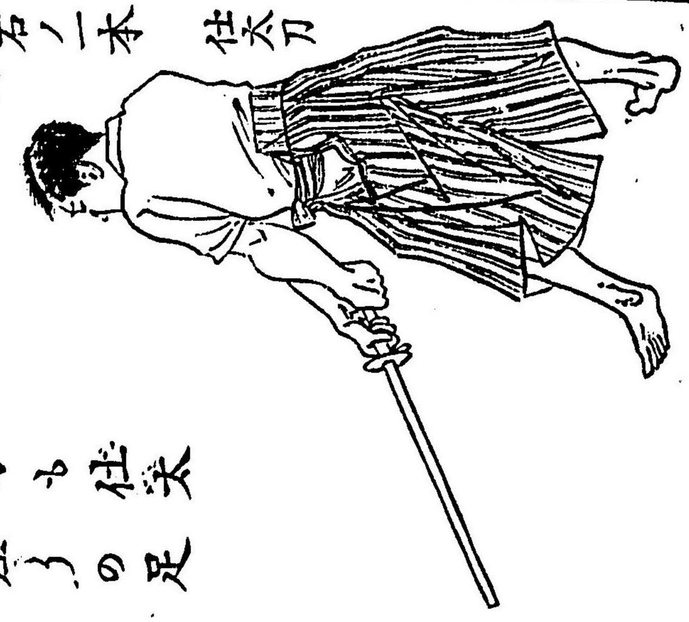
仕太刀

仕太刀ハ上段ふ取りこゝる韜を精眼ふ落に

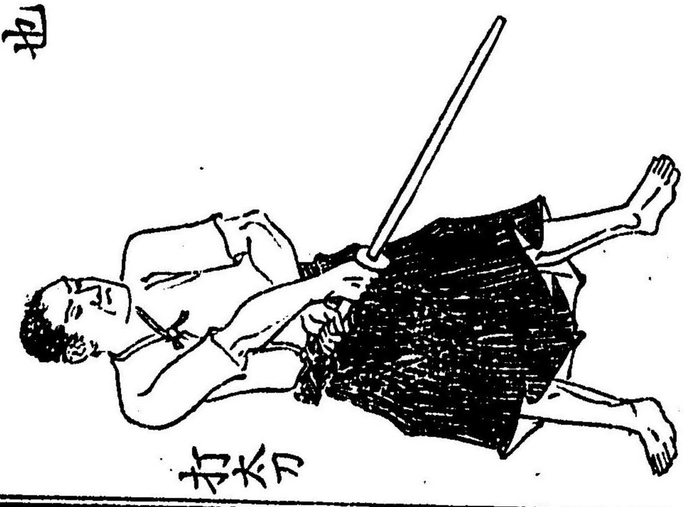
打太刀ハ切り落されこゝる韜を精眼ふ取り直に

打太刀

龍尾右ノ一本　第一圖

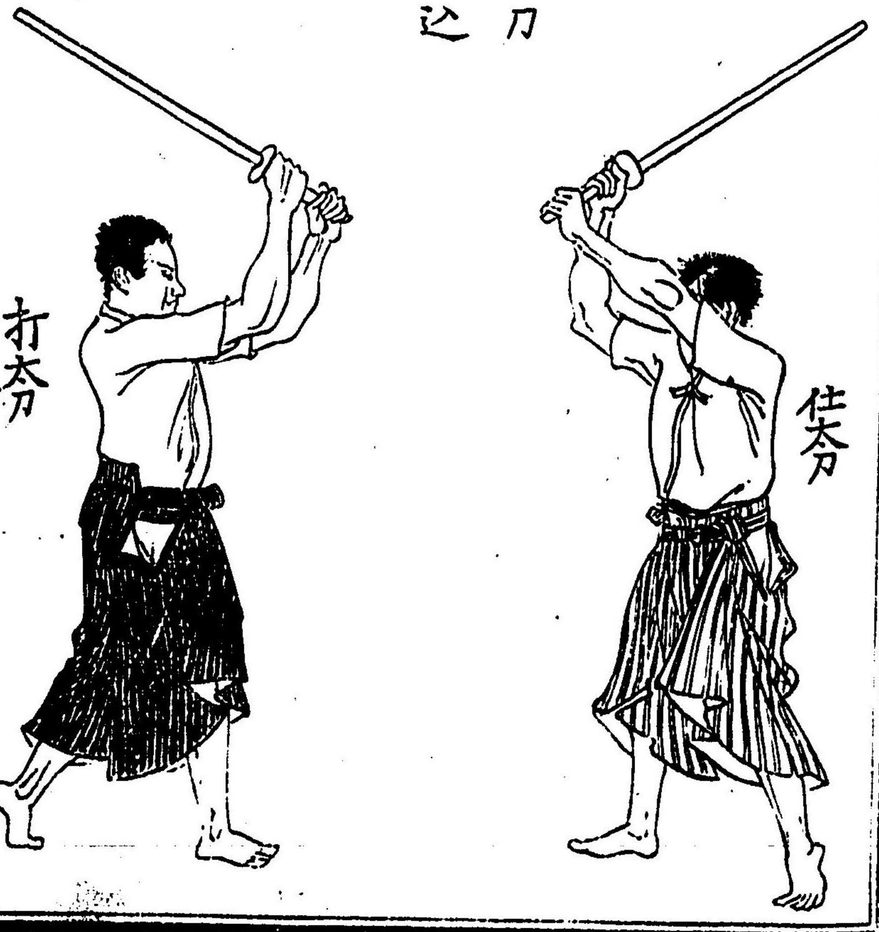


打太刀も仕太刀も左の足を踏込み圖の樣如く半身に構ゆる也



龍尾右ノ一本　第二圖

打太刀も仕太刀も右の足を踏込み上段に取る



龍尾右ノ一本第四圖

打太刀ハ仕太刀ガ左の足を踏込こふぐら韜を切り返し来るを

仕太刀

エイ

エイ

左の足を引ふぐら是ふ韜を打合に仕太刀ハ此一打ふて後の先の勝を得る也

打太刀

龍尾右ノ一本第三圖

打太刀ハ踏込こて面上の仕太刀の足を踏込こて打ふ

仕太刀

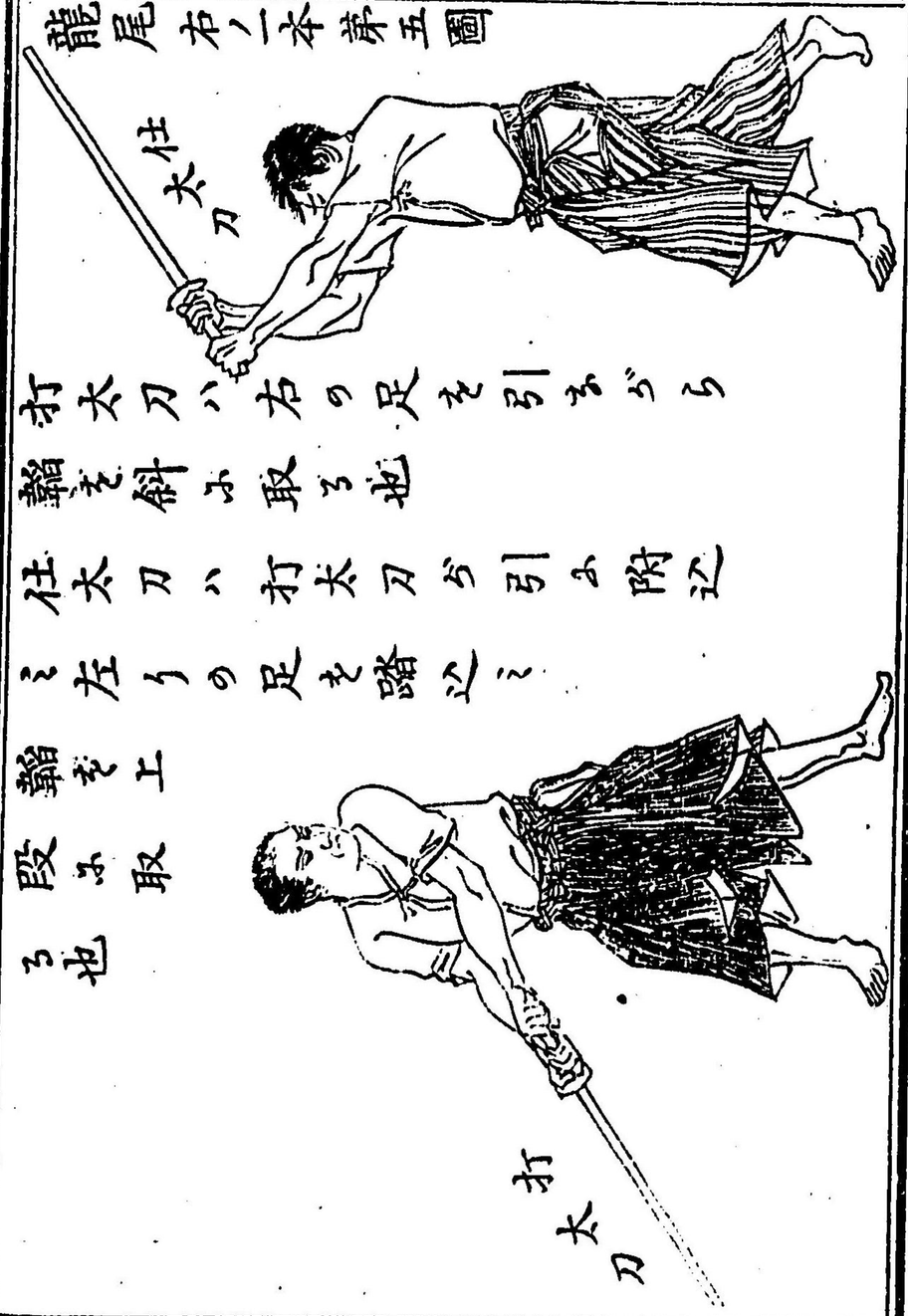
ヤア

ヤア

足を踏込こて打太刀の韜を切り返し一旗と打太刀の面上へ打込こて第四圖に至る

打太刀

龍尾右ノ一本第五圖



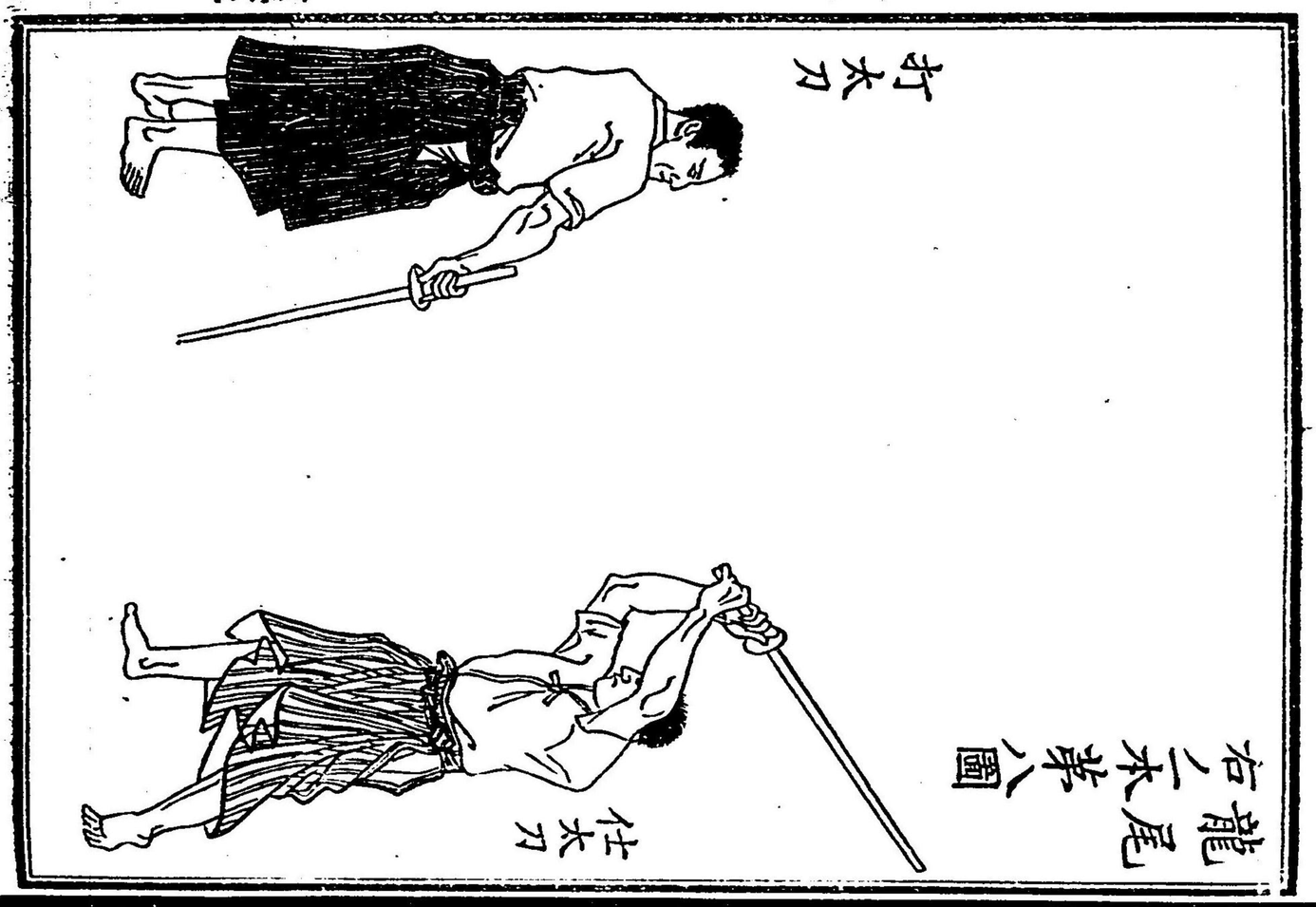
打太刀ハ右の足を引ながら
鞘を斜ゝ取る地

仕太刀ハ左りの足を踏込ゝ打太刀ら引ゝ附込
鞘を上段ゝ取る地

龍尾右ノ一本第六圖

打太刀ハ左りの足を踏込ゝ仕太刀の左りの足を拂ふ

仕太刀ハ打太刀ゞ拂ふ左りの足を引八文字ゝ踏張り鞘を上段ゝ取る



右龍尾二本第八圖

龍尾右ノ一本第七圖

打太刀ハ仕太刀の左りの甲手を右手ふて下ゝ切り切り上りくる

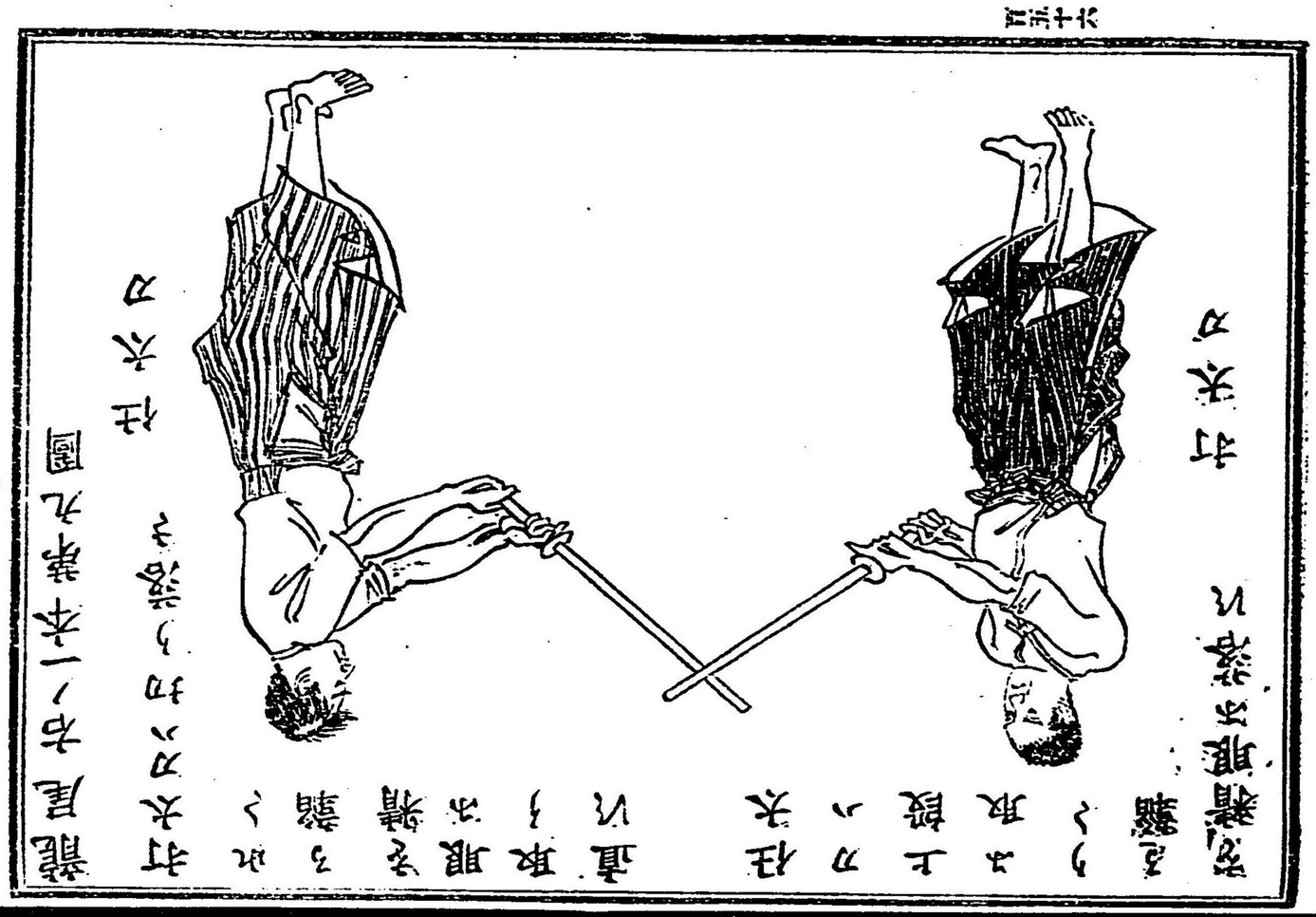
仕太刀

ヤエイ

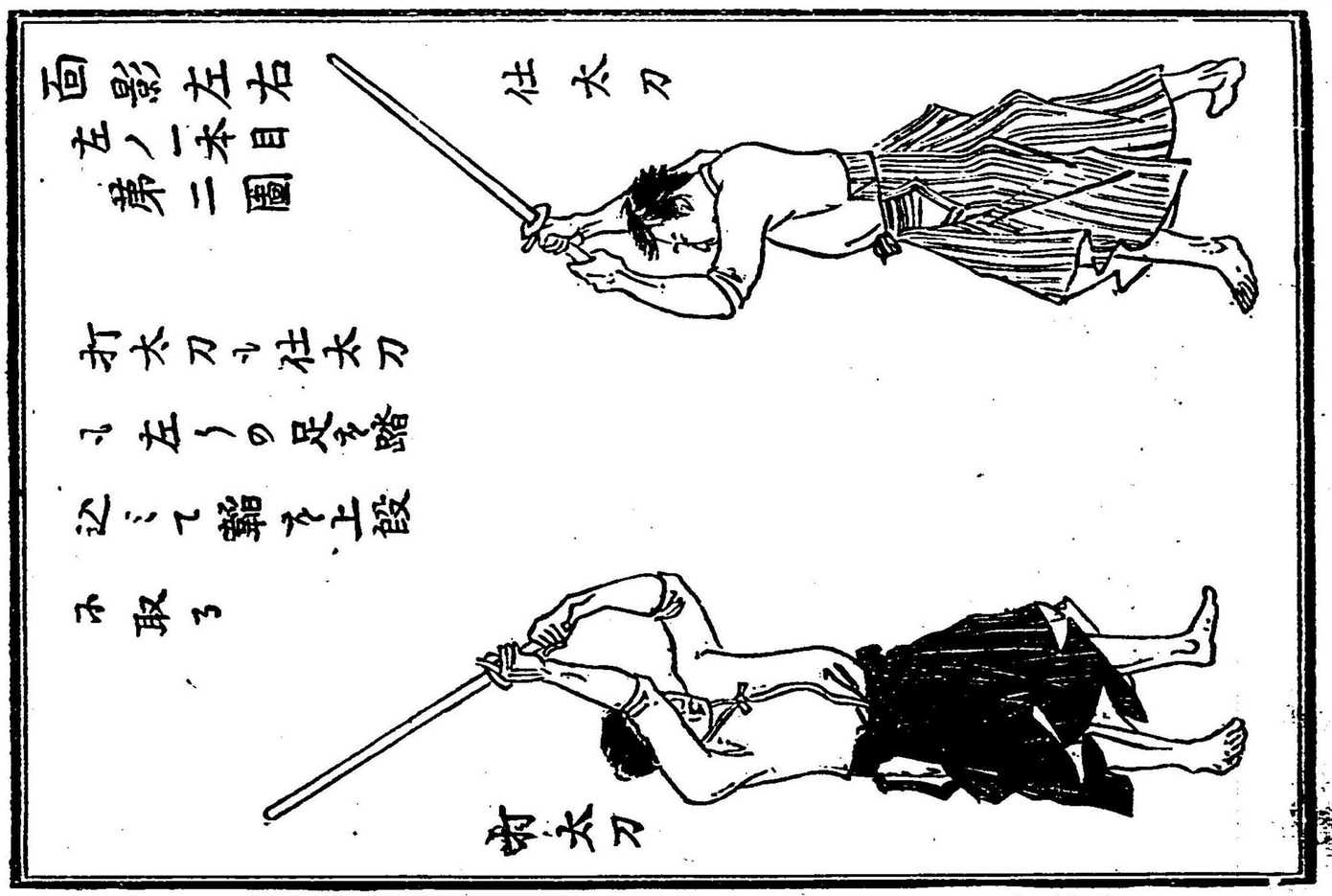
ヤエイ

打太刀

仕太刀ハ打太刀ガ左りの甲手を切り上ぐるを上段ゝ切り落し又上段ゝ取り第八圖の姿勢ゝ至る

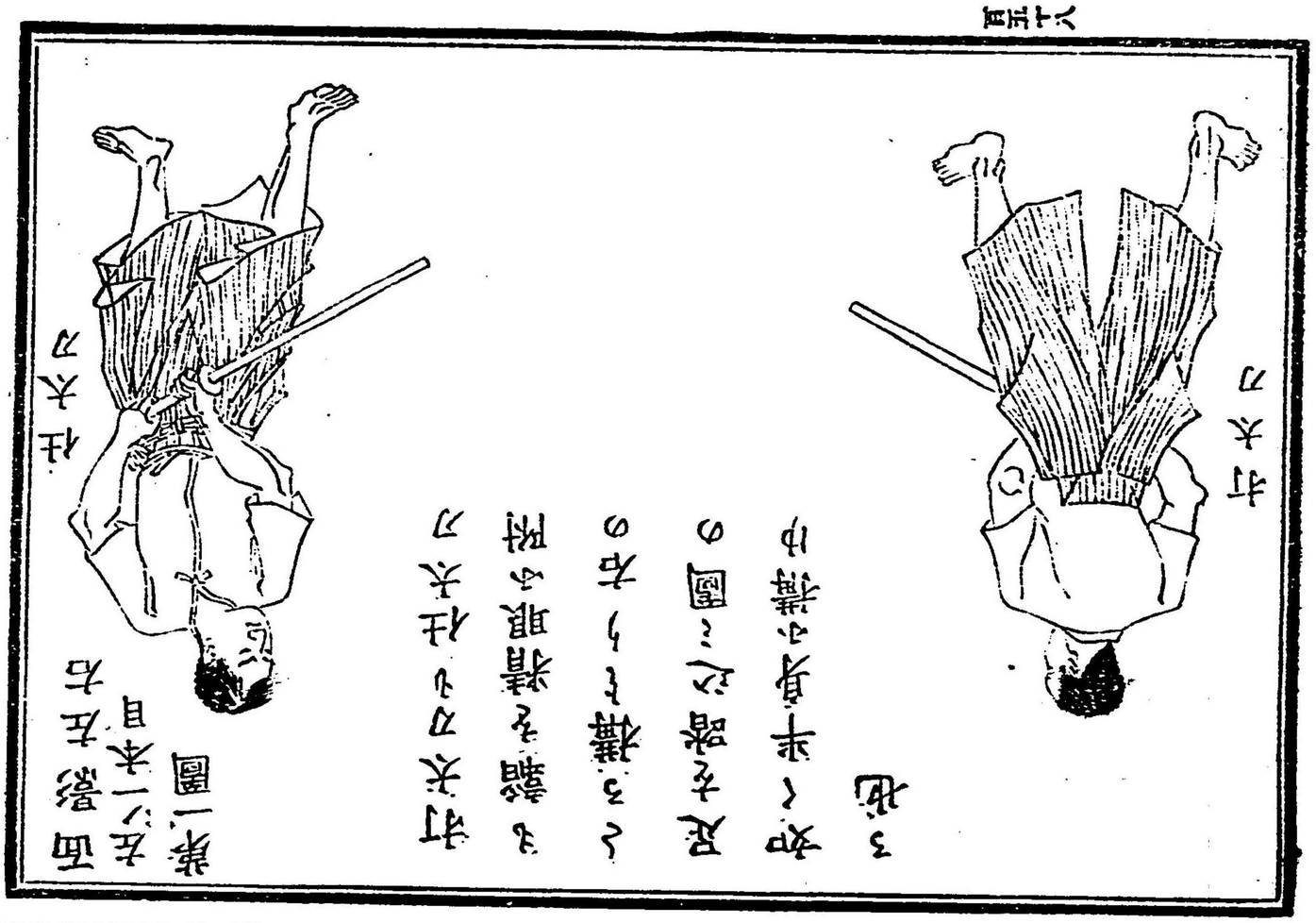

龍尾
石ノ一本
第十圖
打太刀も仕太刀も元の位ふ地ふ直る
仕太刀
打太刀

龍尾石ノ一本第九圖
打太刀ハ切り落さるゝ
直ち取足を踏ん張り
仕太刀
打太刀
踏込み上段ハ
仕太刀



面影左右
左ノ二本目
第二圖

打太刀ハ仕太刀
ノ左ノ足ヲ踏
込ミテ鞘ヲ上設
ス取ラ



面影左右
左ノ一本目
第一圖

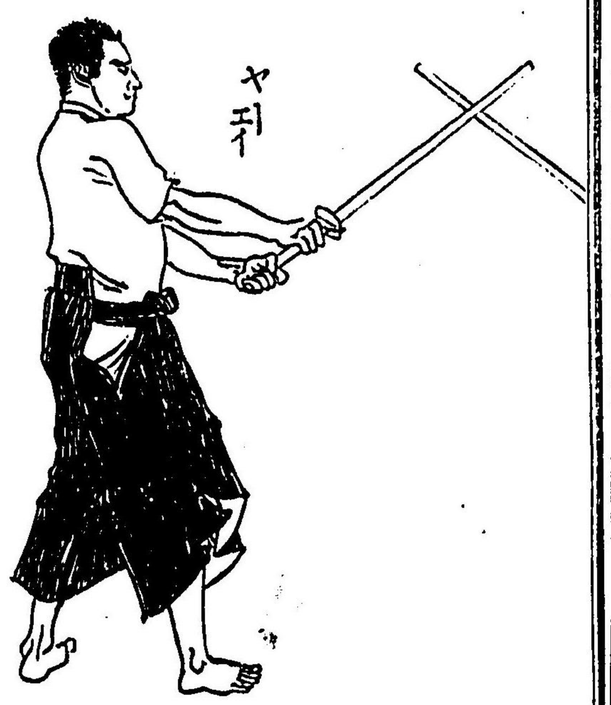
打太刀ハ仕太刀
ノ鞘ヲ踏ミ附
ミ左ノ足ヲ踏
込ミ柄ヲ上設
ス取ラ

面影左右左ノ一本目第三圖

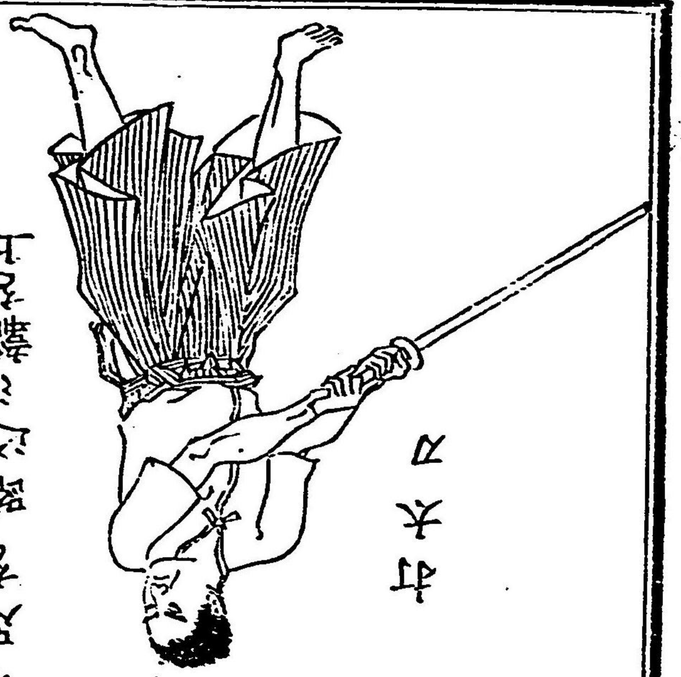
此一ト太刀ゝ面影といふ名の主こ
左り足を踏込上段ゝ取るゝ早〳〵間髪を不入と
いふて髪の毛一本の入るべき程の透も無く物影の
形ゝ隨ふ如く瞬速ゝ打込ミ仕太刀が先々の先の
勝を得る敎也然ルとも業ゝハ何の手も無く誠ホ
やさ〳〵き様ゝ思
へども氣合の甚む
つゝしき形あれバ
能く〳〵御脩行
あらんことを祈
ゝ

仕太刀

打太刀も仕太刀
も二圖の如く上
段ゝ取るゝより早
く右の足を踏込
ミ互ホ面上を目
懸け鞜を打出せ
は圖の如くゝ至る



打太刀



打太刀

段ニ取
ラ池

ミ左リの足を踏込ミ鍔を上
仕太刀

面影左右左ノ本目第四圖

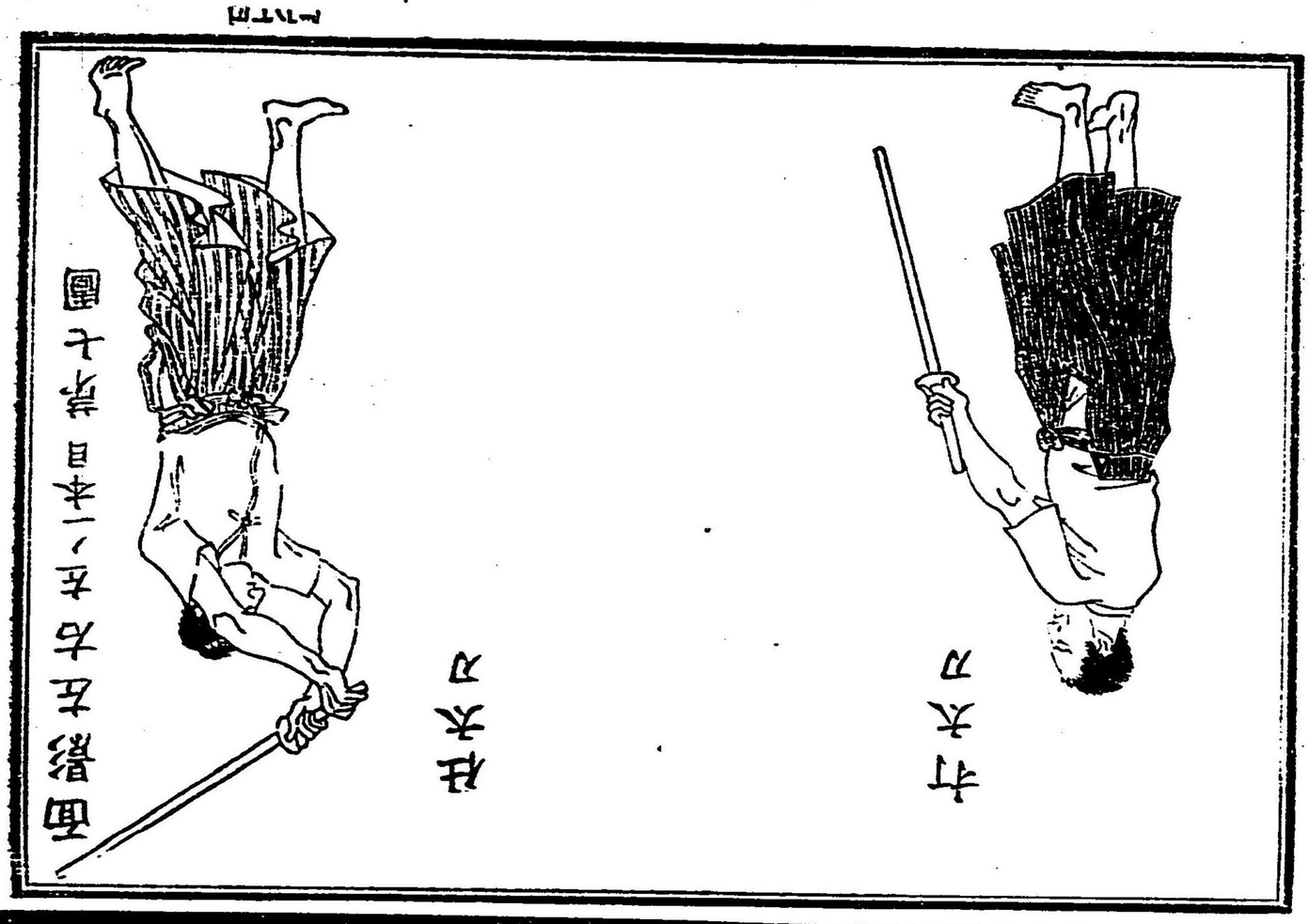
打太刀ハ右ノ右の足を引ふら
鍔を斜に取ラ池
仕太刀ハ打太刀ノ打太刀ノ引ハ附込
仕太刀

面影左右左ノ本目第五圖

仕太刀

打太刀ハ右の足を踏込ふら
仕太刀ノ左リの足を拂ふ
仕太刀ハ打太刀ノ拂ふ左リの
足を引ハ文字ハ踏張リ鍔を
上段ハ取ラ

打太刀



面影左右　左ノ一本目第六圖

仕太刀

打太刀ハ仕太刀の左りの甲手を右手ゑて下ゝ切り上ぐる

仕太刀ハ打太刀ゞ左りの甲手を切り上くるを上段ゝ切り落ゝ左りの足を引かゝら又上段ゝ取り第七圖の姿勢ゑ至る

ヤエイ

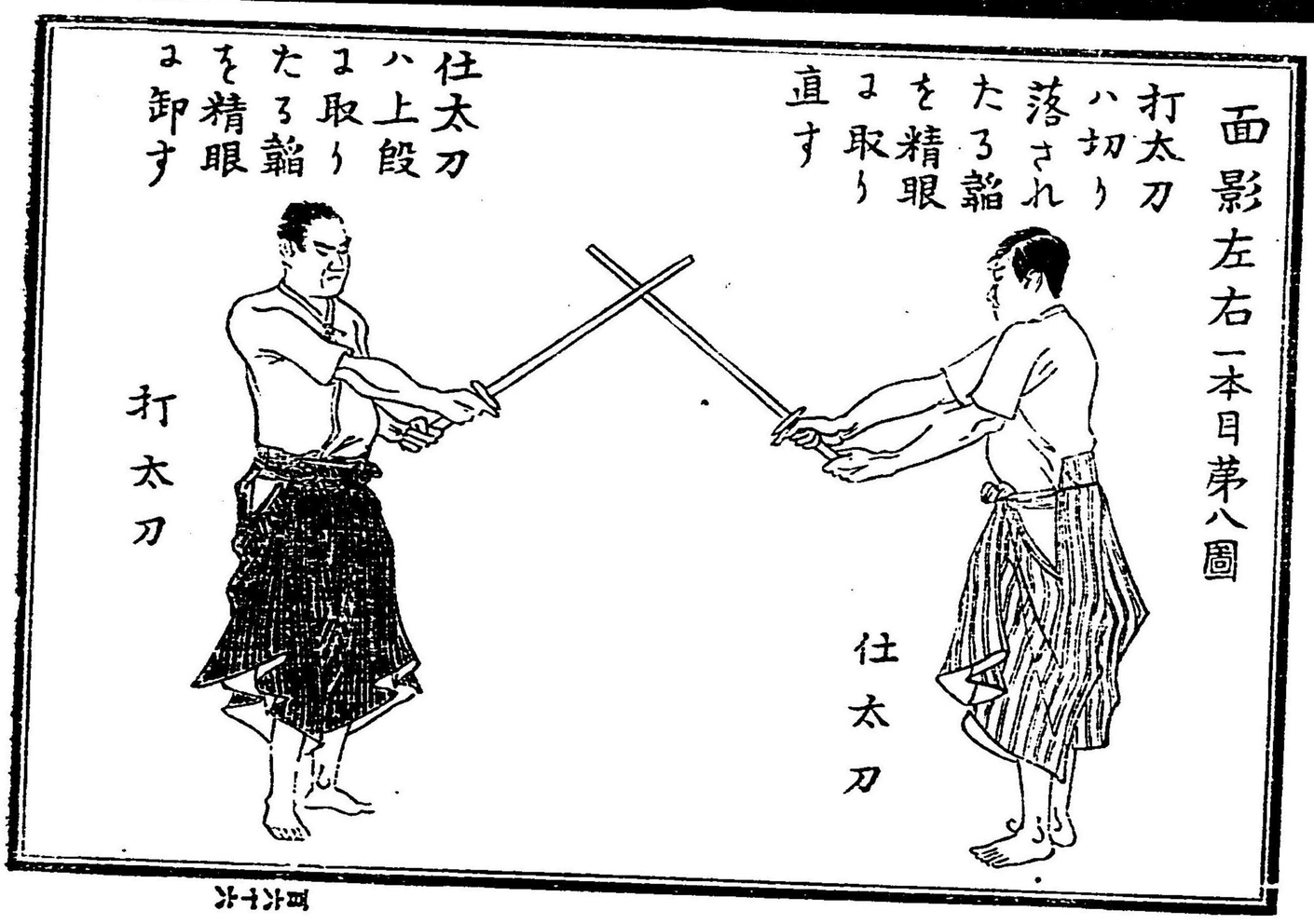
ヤエイ

打太刀

面影左右一本目第八圖

打太刀ハ切り落されたる鍔を精眼を取り直す

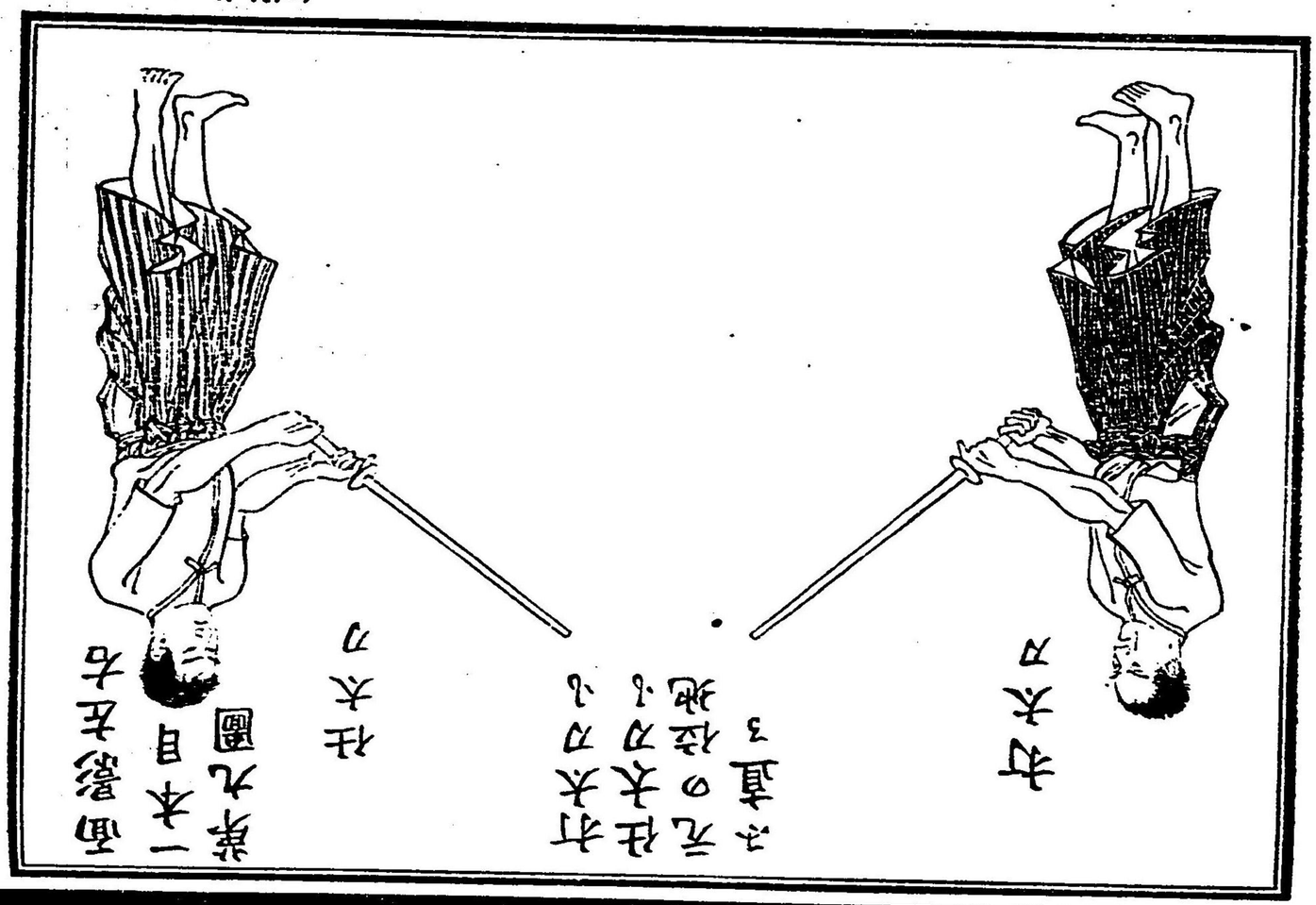
仕太刀ハ上段を取りたる鍔を精眼を卸す



面影左右一本目第九圖

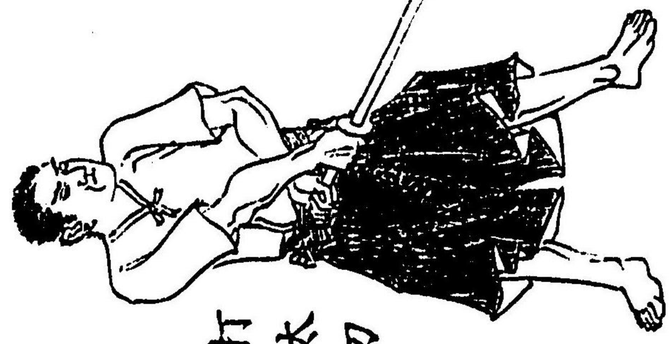
打太刀ハ元の位地に直る

仕太刀ハ



面影右ノ一本　仕太刀
第一圖

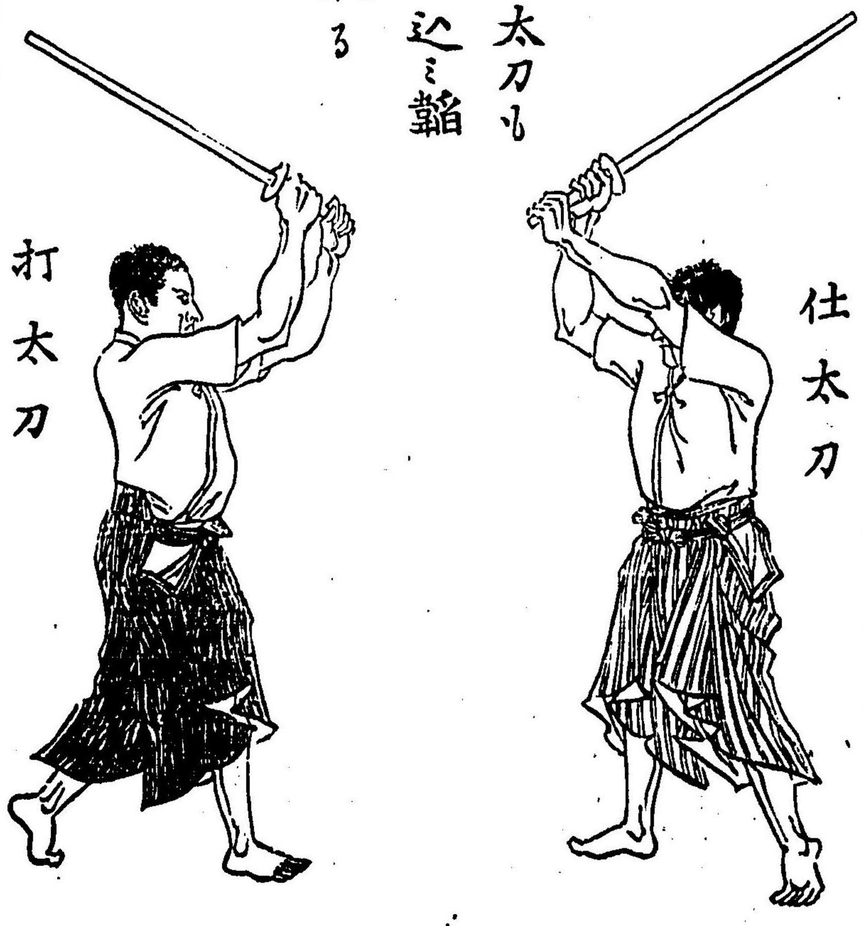
打太刀も仕太刀も
左りの足を踏込み
圖の如くに半身に
構ゆる



打太刀

面影右ノ一本
第二圖

打太刀も仕太刀も
右の足を踏込み
を上段に取る



仕太刀

打太刀

面影右ノ一本第三圖

掛聲　打太刀も仕太刀も最初竹刀を打合ぎる時（ヤエイ）打太刀仕太刀の竹刀を打返ぶ時（ヤ）仕太刀も是を又打返し上段ゑ取る時（エイ）といふ打太刀も仕太刀も二圖の如く上段ふ鞘を取る

とり早く互ふ面上を目懸け打合と同時ゑ打太刀ハ仕太刀の竹刀を打返ぶ仕太刀は㊀

仕太刀

打太刀

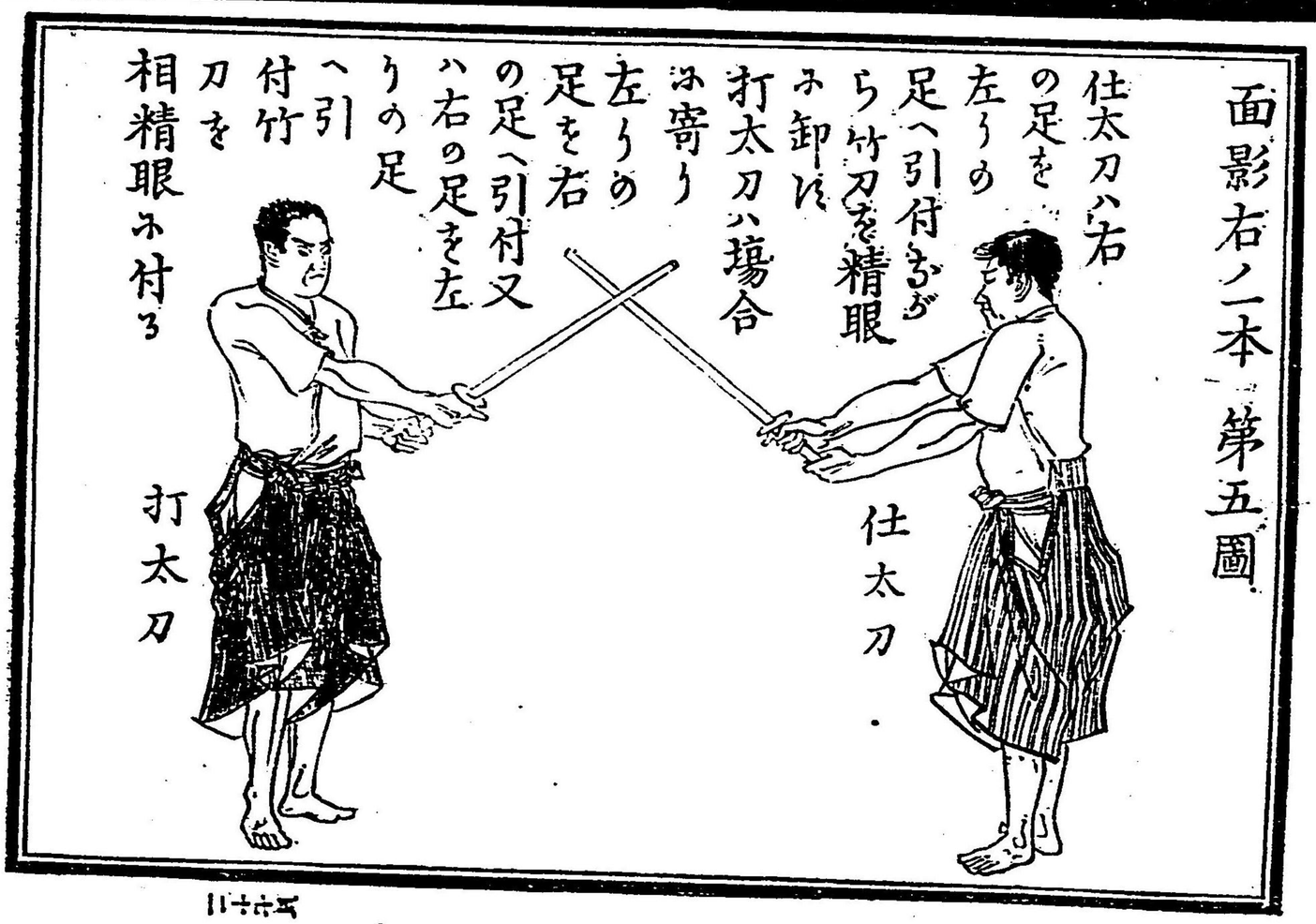
㊁是を又打返し左りの足を引ふから竹刀を上段ゑ取きハ第四圖の姿ゑ至る

面影右ノ一本第四圖

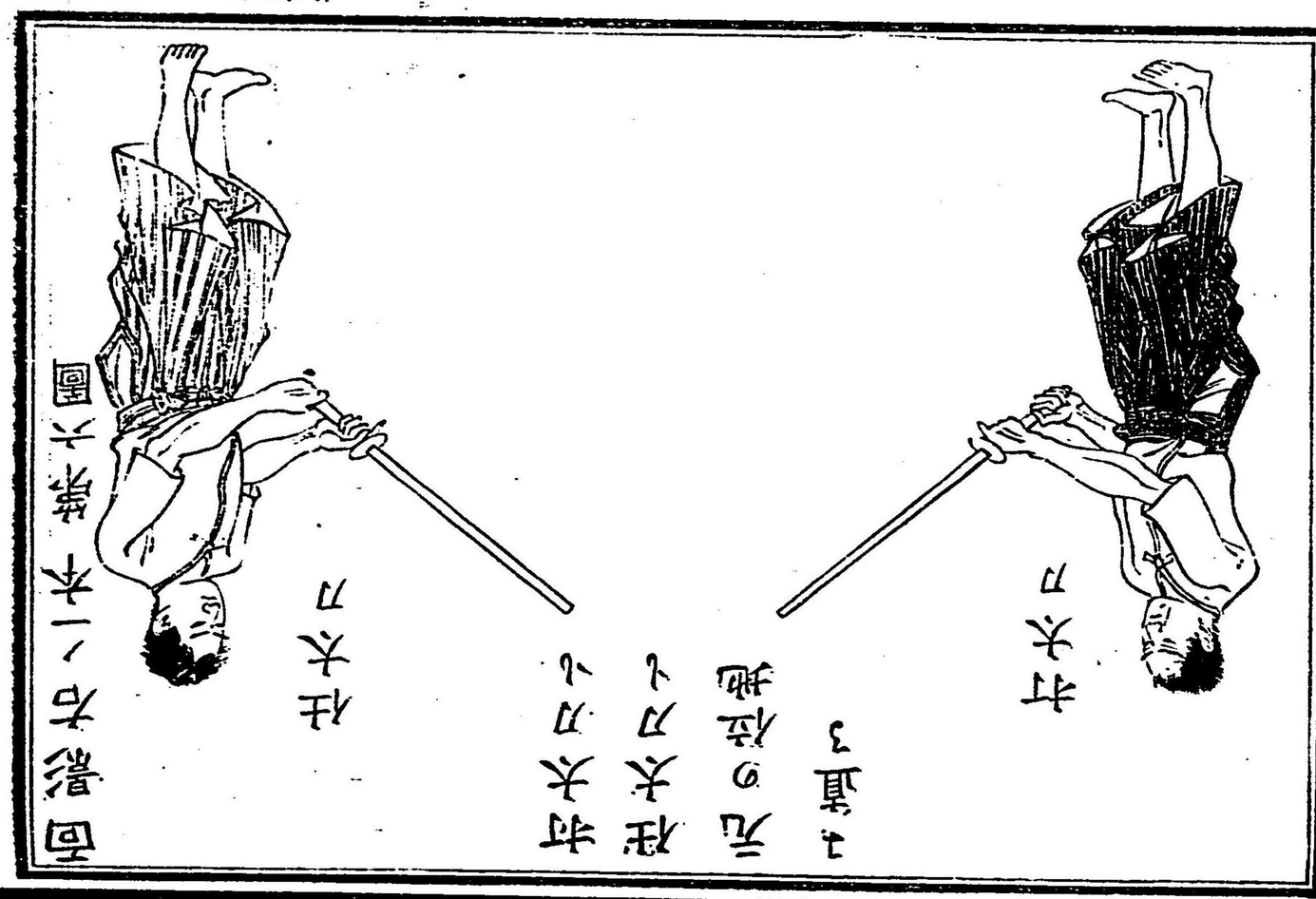
仕太刀

打太刀は左りの足を引ふから竹刀を上段ゑ取ぎ

面影右ノ一本　第五圖



面影右ノ一本　第六圖

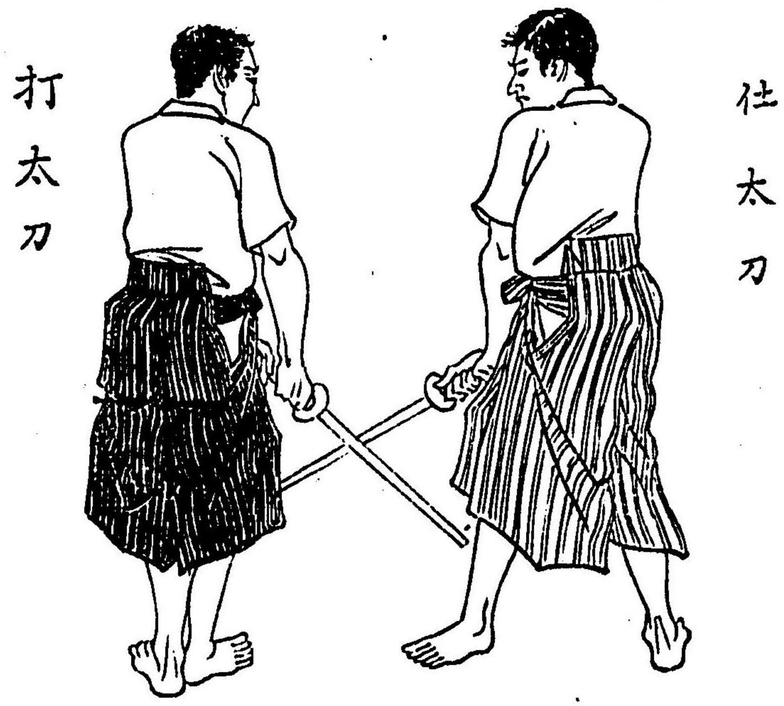


鐵破進退 一本目 第一圖

打太刀ハ仕太刀ヲ精眼の構ヒより打太刀ハ體を少〻左りへ斜ふ向け左りの手ハ柄を握り〻こる儘拳を腰骨の上ニ當て圖の如く竹刀を水平ふなし切先を仕太刀の服部ニ付る仕太刀ハ右の足を踏込て竹刀を上段ニ取る

鐵破進退 第二圖

打太刀ハ第一圖の構ヒより足を右左り右と踏込ミ左りの足を右足ニ引付ふぶら仕太刀の腹を突く仕太刀ハ右の足を後ろへ圓形を画をるう如くふ引回ハ一體を右向きふなし一打太刀ガ突込む竹刀を打落を也



鐵破進退

打太刀ハ打落されさる竹刀を逆斜ふ取ふぐら右左りと足を後へ引

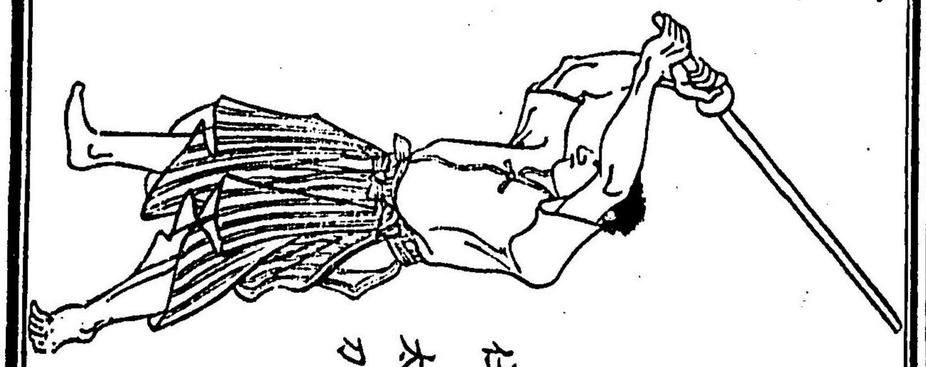
仕太刀ハ打太刀ゲ引ふ附込ミ右の足を踏込竹刀を上段ニ取る

第三圖

仕太刀ハ打太刀ノ籠手ヲ切ラントスルトキ一足ニ切込ム

打太刀

打太刀ハ仕太刀ノ足ヲ拂ヒ仕太刀ノ足を



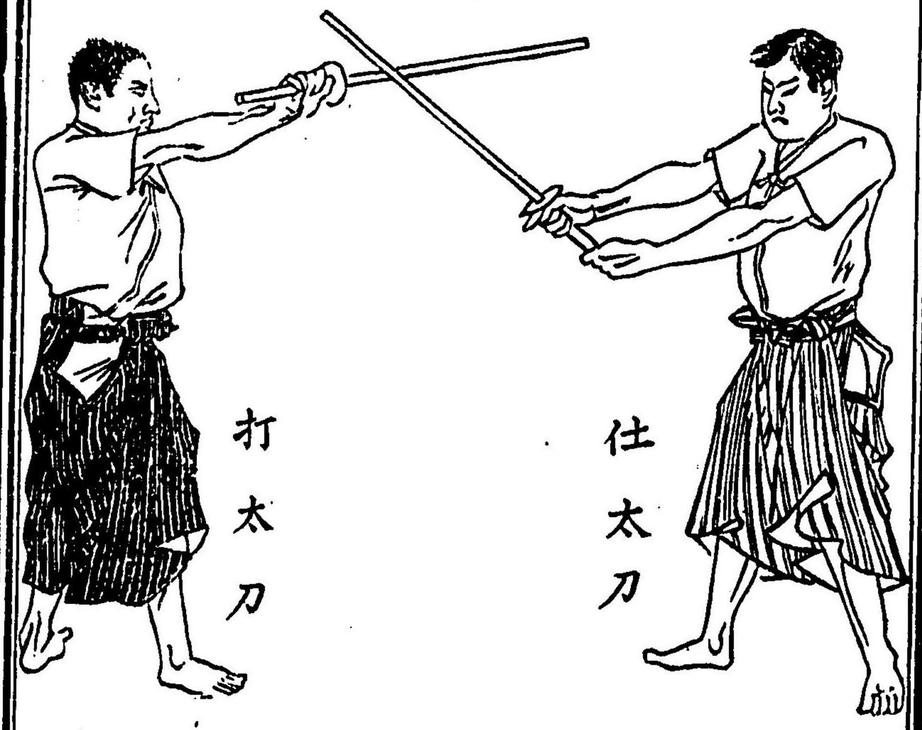
仕太刀

鐵破進退第四圖

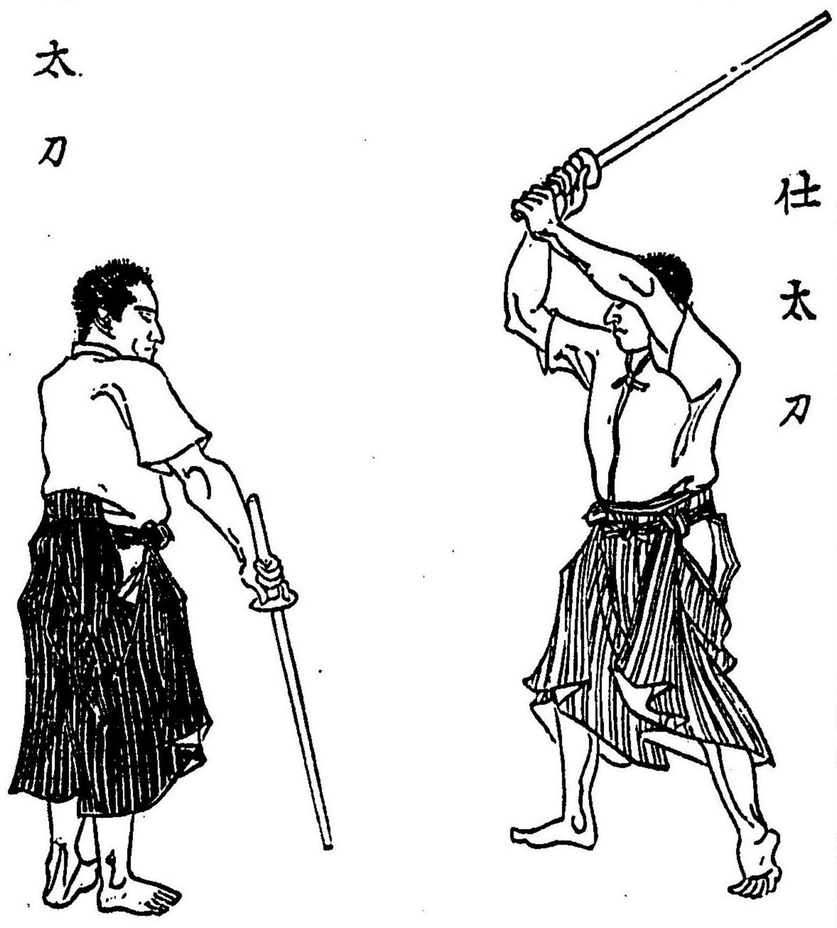
鐵破進退第五圖

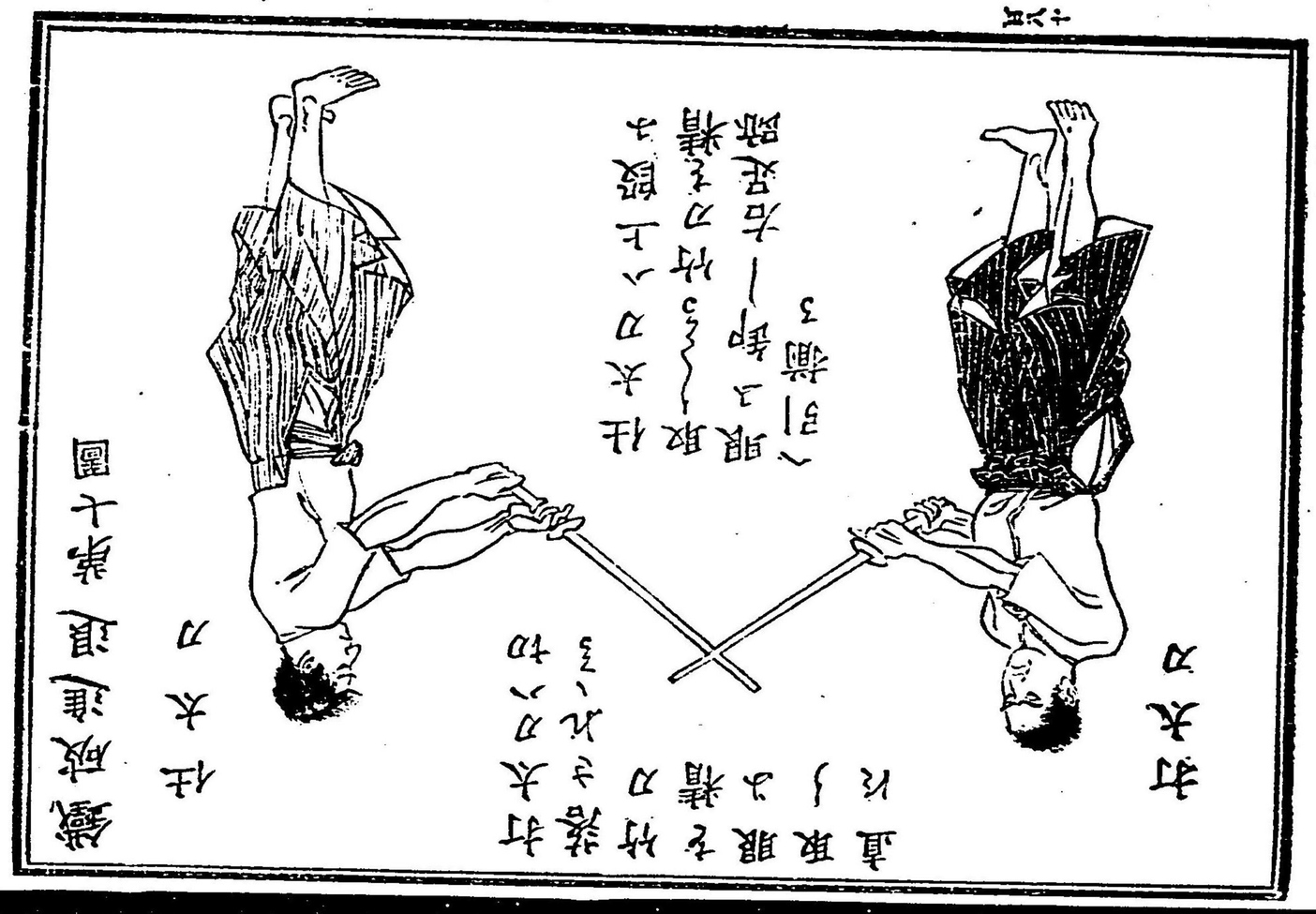
打太刀ハ仕太刀ガ左りの甲手を右手ゐて（ヤエイ）声撓け下ゝ切り上くる

仕太刀ハ打太刀ガ左りの甲手を切り上るを上段ゝ（エイ）と聲掛け切落しゐゝ又上段ゐ取きば第六圖の姿勢ゐ至る



鐵破進退第六圖



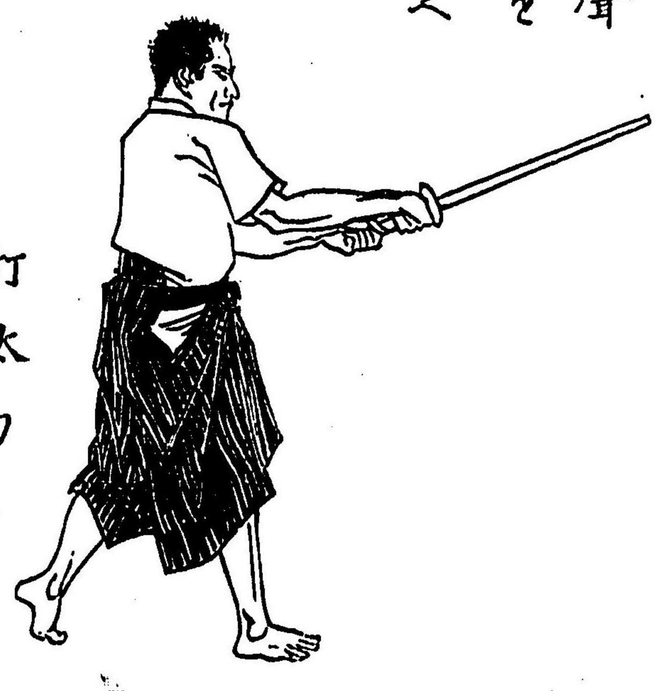

鐵破進退第八圖
仕太刀
打太刀
打太刀も仕太刀も元の位地に直る
仕太刀
直取眼を付落打太刀に引き精力を入れうつ
打太刀
仕太刀
鐵破進退第七圖

鐵破進退 二本目第一圖

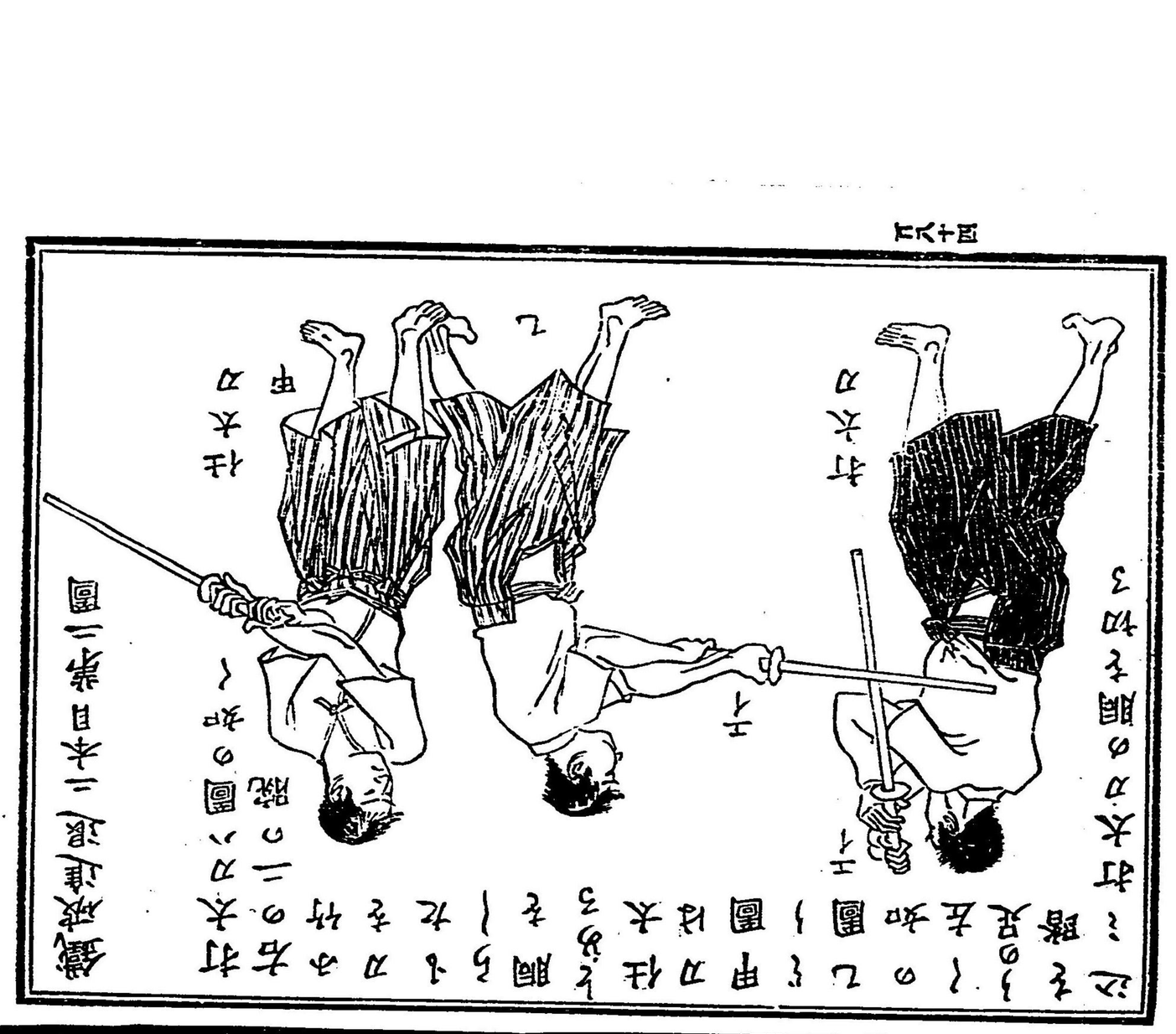
打太刀ハ右の足を少し踏出し精眼ニ付る
仕太刀も同時ニ右の足を踏出し上段ニ取る
打太刀右
左り右と
三足踏込
ミ仕太刀
の左りの

仕太刀

の甲手を（ヤエヤ）聲
掛おゝら押んとするを
仕太刀ハ右の足を左ゝ
寄せおゝら（ヤエヤ）
と聲掛け打太刀
の竹刀を拂ひ第
二圖の甲圖の姿
勢ニ至る



打太刀

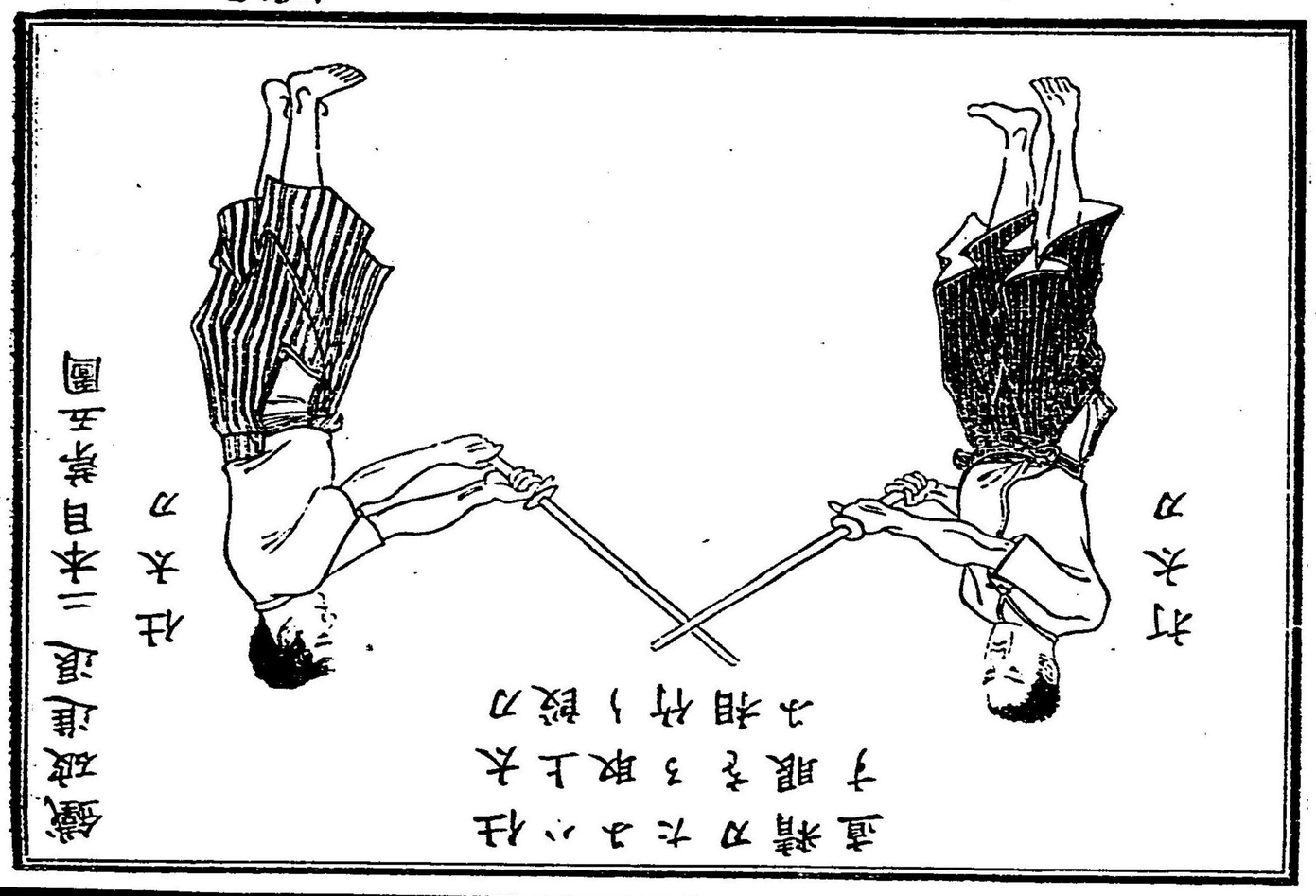


鐵破進退二本目第三圖

打太刀ハ左り足を左り〳〵寄ながら胴を切る竹刀を拔と仕太刀の面上を切て仕太刀ハ打太刀の竹刀を止め同時に打太刀ハ左り足を後へ引ながらの足を是を打返し左り足を上段ニ取此時竹刀を上段ニ掛け（十二人）と聲掛け

鐵破進退二本目第二圖

込踏そりの足左如圖り圖は太ゆう胴らゝたをけ右打太の二の院の如く

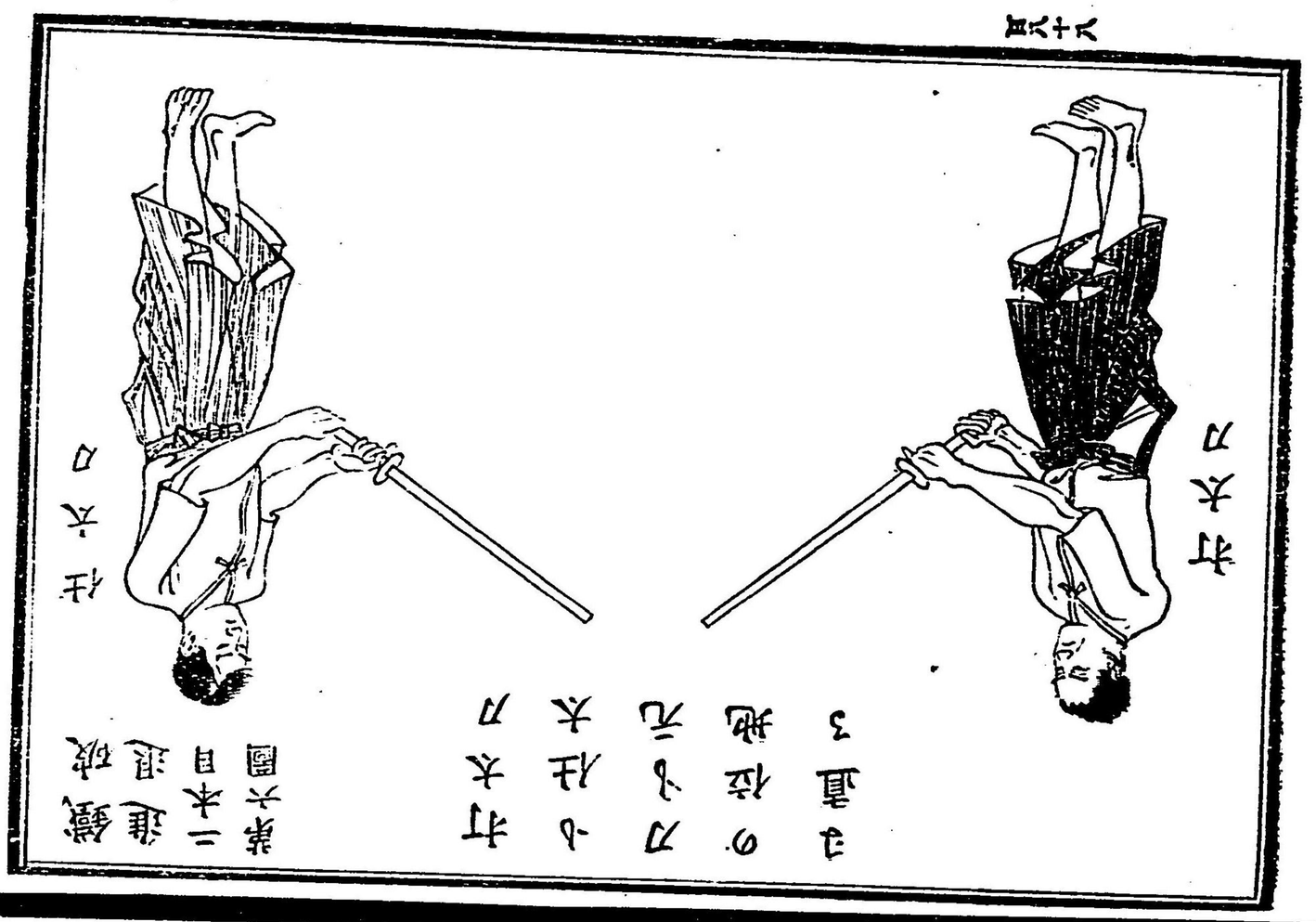


鐵破進退 二本目第四圖

仕太刀

打太刀ハ仕太刀ガ竹刀ヲ上段ニ取ると同時ニ右の足を踏出し（えい）ら（エイ）と聲掛け精眼ニ付る

打太刀



鐵破進退　三本目第一圖

打太刀ハ右の足を踏出し竹刀を猶精眼ふ付る仕太刀ハ同時ふ竹刀を上段ふ取り右左と右と三足進ミて相精眼ふ付れハ第二圖の姿勢ふ至る